

仮面ライダーアマゾン  
ズ —?uin?uennium—

エクシ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

M  
t  
o  
N

水澤悠と鷹山仁の戦いから千翼とイユの出会いまでの5年間。

本編では描かれていなかつた空白の期間に現れたアマゾンを食らうアマゾン 尾宿  
商。

コツパタイプと呼ばれる彼の出現によつて野座間製薬、4C、駆除班、マモル率いる  
アマゾンたち、そして宗教団体 イースヘブンは混乱の渦に巻き込まれていく。

アマゾンプライムビデオで配信されている仮面ライダーアマゾンズのSeason  
1からSeason 2の間にある空白の5年間に起こつたことを小説にしました。想

像で作ったものですのでどこかしら本編と矛盾するところが出てくるかもしれません  
が、そこは温かい目で見て頂けると嬉しいです。

### a f t e r Z

溶原性細胞のオリジナルを狩つてから5年後。

野座間製薬の開発したワクチンと4Cのシグマ隊の駆除によつて溶原性細胞の一件  
が一段落した今、新たなアマゾン細胞 寄生型細胞によつて人々は再びアマゾンの危機  
に晒される。

そしてアマゾンアナザーオメガとアマゾンニューアルファの登場で物語は終局へ向  
かつていく。

こちらはSeason 2の最後から5年後の話となります。こちらは完全に想像で  
つくつたものですので仮面ライダーアマゾンズ THE MOVIE 最後ノ審判と  
は食い違う内容となっています。あくまで私の自己満足で書いたものだということを  
ご了承下さい。

また after Zは訳ありまして小説の数が減っています。詳しくは

お久しぶりです

のタイトルの活動報告をご覧ください。

文章力がないため、稚拙な文になってしまいます。なるべく台本形式にはしないようにしたいのですが、何せ文章が下手なのでたまにそういうところも出てきてしまうかもしれません。ご了承ください。

また現在配信中のところまでのネタバレがございますのでまだ見ていない話がありネタバレが嫌な方は閉じることをオススメします。

三

次

			M t o N	E p i s o d e 1 「M A r t y r s 」	a t i g u e 」	E p i s o d e 6 「M e n t a l 」	s i n s t i n c t 」	
Episod e 5	69	47	S B e h a l f 」	E p i s o d e 2 「M o n s t r o u 」	E p i s o d e 7 「M o m e n t o u 」	E p i s o d e 8 「M e a n i n g 」	E p i s o d e 9 「M I s t a k e s 」	
Episode 5	69	47	C a u s e d b y t i a l o c a	E p i s o d e 3 「M a t t e r s 」	S G l i t c h 」	S G l i t c h 」	S G l i t c h 」	S G l i t c h 」
Episode 5	69	47	O w n w i t h c l a r i t y 」	E p i s o d e 4 「M u t i n y a 」	20	20	145	120
Episode 5	69	47	O w n w i t h c l a r i t y 」	E p i s o d e 1 「M a x i m u m 」	189	189	97	97

Last			gh	t	E	p	i	s	o	d	e	1	2	『	M	o	o	n	L	i	228				
Episode	『	Parasite	r	a	L	a	s	t	g	h	t』	E	p	i	s	o	d	e	1	2	『	M	o	o	n
Episode	?	e	e	f	Episod	e	res	af	in	gh	t』	Episod	e	res	af	in	gh	t』	Episod	e	res	af	in	gh	t』
Episode	?	374	335	293	episode	』	episode	fter	ing	ht』	episode	』	episode	』	episode	』	episode	』	episode	』	episode	』	episode	』	
uin					episode	』	episode	Z	Me	』	episode	』	episode	』	episode	』	episode	』	episode	』	episode	』	episode	』	

?  
u  
e  
n  
n  
i  
u  
m  
\_

# M t o N

## E p i s o d e 1 「M a r t y r s」

9月の曇り空の中、教会に続々と人々が閉じた傘を手にして入つていく。

全員黒いローブを羽織つて怪しげな雰囲気を醸し出している中、1人落ち着きのない男が左手を使わずに右手に持った傘をわざわざ置いてからドアノブを右手で回して入ろうした。

「詰まつているから早く行つてもらえる?」

「あー、どうもすいませんね。」

後ろで待つている女性に言われて入つていく男。横の傘立てに自分の傘を置いてから教会の奥まで歩いていった。

中は一面ステンドガラスで覆われており、西洋の立派な教会と言つても遜色ないような美しさなのだろう。しかし蜘蛛の巣があちこちにかかつてていることからせつかくの作品が少し汚らしく見えてしまう。

男もキヨロキヨロと辺りを見回して「綺麗だなあ…これ作るの、いくらかかるんだろ。」なんて呟く。

20人前後の人数が全員教会の中に入ると最後に入ってきた人が扉の鍵を閉め、チエーンを何重にも巻き付けた。その後、扉の横にあるスイッチを押すとチエーンに電気が流れた。

「戸締り完了しました、教祖様。」

最後の人が前の檀に立っている教祖と呼ばれる男性に声をかけると、教祖も頷き両手をあげた。

「では皆さん、ご着席ください。」

教祖に従つて人々は木で出来たベンチに腰を掛ける。ステンドガラスの値段を計算するのに頭がいっぱいだつた漢も周りが腰を下ろしていることに気が付いて席に着く。

「皆さん、またよく集まつてくれました。しかし悲しいお知らせがあります。反矢さん

ご一家が“奴ら”に襲われてしまい、神の元へ行かれました。」

教祖の言葉に一斉に涙する人々。男も周りに合わせて手で顔を覆う。

「反矢さんは今神に守られていらつしやいます。皆さん、信じましょう。私たちも“奴ら”に食われることで神の元に行けるのです。恐ろしいでしょう、しかし痛みは一瞬です。私たちはその救いを待つしかないのです。」

教祖の言葉に嗚咽をあげて泣く者たちも現れた。

(どうにかして食われないようにしようつて考えは思いつかないのかね、この人たち  
は。)

男は手で顔を隠しながら思うも一般の人々にとつて“奴ら”は恐怖の対象であり抵抗する気すら起きないのだろうと察した。

祈りが始まり泣き止む人たちがいる中、突然協会の扉が吹き飛んだ。爆音に悲鳴を上げる人々たち。赤い光が3つほど煙の中から見える。

「皆さん、覚悟を決めるのです！」

教祖の言葉を聞く前に逃げようとする人々だったが“奴ら”から逃れる逃げ道は“奴ら”が経つた今破壊し、瓦礫でふさがれてしまった。

「おいおい：冗談じやないよ。」

辺りの人々と違つて恐怖からではない震え、武者震いをする男が右手で自分の左手のくるぶしを握る。

煙が収まつていくと左腕の銀色の腕輪　アマゾンズレジスターが赤く光つている怪物が3体近づいてきた。

人々の中には勇気を振り絞つて鉄パイプで襲い掛かる者もいたがそんな攻撃は効くことなく怪物に無残にも首筋を噛み切り殺されていく。

赤い血は黒いローブに染み込まれたことで目立つことないものの、その出血の量は尋常ではないのがわかる。襲われた人々は即死だろう。

怪物は抵抗する者を一通り襲い尽くすと今度は建物の方で震えていた人々に

ターゲットを変えた。端にいる眼鏡の男性に飛びかかる怪物は男性を襲いながら口から糸を出して拘束する。

「ひやあああ！！た…すけて…。」

糸で口を縛った後に首筋に噛みついて肉を千切る。大量の血が噴き出しステンドグラスが真っ赤な血で覆われた。他の人々も自分がこうなるということを想像するだけで手足が動かなくなる。

怪物が眼鏡の男性“だつた肉”を食い散らかし終えた後、動けなくなっている人々の方を向いた。

「教…祖…様あ…！」

辺りを見回しても教祖はいない。どこからか逃げたのだろうか？そう終わりだと目をつぶつたその瞬間、怪物の頭部が何者かによつて胴体から切り離された。

それはほんの一瞬の出来事。

人々も何が起こったのかわからなかつた。見えたのは黒い影と青い一筋の光。あと

の2体の怪物たちも威嚇しながら辺りを見回して警戒をする。

もう1体の怪物が警戒を止めて人々をまた襲おうと近づいた時、先ほどの黒い影がどこからともなく現れ怪物に襲い掛けた。

蜘蛛を模した怪物は黒い影に襲われ手足を挽がれる。そこから流れ出す黒い血を気に留めることなく黒い影は蜘蛛の怪物に噛みついていく。やがて蜘蛛の怪物はただの肉片となつて黒い影に食いつくされた。

残つた1体の怪物は本能で恐怖したからか教会から逃げ出そうとしたが、背を向けたその瞬間、胴体が真つ二つに切断され、断末魔を上げる事なく床に落ちた。まもなくしてその体は液状に変わる。

黒い影は液状になつた怪物の姿を見つめている。自分の左手を握っていた男は黒い影を見ながら呟いた。

「アマゾン…！」

トラロツク事件から6ヶ月が経つても世間から野座間製薬へのバッシングは続いて

いる。そんな野座間製薬の子会社 ノザマペストンサービスの“清掃班”として働いていた青山は空きオフィスの清掃を命じられていた。

「あー、青山さん。塩素系洗剤で拭いたところを酸性洗剤でまた拭こうとしないで下さいよ。特定有害生物関連以外で死なれるところちがかなり迷惑するんで。」

“政府の狗”に叱られるのはなぜかイラつとくる。一応政府側の警視庁特殊部隊員だつた志藤や福田はそんな嫌味な感じはなかつたが…。

「お前の言い方はいちいちムカつくな、札森。」

「アンタら野座間製薬が余計なことしてくれたおかげで政府はホント迷惑してんすよ。これぐらいパシられても仕方ないでしょ。」

「公務員とは思えない口ぶりだな。衛生省の人間ってのはこうも偉そうなやつばつかなのか？赤松もいちいち上から俺たちを見下してくる。」

「衛生省っていうか政府の奴なんてそんなもんですよ。赤松さんは自衛隊の幹部候補でしたけど誤射による事故でウチに飛ばされちゃいましたから卑屈にもなりますよー。」

札森は伸びきっていない髪をかき上げながら青山を見下ろして掃除の続きをさせた。  
 青山が清掃をしている場所は日本政府と野座間製薬の共同出資によつて設立された  
 「特定有害生物対策センター」（通称「4C」）のオフィスになる予定だ。  
 まだ予算が少なくこの規模の場所しか借りれないと札森は嘆いていたが、数人で構成  
 される4Cにしては大きめのオフィスだと青山は思つている。

「ところで俺と札森、それと赤松、白木さん以外に誰が来るんだ？」

「あー、今んとこそれだけです。」

「は…？」

「あとはリストラにあつた野座間製薬元社員の方を雇うつて感じですかね、格安で。」

いちいち腹の立つ表情を見せてくる。こんな職場に留まつて本当によかつたのだろうか？とはいえた実際給料がいい。ギャンブル狂いだつた自分を戒めるにはちょうどいい所なのかも知れないと青山は野座間製薬に残ることにしたのだ。

しかし野座間製薬も事業縮小でノザマペストンサービスとして雇われていた青山は居場所がなくなつた。そこで4Cへの募集を見てすぐさま飛びついたのだ。

「あ、でもなんか女の子が4Cに入隊希望してましたよ。」

「女だと？確かに白木さんはうちにいるけど…。出来る奴なのか？」

「んーと…あつたあつた。」

札森がタブレットで4Cに志願していた女性の情報を出し青山に見せる。

「水澤…美月…！水澤本部長の娘さんじゃないか！」

清掃が一通り終わつたオフィスにはソファーアーが2つと小さなテーブルが置かれただけでガラリとしている。そんな中、美月はテーブルを挟んで小さい方のソファーアーに腰を掛けっていた。

「水澤美月です。よろしくお願ひします。」

「あ、いや本部長のお嬢さん…ですよね？」

大きい方のソファーに深く腰を下ろし、ダルそうにしている札森を突く青山は、美月に水道水の入ったコップをテーブルに置く。

「これしか今なくて…すいません。」

「そんな、どうぞお気遣いなく。」

「いえいえ…。」

タブレットのタッチの仕方で札森がゲームを始めたことが目に見えてわかる。美月に聞こえないように「いい加減にしろ。」と怒ると、札森は溜息をついてトイレに向かった。

「すいません、アイツ不愛想で…。」

「そんなこと…私の母のせいでこんなことになってしまったので仕方がないと思っています。」

「いや奴はそんなやつじや…。それより本気ですか？4Cの駆除部隊に入隊希望って。」「はい、私も戦いたいんです、アマゾンと。」

札森の持つていた資料によると美月の母 水澤令華は先日自身の家を売却したそ  
で美月も寮のある高校に転校させられていた。

しかしそこを自主退学、その理由は「4Cに入隊するため」だそうで…。

「えーっと…そこまで楽しい職場でないことは…?」

「勿論わかつてます。」

「高校…行かれたほうがいいですよ？自分も高校は中退しましたけどろくな人生じやあ  
りませんでした。」

青山が苦笑いで説得を試みようとしても美月の顔が変わることはない。

「あの…本当に危ないんですよ。」

「戦う選択肢は…アリだと思う。」

「？」

「その答えが本当なのか：知りたいんです。」

彼女の目はまっすぐ青山の瞳を見つめていた。

「戦う選択肢つて一体…」

青山が訪ねようとした時、札森が落ちそうなズボンを手で押さえながらもう片方の手でタブレットを掲げてトイレから飛び出した。

「出ました！出ましたよ、青山さん！」

「汚いからそんなことわざわざ報告しなくていいんだよ。」

「そつちもですけど今言つたのは特定有害生物の方です。」

青山が運転する輸送用バンは赤松が止めたと思われる黒いバイクの後ろに止められた。

アマゾンの目撃通報が入つたのは別荘地として有名なところに佇む古い家だ。既にこの中に赤松と白木が潜入しているようで、中から銃撃音が鳴り響いている。

「つたくあの人たちは勝手に行きますね、ほんと。一応司令塔は俺なんですけどね。」「司令塔なら司令塔らしくしてくれ。」

「はーい、じゃあ青山さんは赤松さんたちと合流してください。俺と水澤は車の中で待つてますから。」

そういうと札森は車の中に入つていった。本当に何のためにいるのかわからない。  
美月を連れてきたことも理解できなかつたが既に戦闘が始まつてゐるため、青山は赤  
松と白木の元へ向かう。

古家の扉を開けるとそこには黒い液体と青く光つたアマゾンズレジスターが放置さ  
れていた。

「覚醒前か…。」

奥へさらに進んでくとHK417と呼ばれる狙撃銃の銃撃音がより大きく聞こえる。  
札森の話だと覚醒前のアマゾンが3体ほどいるとのことだつたから、残りは2体ということになる。

青山もM16型の自動小銃を構えてリビングに入るため片手をドアノブに置いた。

とその瞬間を狙つて青い光を発するアマゾンズレジスターが付いたアマゾンの腕が青山の首を掴んだ。

その手に向けて自動小銃を発砲する青山。

「ぐああ！く：死ねええ！」

発砲し続けても襲い掛かってきたアマゾンは怯むことなく近づいてくる。いま生きているアマゾンはトラロツクに対する免疫があった“良個体”的アマゾン。ただでは死はないのだろう。

ノザマペストンサービスで駆除班でなかつた青山は弾丸の消費ペースが未だに掴めず、すぐ弾を切らしてしまうのが悪い癖になつていた。

（やばい、弾丸が尽きる！）

案の定、弾切れを起こしすぐに自動小銃を捨て逃げようとした時、隣の部屋から白木が手にしていたH & K M P 7を脇に挟みつつアマゾンに向けて射撃攻撃を繰り出す。

「大丈夫ですか！青山さん！」

「ごめん、白木さん。助かっただ！」

女性とは思えぬ勇敢さで青山を背にアマゾンに射撃を続ける。まもなくして心臓を捉え、アマゾンはその場に倒れた。

「よく覚醒前のアマゾンを探知できたな。」

「赤松さんが地道な捜査で見つけたみたいです。」

「さすが元エリートってとこだな。」

「あと1体を赤松さんが相手してます。ランクはBですからあまり油断できません！」

「すぐに行こう。」

青山と白木は中庭に出た。そこには女王アリアアマゾンと応戦する赤松の姿があつた。弾丸が尽きたようで赤松はサバイバルナイフを振り回してなんとか女王アリアアマゾンの攻撃から身を守つている。

「赤松！」

「……やつと来たか！さつさとアマゾン狩るぞ！」

「私の…私の仲間たちをよくも！」

女王アリアマゾンは怪物染みた声で、しかしどこか悲しそうに声をあげた。

覚醒前のアマゾンは正気を保っていることから言葉を発するというのは駆除班にいた“M”の資料から分かつていたが、こうも人間の言葉を発せられると駆除しにくいのが本音だ。

「でもそんなこと言つてられないよな…！」

弾を装填し自動小銃で女王アリアマゾンの首を狙う青山。しかし理性を保つている女王アリアマゾンは赤松の首を掴むとそれを盾にして狙撃されないようにした。

「動くな！こいつがどうなつてもいいのか!?」

「あ…赤松！」

「怯むな！撃て！俺のことは気にするな！アマゾンを殺すために：犠牲は厭わない！」

「そんな…赤松さん。私…。」

「撃てええ!!」

赤松は叫ぶも2人は銃の引き金を引くことは出来ない。とその時、耳にしていたインカムから札森の声が入ってきた。

『青山さん！もう1匹がその近くに来てます！』

「んだと!?白木！もう1匹が近づいてるつて！気を付けろ！」

「……この臭い…まさか！」

女王アリアマゾンが赤松を盾にしながら辺りを見回す。それは恐怖に怯えているような様子だつた。

「？」

女王アリアマゾンが左を向いたその瞬間。音を立てることなく黒い影が赤松のすぐ近くを通ると共に女王アリアマゾンの首が落ち、噴き出す黒い血が赤松の顔面を汚した。

「なんだ!?」

青山はすぐにその黒い影に向けて銃口を向ける。そこには未覚醒を示す発光をしたアマゾンズレジスターをつけたアマゾンが立つており、青山たちの方を振り向いた。

後ろには巨大な尾が付いており、その先には鋭い刃がついている。まさしくそれに名をつけるならば”サソリアマゾン”といえる。

「なんでお前：同じアマゾンを？」

「……。」

サソリアマゾンは女王アリアマゾンの頭部を拾い上げると触覚を引きちぎりムシャムシャと食い始める。やがて頭を全て平らげると今度は胴体の方に近づいていった。

頭部を食らうアマゾンのグロテスクな場面に目を背けたい青山たちもサソリアマゾンの動きに合わせて銃口の向きを変えていく。

サソリアマゾンが横たわった胴体を食らおうとした時、女王アリアマゾンの体は黒い液体に変化した。

「…くつそ。」

冷氣を発しつつサソリアマゾンは20代前半とみられる青年の姿に変わっていく。  
青山は思わず彼に声をかけた。

「お前は…誰だ？」

「…<sup>ばかり</sup>商。」

商と名乗った青年はその場に口から女王アリアマゾンのもう一方の触角を吐き出した。

## Episode 2「Monstrous Behalf」

商が千切った触覚と吐き出した触覚の2本は未だに少し動いている。商がそれを踏みつけるとまもなくして動かなくなつた。

『青山さん、赤松さん、白木さん。どうなつてるんすか? アマゾンの反応は消えましたけど。』

悪いが札森の通信に答えるほどの余裕はない。この商と名乗るアマゾン、かなりの凄腕だ。

「ゆっくり手を上にあげてその場にしゃがめ。余計なことはするなよ?」

さすがエリートの赤松。このような『異例』の状況にも冷静に対応している。とは言つても『異例』の状況のマニュアルはないわけではない。

ただ推定されていた『異例』の事態が起きるとはここにいる誰しも信じられなかつ

たのだ。

「もし人間に敵対しないアマゾンがいたら捕獲したまえ。」

上の人間からそう言っていた。まさか本当にアマゾンを狩ってくれるアマゾンが現れるとは…。

「……。」

商が動こうとする様子は全くない。もし抵抗するのであれば抹殺対象としてすぐに手にしている自動小銃で商をハチの巣にしなくてはならないため、銃口をまっすぐ商に向けていた。

「抵抗するのであれば撃つぞ！」

赤松が自分の自動小銃の弾を変えて今にも撃とうとしている。その時、中庭の奥の森から白いローブを着た人々が出てきて商を守るように囲んだ。

「なんだ、こいつら…！」

「どいて下さい！その男はアマゾンです！」

白木はこんな状況にしては相変わらず丁寧な口調で人々を誘導しようとするとする。

しかし白いローブを着た人々は手を広げまるで商目掛けて撃ち込まれた弾丸は全て自分たちが受けきるとでも言いたげな力強い目つきで4Cのメンバーたちを睨みつけていた。

「こいつらも撃つか。札森、こいつらアマゾンだな？」

『？ 何の話すか？』

「チツ。お前とりあえず車から出ろ！ちゃんと肉眼で見ないと状況把握できねえぞ。」

『えー、出たくないな。今行きますから状況説明してください。』

「ランクAと思われるアマゾンを20名ほどの群集が守ろうとしている。こいつら強い仲間を守ろうとしてるのかって聞いてんだ！」

『えーっと、その周りにいる奴らは人間です。アマゾンじゃありません。』

「なんだと…？」

既に世間でアマゾンが人間を喰うということは広まっている。そんなアマゾンを庇う人々とは一体…。

『白いローブつて言つてましたよね。それたぶん宗教団体のイースヘブンつて奴らです。あ、今着きましたー。』

中庭に繋がる建物の出口から札森と美月が外に出てくる。

「イースヘブン?」

「赤松! 奴らが逃げるぞ!」

札森から話を聞こうとしている間にイースヘブンの信者たちが商を連れて森の奥へと入っていく。

「赤松、追うぞ!」

青山が森へ駆けていこうとした時、赤松がその場で倒れ込んだ。先ほど商が女王アリ

アマゾンを狩った際の斬撃が赤松にも当たっていたのだ。

「おい！赤松！」

「札森さん！車から救命バック！」

「なんだよ、結局車にいた方がよかつたじやないすか…。」

札森は走つて車まで戻り、美月は赤松の首筋から流れる血を見て口を押える。

青山は自分の上着をサバイバルナイフで切つてつくつた当て布を使つて赤松の首の傷を抑えている間、白木が森の方を向くと既にそこには誰もいなかつた。

森の先にはマイクロバスが止まつてゐる。人々のローブと同じ白いバスで運転手も真っ白のローブを羽織つてゐる。

「あ、すいません。ちょっとトイレへ。」

集団の中の1人が森の中へ戻つていく。誰にも見られないところまで来ると男は右

手でトランシーバーを取り出し口元へもつていった。

「こちら三崎。対象が４Cのメンバーと接触しましたよーう。」

『了解しました。引き続き潜入をお願いします。』

「あーそれと…４Cのメンバーと一緒にお嬢さん、いらっしゃいましたよ。」

『……引き続き任務をお願いします。』

通信が切れると三崎は再びバスの方へと駆けていく。バスの前の方の席に座る商が三崎をまっすぐと見ていた。

通信を切ったトランシーバーを畳の上に置く水澤令華。立ち上がって障子戸を開けるとそこには美しい日本庭園が広がっている。

「私が今大事なのは…悠。」

2人の男女が人通りの少ない路地を駆けていく。左肩の一部の服が破れておりそこからは覚醒前のアマゾンズレジスターが覗かせる。

曲がり角を曲がるとその先にはフードを被つた壮年の男が立っていた。ニヤニヤした表情で傷だらけのアマゾンズドライバーを手にしている。

「た…助けてくれ！」

「私たち…まだ食べてない！」

「“まだ”…だろ？お前らが人を食つちまう前に…俺がやつてやるうう!!!」

狂気じみた笑顔を浮かべて壮年の男性はアマゾンズドライバーを腰につけ、左側にあるアクセラーグリップを捻る。

| A<sup>ア</sup> L<sup>ル</sup> P<sup>ア</sup> H<sup>フ</sup> A |

「アマゾンツ!!」

| B ブラッド & W ウィルド !! W • W • W • WILD !! |

アマゾンズドライバーから流れる音声と共に灼熱の赤いエネルギーが男性から噴き出し2人の男女を吹き飛ばす。

吹き飛ばされた衝撃でアマゾン体に変化する2人は壮年の男性を見るとそこにいたのは自分の赤い体に刻まれた傷をなぞるアマゾンアルファだった。

「覚悟しろお…。」

「くつそお！」

男性が変化したモズアマゾンがアルファに襲い掛かろうとするとそれに反撃するよう左手のアームカツターでモズアマゾンを斬りつける。

奇声を発しながら苦しむモズアマゾンの首を右手で持ち、アルファは左手のアームカツターで首を掻き切る。切り取った首を投げ飛ばし、胴体は右足で踏みつけていった。

「や…やだあ…!!」

女性が変化したモズアマゾンは仲間が無残に死んでいく様子を見て戦う意欲が湧くことなく逃げようと後ろを向いた。その方向からジャングレイダーに乗った青年が来るのが見えた。

「悠！」

モズアマゾンとアルファの間に入るようジャングレイダーを止める悠はメットを取つてモズアマゾンを逃がす。

「仁さん…もうやめてください！」

「邪魔をするなああ!!」

アルファが悠に襲い掛かり、その動きを見切つて悠も手にしたアマゾンズドライバーを腰に着ける。

アルファのものに比べ傷は少ないが、それでも激戦を潜り抜けてきたものだというのがわかる。

— O <sup>オ</sup> M <sup>メ</sup> E <sup>エ</sup> G <sup>ガ</sup> —

「ウオオオ！アマゾンツツ!!」  
 — E <sup>エ</sup> V <sup>ヴォ</sup> O <sup>リュ</sup> L <sup>エ</sup> U <sup>ヴオ</sup> · E <sup>エ</sup> V <sup>ヴオ</sup> O <sup>リュ</sup> L <sup>エ</sup> U <sup>ヴオ</sup> T <sup>リュ</sup> I <sup>シヨ</sup> O <sup>ン</sup> N!! —

アルファとは異なる音声と共に悠の体から緑色の熱気が放たれ、アマゾンオメガに肉体を変化させた。

「そつちこそ邪魔しないでください！僕たちはただ静かに生きていこうとしているだけだ！」

「だあまあれえええ!!!」

「仁さんだつてもうボロボロじやないですか！」

「ウウウ…ウオオオオ!!!」

アルファがトラロツクの影響で精神に異常をきたしていることはオメガは一見してわかつた。駆除班の仲間たちと決別した後、アマゾンの仲間たちと生活を共にしていく中でトラロツクの影響で発狂死してしまったアマゾンもいたのだ。

(こんな状態の仁さんと戦わなきやいけないなんて…。)

アルファの手と足から繰り出される攻撃に対し冷静にかわしていくオメガ。かつては闘志が燃え滾ると他のことが考えられなかつたが、最近は理性的な戦闘を行うことが出来るようになつた。

アルファの体力が落ちてきたところでオメガはアマゾンズドライバーの右側のバトルアーグリップを引き抜きアマゾンウイップを生成した。

鞭型のアマゾンウイップでアルファに生まれた小さな隙についてオメガは敵の右手を縛り上げる。

「貴様ああ!!」

「く……ッ！」

オメガは先ほど逃げたモズアマゾンから血の匂いがしたことに気が付く。すぐに戦闘を終わらせるために自身のアマゾンズドライバーのアクセラーアーグリップを捻つた。

| V I O L E N T • B R E A K |

アマゾンウイップを引き寄せ左手のアームカッターで斬ろうとするオメガの様子を見たアルファも左手でアクセラーグリップを捻り、必殺技で受けようとする。

| V I O L E N T • S L A S H |

お互いのアームカッターがぶつかり合い、火花が飛び散った。その瞬間、アマゾンオメガが右足のアームカッターでアルファを斬りつける。

「うぐうう!!」

アルファが膝をつくとバトラーグリップをアマゾンズドライバーに戻しオメガはジヤングレイダーでモズアマゾンの元へ走つていった。

「水澤：悠アアアアアア!!」

アルファの雄たけびが遠くへ行つたところからでも聞こえる。今はこれでいい、殺すために戦うのではない。オメガは守りたいものを守るために戦うのだから。

ジヤングレイダーが着いた先には青く光るアマゾンズレジスターが転がっていた。  
近くの黒い液体は肉体の大きさにしては少ない。

「やつぱ噂通り…。」

アマゾンの死体は死亡後もなくして黒い液体へ変化する。その液体の量が少ないとということは死体の状態のまま何者かが死体を回収、あるいは喰らうことになる。

「また新しい敵か…。」

オメガの姿から冷気を放つて人間の姿に戻った悠は悲しそうな顔をして再びアマゾンたちのコロニーへ戻るためジヤングレイダーに跨つた。

青山が運転する輸送用バンは赤松を病院で下した後、政府の命令で警視庁へ向かつていた。美月と白木は赤松に付き添うために同じく病院で降りていたことから、車の中には青山と札森が無言で乗っている。

「なんで俺たちは警視庁なんかに行くんだ？？」

「俺の知り合いからそういう通信が入ったんです。」

「はあ…。それよりイースヘブンってどこについて調べたか？」

「あーはい。2課とマル暴の知り合いからざつと聞いておきました。」

札森曰く…

イースヘブン——アマゾンの存在が世間に公表される前から人を喰らう生物の噂によつて作られた宗教団体である。アマゾンに喰われても神の元へ行くことが出来るという一種の諦めから生まれたといえるだろう。

数か月前までは『かみやまげんめい神山滅命』と名乗る教祖が教団を率いていたが、集会中にアマゾン

の襲撃にあつたことで神山は行方不明。信者たちはその頃から服装の色を変えるなど外見からわかるように考え方も変わつたようだ。

「考え方?」

「はい。喰われても大丈夫つてわけじゃなくて、喰われないように神に祈ろうつて感じすね。」

「ずいぶんプラス思考になつたもんだ。」

青山は警視庁付近の地下駐車場に輸送用バンを止めた。サイドブレーキを強く引くと共に札森はバンの扉を開けて警視庁に一人歩いていく。青山もそれに着いていく形で駆けていった。

札森を呼びだした警視庁の人間は青山の目から見たせいかいやらしく見える。一方の札森は水を得た魚のように生き生きしている。

(やつぱこいつも政府の人間だな。)

青山は出された茶を一気飲みしようとするも湯呑が熱いせいで叶わなかつた。

「そんで何で俺らを呼んだんですか？」

「実は警視庁にある男が助けてほしいと言つてきた。だが俺たちだけでは特定有害生物についてよくわからないからな。特定有害生物対策センターたる４Cに依頼したつてわけだ。」

「特定有害生物関連ですか。」

札森は溜息をつきながら資料に目を通す。一方の青山は前から気になつていたことを指摘することにした。

「その特定有害生物つて囁まないのか？アマゾンでいいんだよ。」

「はいはい、了解しました。……！この男つて。」

「誰だ？」

青山の質問に珍しく札森は素直に答えた。

「神山滅命です。」

青山たちが帰った4Cのオフィスには本棚や武器の収納スペースなどが入っていた。ソファーや増えておりそこには手当てが済んだ赤松と茶を入れる白木がいた。

「水澤さんは？」

「ちよつとショックで貧血起こしちゃつて…。病院にいます。」

ため息の付き方から赤松は美月を4Cに入れる気はないのだと察した青山は防弾チョッキを脱ぎながら白髪交じりの中年男性 神山をソファに座らせた。札森も髪の毛をいじりながら神山の向かい側のソファーに座り込む。

「えーっと神山さん。本名 小林隆さん。」

「神山で結構です。」

「あ、そですか。じゃあ神山さん。どうして警察に自分を守ってくれつづったんですか？」

ちよい前まであなたはイースヘブンの教祖として教団の中じやいい感じのとこにいたんでしょ。」

札森の適當な事情聴取に呆れる青山。それをなだめるように白木は冷たい水を青山に渡した。

「確かに3か月前まで私は教祖として皆を導いてきました。しかし奴が現れたんです：！」

「やつ？」

「尾宿商ですよ、あのアマゾンを喰らうアマゾン…！」

札森が“びしゆくはかり”とタブレットに入力している。とりあえず情報はきちんと入力しているようだ。

「私は3か月前、集会が襲われた時…その…。」

「？」

「に…逃げてしまいまして…。」

「あー、イースヘブンの元々の考え方はアマゾンに喰われてなんばつて感じすからね。教祖が真っ先に逃げちゃしゃーないすね。」

「あんな場面になつたらそりや逃げるでしょう！」

「宗教は金になる。」ギヤンブルに頭がいっぱいだつた時、誰かが言つていた氣がする。この男もその考え方で教団を作つたのだろう。いずれにせよこの男に大層な考え方や信念はない。

「後で戻ろうと思つたら尾宿が皆に持ち上げられていたんです。私が決めた黒いローブも脱ぎ捨てて白い服装に変わつて…。」「考え方が変わつた…つてことですよね。」

「アマゾンを喰う尾宿が仲間になつたから強い姿勢を持てるようになつたつてことすかね。」

“びしゅくが入つて考えシフト”と打ち込む札森のタブレットを奪い“尾宿”と打ち直す青山。嫌な顔をしながら札森がタブレットを奪い返す。

「教団のみんなは変わってしまった。真っ先に逃げた私を非難し：しまいには夜を狙つて襲つてきたり…。」

自業自得：といつて追い返すわけにもいかない。4Cの仕事は神山をイースヘブンから守ることなか怪しい所であるが政府の考えに逆らうわけにはいかない。

赤松は保護するためには基本的にオフィスにいるよう神山に伝える。そのオフィスの扉の向こうにはアタッシユケースを手にした加納省吾がハンカチで口を抑えながら聞いていた。

神山が4Cに保護されてから数か月。

イースヘブンの拠点は今やマイクロバスになつていた。中には通信機やパソコンなど多くの機械が積まれ、宗教団体と言うよりは一つのアマゾン対策組織のようだ。

奥の方には玉座のような大きな椅子が置かれ、商はそこに座っている。三崎は何気なく商の横に行つて話しかける。

「ハ力ちゃん。」

「おい、貴様！商様になんてことを！」

「…別にいい。」

三崎を叱った信者は商に会釈をすると自分の作業に戻つた。

「ハ力ちゃん、たんぱく質だよ。」

三崎はアマゾンズインジエクターで商の腕に高濃度たんぱく質を注入する。

「すまんな。」

「いいのいいの。」

注入が終わると三崎は空のアマゾンズインジエクターを抗菌用の台に置いた。手拭いて自分の席に戻ろうとするとマイクロバス内のブザーが鳴り響く。

「覚醒後のアマゾンの反応があります！」

運転手はすぐにその地点をナビに登録し、その場所へ急ぐ。商も横に置かれていたオーリープ色のブルゾンを羽織つて外へ出る準備を整えた。

現場に着くと既に何人かの人間がトンボアマゾンによつて喰い散らかされていた。

信者たちはバスから降りると扱いやすい小型拳銃でトンボアマゾンを牽制する。

既に理性を失っているトンボアマゾンは挑発に乗るように弾丸を放つた信者たちを襲おうとする。とその時バスから商が下り、近づくトンボアマゾンに蹴りを入れた。

「ウオオオ!!」

商の体から熱気と共に爆風が放たれ、サソリアアマゾンの姿に変化した。オレンジ色の釣り目はアマゾンズドライバーで変身するアマゾンたちと同じ位の大きさをしている。

頭部はアルファによく似た形をしているが辯髪のような三つ編みが付いている。黒いその肉体の臀部からは地面にまで到達しそうな長さの尾っぽがフワフワと動いていた。

「ガウウウ…。」

威嚇でトンボアマゾンを睨みつけるサソリアマゾン。先に動いたのは飛行能力のあるトンボアマゾンであつた。サソリアマゾンに飛びかかるように襲い掛かる。

サソリアマゾンは尾を伸ばしトンボアマゾンの心臓部をめがけて貫こうとしたが、尾の軌道をトンボアマゾンから放たれた風の斬撃でずらし、肩を貫くにとどまつた。

「グギヤアアウウ!!!」

黒い血が噴き出しつつトンボアマゾンから尾を引き抜くサソリアマゾン。信者たちはバスの中で祈りをささげている。三崎もサブマシンガンを手にしているが周りの信者たちが一切動かないことから、自分もバスの中で待機していた。

とその時、ジャングレイダーの吹かす音がバスの外から聞こえた。三崎が窓の外を見るとそこにはアマゾンズドライバーを装着する悠が見える。

「悠お坊ちやま…!」

悠は三崎に気が付くことなくサソリアマゾンとトンボアマゾンの前でアクセラーグリップを回す。

— OMEGA —

「ハア！アマゾンツ!!」  
— EVOLU・EVOLUTIION!! —

本能に身を任せると、よりは気合を入れるように掛け声を叫ぶ悠。体から緑の熱気が放出されオメガへと変身した。姿勢を低くしつつ右手をバトラーグリップに置き、飛び上ると共にバトラーグリップを引き抜くことでアマゾンサイズを作つてアクセラーグリップを捻る。

— VIOLENT・BREAK —

飛びかかった勢いによつて鎌型のアマゾンサイズの切れ味はさらに増している。かつて駆除班の大滝が変身した同種類のアマゾンを駆除した際と同じようにトンボアマ

ゾンの胴体は2つに分かれた。

「…ごめん、覚醒したらこうする約束だつたから…。」

オメガがバトラーグリップをアマゾンズドライバーに戻して呟いた。その隙をついてサソリアマゾンは尾を伸ばしてオメガを襲う。

それを見切つてアームカッターで尾を斬りつけるも、固くなっている尾から血液が出ることはない。

「君がアマゾンを狩るアマゾンだね。なんとなくそなつてしまつた原因は分かるよ。」

「…お前を喰う…！」

「悪いけどまだ死ぬわけにはいかないんだ。皆を守るために：君を狩る！」

オメガはサソリアマゾンに向かつて駆けていく。尾による攻撃を繰り出すもそれを全てかわしていくオメガはあつという間に接近戦に持ち込み、アームカッターでサソリアマゾンを斬りつける。

「グアアアア！」

サソリアマゾンは何とかして距離を取ろうと飛び上がつてバスの近くまで近づこうとするもその隙を与えることなくオメガはフットカッターによる足技で傷を与えていく。

「グアアア！」

大きなダメージを負つたサソリアマゾンは冷氣を放つて商の姿へ戻つた。バスから出てきた信者によつて囮われ、オメガは手が出せなくなつてしまふ。

均衡状態が続く中、バスとジャングレイダーが止まる横にノザマペストンサービスのバンが止まり運転手が下りてきた。

「福田…さん？」

オメガは突然現れたかつての仲間に驚きを隠せない。福田は黙つて手にしたアタッシュケースからコアユニットがオメガと同じ釣り目、しかし中心の銀色の装飾が黒く

なつたアマゾンズドライバーを商に投げた。

「橋本部長の命令だ。それを使え。」

三崎もバスの中から福田の行動に驚きを隠せない。しかし今ここで出てしまえば潜入の意味はなくなってしまう。自分の気持ちをグッと堪え、三崎はバスの中で待機した。

一方の商はオレンジの瞳のような装飾のアマゾンズドライバーを腰に巻き、アクセルーブリップを捻った。

—COPPA—  
コッパ

「アアマアゾンツ！」

オレンジ色の熱気が放たれ、周りの信者たちの中には吹き飛ぶ者もいる。やがて商はサソリアマゾン 改めアマゾンコッパへと変身を遂げた。

# E p i s o d e 3 「M a t t e r s C a u s e d b y t l a l o c」

加納が行進をするように”国際営業戦略本部長 橘雄吾“の卓上名札が置かれたデスクまで近づきそこにふてぶてしく座る男に先ほど福田から入った通信の内容について報告をした。

「橘本部長。福田から通信が入り、尾宿商にアマゾンズドライバーを渡すことに成功しましたようです。」

「ほう。まあこれぐらいはやつてもらわなくちゃね。それにしても本当に優秀だね、加納君。君が尾宿商の情報を4Cから持ってきてくれたおかげで国際営業戦略部は前もつて動くことが出来るよ。」

「お言葉ですが本部長、会長に許可を取らずにシグマが使っていたドライバーの更なる複製版をアマゾンに渡してよかつたのでしょうか。」

「会長は”物食わぬ生命体“を否定されていらっしゃる。尾宿商はアマゾンを喰うアマゾン。物は食うし、新たな食物連鎖に加わることが出来る。会長もお喜びになるだろ

う。まあ私はわが社での発展と昇進は諦めているがね。」

「どういうことです?」

「アマゾンの製造が禁止されてしまつたんだ。シグマタイプを強化していくために国際営業戦略部はアマゾンズレジスターの開発やアマゾンズドライバーの強化を今まで試みてきたんだよ。いくら質の高いスマートフォンのアクセサリーを作ろうとスマートフォンが市場に出回らなければ意味はない。」

そう言いながらポケットから自分のスマートフォンを取り出す橘。

「会長の許可が出ないのであれば私は私なりのやり方で上に登つて見せるよ。それよりドライバーに装着者の身体情報をこちらに送信するための機能はつけてあるだろうな?」

「はい、抜かりなく。しかし何のために?」

無機質な口調ながら真に迫る勢いで尋ねる加納。だが橘はそれに答える気はないと言わんばかりに座っている椅子を窓の方へ回転させる。

「君は優秀ではあるが特殊研究開発本部だつた人間は信用しないことにしているんだ。悪いがまだ君を疑わせてもらうよ。」

加納は黙りながら軽く会釈をすると本部長室を去つていった。

コツパの相貌はアマゾンズドライバーの有無で他はサソリアマゾンと変わりはない。しかしその力は何倍にも跳ね上がっていることはオメガは理解していた。

「君もドライバーを…。」

「ウゥウ…ガウウウ!!」

コツパはオメガに襲い掛かり腕から生えている棘でオメガの命を奪おうと急所を狙つっていく。

アマゾンシグマ同様グローブやブーツを身につけていないものの元から四肢末端から生えている棘はオメガのアームカッターと同じぐらいの強度を誇るのだ。

冷静さを保つてゐるオメガの一方で本能に任せた戦いが目立つコツパ。ドライバーの性能の高さゆえかコツパが一步リードした力でオメガを追い詰めていく。

「アウウウ!!!」

コツパの右手による攻撃がオメガの胸部を貫く。

「ヴグッ!!」

すぐさまオメガは右足でコツパを弾くも胸部から手が抜けた衝撃で黒い血が噴き出す。

その様子を遠目で見つめていた福田だつたが風穴の空いたオメガの体が目に入ると思わず目をそらした。その瞬間、どこからが銃声が鳴り響く。その弾丸はコツパの体に撃ち込まれ隙が生まれた。

「ハアハア……」まで…か。」

オメガは大きく飛躍しでジャングレイダーに跨る。冷気を放しながら悠の姿に戻るとその場を去つていった。

その様子を近くの岩場から高井望が自動小銃を握りしめ見ていた。

『ありがと、ノンちゃん。』

『三崎さんは人使い荒えんだよ。』

『んなこと言つたつてこつちは動けないんだからさ。悠お坊ちやまのこと、助けたかつたでしょ？』

『んなことねえよ。とりあえず戻るんで。』

『ありがと。』

三崎からの通信が切れると望は誰にもばれない様にその場から退却した。

悠は森の中の空き家にジャングレイダーを止めた。中からボロボロの服を着た男が

出てくる。

「悠…！どうしたんだ、その怪我!?」

「コツパタイپにやられた…。」

「まじかよ。これ食え！」

差し出された肉にありつく悠。数秒でペロリと平らげてしまう。

「ありがとう、落ち着いてきたよ。」

「普通俺たちでもその怪我は致命傷だぞ。つたく。それより山寺は?」

「…ちゃんと狩ってきた。」

「…そうか、いつも済まない。」

「いいんだよ。みんなが仲間を殺す必要なんてない。駆除班でアマゾンを狩ってきた僕やマモルくんが覚醒後のアマゾンを狩るつてみんなで決めたことじゃない。それよりマモルくんは?」

「今日も天城の行方を追つてる。」

天城と名乗つていたアマゾンは数週間前に野座間製薬の人間に拉致されていた。マモルはその後を追つていたが結局足取りは掴めずじまいであった。

「天城くんとチームを組んでたからね、マモルくん。」

「お前とマモルがいてくれて本当に安心できるよ。それよりコツパタイプになつたやつはどんな奴だつた?」

「あ、みんなにも聞こうと思つてたんだ。尾宿商つていうやつだ。」

「尾宿…?」

「近藤さん、知つてるの?」

「いや確かに覚醒前にもかかわらず人を喰つてるやつの名前がそんなどつたような…。  
「人を喰つてた…?」

「でもその噂を聞いたのは俺がオーナーの所に通つてた時だから去年の今頃：4月くらいだつたかな。例の店が駆除班に目つけられてるつて噂を聞いてそれ以来店には顔出してなかつたし…。」

悠は自分たちのせいでのニアマゾンがオーナーとしてアマゾンを守つていた店がなくなつてしまつたことを思い出す。

「あ、すまない。嫌なことを思い出させて…。」

「こちらこそ…ごめん。やっぱりちょっと1人で休ませて。」

悠は1人空き家の1室に入つて鍵を閉めた。中にあるシングルベッドは埃まみれになつてゐるが、体を休めるには快適なほうだろう。悠は横になつて商のことを考えていた。

（尾宿商は前まで人を喰つてた。でもある時を境にアマゾンを喰らうように変わつた。その間にあつたことと言えば…。）

「トラロツク…！」

本部長室のデスクの上に置かれた電話が鳴り、1コール目で橘は受話器を取り上げた。

「私だ。……………そうか、引き続き頼むよ。」

近くにいる加納はただじつと受話器を置く橋を見ている。

「まだ根に持つてゐるのかね、加納くん。信用しないとは言つても同じ野座間製薬の同士じやないか！仲間だとは思つてゐるよ。」

「…ありがとうございます。」

「今のは国際営業戦略部の研究部門からだよ。アマゾンコツパ 尾宿商のデータはきちんと送られて來たそうだ。福田は水澤悠より自分のことを取つたということだね。4Cへの推薦文を政府に送つておこう。」

「…。」

「それと私の計画に関する書類も政府に送つておかなくてはね…。加納くん、近々私は野座間製薬を後にすることになるだろうから君も身の振り方を考えておきたまえ。」「どういうことです？」

「事業縮小した民間企業でアマゾン駆除をするより半官半民の4Cで莫大な税金を使えた方が研究には最適だろう。おつと、会長にはこのことは内緒だ。『信じてゐるよ』 加

納くん。

「…はい。」

「ええ……わかつたわ。ご苦労様、加納。」

令華は電話を切つた。特殊研究開発部が解散してからずつと野座間製薬会長 天条隆顕の屋敷で個人的に研究を続けている。

元駆除班もその傘下にあり、今や彼らは令華の手足となっていた。加納からの連絡を切つた令華はすぐさま望に電話をかける。

「私です。新しい任務を言います。」

『今忙しいんだよ。』

「この任務を完了させればあなたたちが独断で悠を見逃した件は目を瞑ります。」

既に商から悠を逃がしたことがばれていた。望は仕方なく切ろうとした電話は再び耳に当てる。

「橋本部長がまた動きました。シグマが使っていたものを改良したドライバーを尾宿商に渡したんです。橋本部長は尾宿商の体を調べて何かを企んでいる可能性があります、回収してください。」

『尾宿商？ イースヘブンには三崎さんが潜入してゐるだろ。三崎さんの方が取りやすいんじゃねえの？』

「三崎にはまだ潜入してもらわなくてはなりません。駆除班や特殊研究開発部わかれが解散してしまつた今となつてはアマゾンを駆除する組織が1つでも多く必要なのです。』

『んでイースヘブンに目を付けたんだろ。』

「はい、イースヘブンにはあなた方と同じように支援をしています。しかし彼らは宗教団体。何を起こすか私たちには想像もつきません。」

三崎がいつか令華を“鉄の理系女子”と言つていた。頭が固い彼女に信心は理解できなのだろうか。望は防弾チョッキを脱ぎながらハンズフリーモードにした携帯を自室のテーブルに置く。

「それの見張りで三崎さんこれからも潜入しててもらわなくちやいけないってわけか。」

『そう、だから彼が動くわけにはいかないんです。』

「…会長の口から直接橘に命令すればアマゾンズドライバーの回収が出来るんじやねえのか？」

『訳あつて出来ません。とにかくよろしくお願ひします。』

令華からの電話が切れた。未だに信用できないのだろうか。まあ信用してもらおうなどとは思っていないが。望も含め志藤、三崎は“すべてを終わらせる”ために動いている。それは悠やマモルも同じなのだろう。

（福田さんは：何してるのかな。）

望は窓に外に黒い雲があるのが見えた。もうすぐ大雨が降るだろう。外に干してある生乾きの洗濯物をしまうために窓を開けた。

アマゾンズドライバーを商に渡したことで橘に対する忠誠心が認められ、数週間も経

たないうちに福田は4Cに加入することとなつた。オートロック式の扉に暗証番号を打ち込みながら網膜認証を行う福田。数秒の待機時間後に扉が開く。

「失礼する。」

扉を開けるとだらしのない体制の札森がまず目に入る。武器の手入れをする赤松、湯呑を洗う白木、ソファで寝ている青山。

「誰すか。てかなんでドア開けられたんすか。」

黙っている福田に代わつて後から扉から入つてきた橘がそれに答える。

「彼は4Cの新たなメンバーだ。それと海外から私が推薦した男がメンバーとしてもう1人加入する。よろしく頼むよ、諸君。」「えーっと…アンタも誰すか？」

「おつと申し遅れた。この度政府の方から特定有害生物対策センター局長を任命された橘だ。以後は君たちの上司…ということになる。よろしく頼むよ。」

「うつわ…まじか。」

札森の反応も無理はない。野座間製薬の事故のせいで現在のような惨劇が続いているのであれば普通4Cの中のトップは政府側の人間が立つのが妥当だ。

それが何故か野座間製薬側の人間が政府側である札森の上に立つことになる。

「何か文句でも？」

「……いえいえ、ありません！」

「意外と長いものに巻かれるんだな。」

目を覚ました青山がボソツとつぶやく。赤松は手を動かしながら会話に参加し始めた。

「わかりました、橋局長。ただその福田ってのは何者ですか？」

「おお、君が赤松竜二くんか。お答えしよう、彼は元々わが社の駆除班に在籍していた。」「へえ…あの駆除班ですか。トラロック作戦中は特に大したこともせず、終わつた後アマゾンのコロニーを襲うどころかアマゾンたちを逃がしたことで有名な。」

相変わらずの札森節が炸裂する。しかし福田は何も答えようとしない。喧嘩を売つても買われなければ意味はない。気に入らない顔をして札森は席を立ちあがつた。

「とにかくこれからはみんな仲間だ。仲良くやろう。」

「はは、仲良くねえ。」

「ところでこのオフィスを離れることになった。すぐに準備したまえ。」

「は？」

「私の一声で政府が予算を何倍にもしてくれたのだ。まずは4C専用のビルを用意してもらつた。そこで隊を編成し大人数でのアマゾン駆除に取り掛かる。」

自慢気な顔をして橘は出ていった。

「まじかまじか！あんだけ言つても上げてくれなかつた予算を政府が！？政府側の俺でも駄目だつたのに！あの人何なんだ？すげええ！」

興奮する札森に対し福田が口を開く。

「今まで野座間製薬が極秘扱いにしていたアマゾンの情報を橘局長が政府に独断で提供了なんだ。その情報と橘局長が考へてはいる『Qプラン』とやらを政府に持ち込んだことで局長の座と予算を獲得したそうだ。」

「…へえ喋れるんですね、福田さん。」

札森は福田の肩に手を置く。そしてすぐに部屋の片づけにかかりた。対して中の事情には興味がなく、ただより良い職場で働くことが嬉しい様子だった。

(フクさん…どうして悠がピンチになるようなことを…。)

三崎は表情に出さないもののかなり落ち込んでいた。居場所は違つても心は一つ、それがチーム。胸にかけた5円玉のペンダントがキラリと光る。

「おい、頼む。」

「あ、ごめんごめん。」

商に言われ高濃度たんぱく質をアマゾンズインジェクターで注入するため左腕の裾を捲ろうとする。

「やめろつ！」

「…あ、ごめん。」

商は左腕からたんぱく質を注入されることを嫌がっていた。信者たちはアマゾンズレジスターを見られたくないのではないかと想像していたが、何か気に障ることをするのも馬鹿らしい。何も尋ねることなくいつも右腕に注入している。

「…なあ。」

「ん？」

「お前は人を喰いたいと思つたことはあるか？」

「え、あ、いや俺はないよ。人間だしね。あ、でも喰われた事ならあるよ、ハハハ。」

そう言つて笑いながら動かない義手を見せびらかす。

「でも俺はアマゾンだけどアマゾンが喰いたい。」

「…まあ確かに…。でも俺たちからしたらそれはすっげえありがたいことだよ。」

「…前はそんなんじやなかつた。」

「え、そうなの？ここの人たち、全然ハカラちゃんのこと聞いたりしないからそういうの知らなかつたわ。」

作り笑いでごまかす三崎。嘘だ、本当は知つていてる。商が昔は人を喰らうアマゾンだつたことは令華がイースヘブンに支援をする見返りに商の体を調べた際に明らかになつていた。

「あの雨からだ。俺がおかしくなつたのは。」

「トラロック…。俺もあるの雨のせいじゃないけど…そこからいろいろ変わつちやつたな。」

「お前もか…。」

「あ、いや俺は大した変化とかじやないけど、アハハ。」

思わず口が滑りそうになってしまった。駆除班にいたことは秘密だ。あくまでアマゾンに狩られるのが怖くて宗教にのめり込んだ男…それを貫き通さなくては…。

「人間の中で暮らすなら絶対に今の方がいい。でも同じ種類の生き物を殺す俺は…俺は生きていていいのか？喰いたくなつてしまふこの気持ちは…欲望は…。」

「……。」

初めて思いつめるような表情をする商に三崎が口を開いて何かを言おうとした時、急に乗つっていたマイクロバスが止まつた。すぐに他の信者が商を呼びに来る。

「何々!？」

「目の前でアマゾンたちが戦っています！」

「反応な いってことは覚醒前の奴らか…！ハ力ちゃん！」

「今出る。」

お気に入りのブルゾンを手にマイクロバスを飛び出す商。それに続いてサブマシン

ガンを持った三崎も外へ出た。

マイクロバスはトンネルに差し掛かろうとしているところだったが、その前でアマゾンアルファが覚醒後のアマゾンに斬りかかっている。アマゾンの体からは粘り気のある黒い血が流れ出てひどい臭いを漂わせていた。

「あいつ……鷹山だ！ハ力ちゃん、あいつかなり強……い……。」

商を見るとその顔はおいしそうな（駆走を見つけた猛獣のような）表情を浮かべていた。瞳孔は開き、口からは八重歯をのぞかせている。

（これ……本当にさつきまでのハ力ちゃんかよ……。）

三崎は思わずたじろいでしまう。商は手についていたアマゾンズドライバーを腰に巻き、アクセラーグリップを捻つた。

—COPPA—  
コッパ

「ウウウ……アハハハ!! アアマアゾオンツ!!」

喜びに満ち溢れた掛け声と共にオレンジ色の熱風が商を中心に辺りに吹き荒れる。

「おいおい、ドライバー……ククク……いいぜえ……お前も俺があー殺してやるううう!!」

アルファは変身途中のコツパに襲い掛かるもコツパは右手でアルファの攻撃を押さえる。

「ヴヴヴアアア!!」

コツパはアルファの体を弾き、アマゾンズドライバーのバトラーグリップを引き抜いてアマゾンブレイドを生成した。

逆手に持ち相手の頸動脈を狙う斬撃を繰り出すもそれを全て見切るアルファ。

「グウウウアア!!」

暴走するコツパに共鳴するようにアルファも雄たけびをあげながら右手のアーム

カツターでアマゾンブレイドを止め、左手でアクセラーグリップを捻る。

—VIOLENCE・STRIKE—

アルファの右足についたフットカツターがコツパの腹部にねじ込まれた。

「グギャアアアア!!!」

「ヘツ…。」

コツパは叫び声を上げながら真っ暗なトンネルの中に隠れる。アルファはトンネルの外側で自信ありげな声を出し、トンネルに背を向けた。

「……!!」

何かを探し再びトンネルの方を向くアルファ。しかし気が付いた時にはコツパの尾がアルファの腹部を貫通していた。

# Episode 4 「Mutiny and Disaster

真っ暗のトンネルの中からコッパは腹部を左手で押さえながらフラフラと現れる。尾をアルファから引き抜き、その傷口から流れる血を見ると興奮して雄たけびをあげた。

「ギャアアア!!」

アルファは冷気を出しながら仁の姿に戻る。

「う……ぐう……。」

仁は膝をつき何とかその場から離れようと必死で体を動かそうとするも急所を突かれたため、なかなか動くことが出来ない。

「ハアハア…喰う…アマゾンだあ!!」

コツパが仁目掛けて走つていくと、コツパの後ろからジャンサーチャーの光と共に  
ジャングレイダーに乗つた悠が現れる。

「!?

悠はジャングレイダーでコツパを突貫しようと/orするもわずかに体をずらした事で横  
に弾き飛ばされた。

「仁さん!」

意識がもうろうとしている仁を片手で抱えてライディングシートの後ろに跨らせる  
と悠はすぐにその場から去つていった。

コツパは悔しさからか再び雄たけびをあげ、去つていく仁たちを必要に追いかけよう  
とする。

三崎は腹部から血を噴き出しながら走つていくコツパを羽交い締めにして動けない

ようとする。

「もうやめろ！ハカちゃん！自分の体を見ろよ！」

「だあ……ま……れえ……！」

暴れるコツパの腹部からはますます血が流れていく。信者たちもコツパに恐る恐る駆け寄り抑える。

「ウガアアアア！」

3人がかりで押さえられるコツパはエネルギー切れで商の姿に戻る。それに油断した三崎に向かつて商は喰らいつこうとした。

「うわあ！」

「…………俺は……何を……」

ようやく理性を取り戻したが周りの信者たちはいつも通りの目ではなく恐れを抱い

た目つきで商を見ていた。

橘は自分の部屋となる局長室のデスクを置かせると満足した顔でその椅子に座った。

「うん、悪くないね。」

横に立っている加納の端末に連絡が入るとすぐにパソコンを開き橘にその画面を見せた。

「橘局長、再び尾宿商が動きました。前回より左腕に集中させたデータを取る事に成功したようです。」

「確かに研究部門の話では左腕以外に異常なところは見られなかつたらしいからね。結果はどう？」

「やはり左腕の傷から染み込んだトラロツクの影響を受けているようです。体内にトラロツクを長時間吸収したアマゾンに心身共に、あるいはいずれかの影響を受けている例

もみられていますし。」

「トラロック…。コッパタイプの事について調べるのであればやはりトラロックについて詳しく知る必要があるな。加納くん、福田を呼んでくれるかな。」

「福田…ですか。」

「元駆除班の経歴が使える時が来たようだ。」

橘の真意を聞くことなく加納は会釈をすると福田を呼びに下のフロアへ向かった。

どれぐらい走ったのだろうか、海岸線が見えてきた。悠の目に懐かしい女性の姿が映る。

「…」

その女性の前でジャングレイダーを止める。その反動で横に倒れそうになる仁を支える女性。

「久しぶりです、七羽さん。」

「久しぶり。仁を助けてくれてありがとう。」

「ただ僕は…壊れた仁さんを放つておけなくて…。」

「…そうだね、私も…仁が仁じやなくなつても、見捨てる事なんてできない。」

どんなに愛していくれてもアマゾンになつてから仁は”それ”だけはしなかつた。

先日、仁じやない仁にされたことを思い出しつつも七羽は応急処置された仁の腹部をタオルで押さえた。

「もうここで大丈夫。」

「…仁さんが治つたら…また戦うことになると思います。その時は僕も手加減はしません。」

ヘルメットのバイザーを下げる悠。

「…じやあ仁がない時において。また鶏肉料理で馳走してあげるから。」

「ありがとうございます。でも仁さんがいな時はアマゾンを狩っている時だから僕も行かなきや。」

「そりやそうか。じゃあ…また。」

「また…。」

ジャングレイダーのアクセルを回し去っていく悠を七羽は見えなくなるまで眺めていた。

商はマイクロバスの大きな椅子で眠っていた。信者たちはいつも以上に起こさないように小声で話をしている。

「さつきのアマゾンって別のアマゾンと戦つてたんだよな？」

「ああ、赤いアマゾンはヤバイ奴だけど確かにアマゾンしか狩らないって聞いたことがあるぜ。」

「なんでそんなアマゾンも喰おうとしたんだ、商様は。」

「腹が減つてしやーなかつたんじや?」

「支援団体から貰つたたんぱく質入りのアマゾンズインジエクターは注入してたんだろ?」

「人間で言うと点滴みたいなやつだつて言つてたぞ。点滴打つても腹は減るし…。それより三崎に見せたあの顔見たかよ…。本当に三崎を喰つちまうかと思つたぜ。」

「おい、やめろ。」

三崎が噂をする2人の声を聞いて間に入った。

「なんでお前そんな冷静でいられるんだよ。怖くねえのか?」

「アマゾンに腕喰われたんだから俺たちよりアマゾン怖いだろ、普通。」

「…ハ力ちゃんは俺たちのために戦つてくれてるんだ。たまにはそういう時だつてあんただろ。さあ俺たちは作業に戻ろうぜ!」

信者2人の肩を叩き、再びアマゾンの目撃情報を集め始める。まもなくしてマイクロバスは河原のスペースに停まった。

「なんだ？」

「支援団体の人があそこで話したいってよ。」

三崎が窓の外を見ると望が一人で立っている。

(ノンちゃん…? どうしてここに?)

先ほど噂していた2人が望の対応をするためマイクロバスから降りていく。三崎もそれに付いて行つた。

望は駆除班時代と変わらず太ももにサバイバルナイフを刺し、少しづれたヘルメットを被り直していた。三崎の存在に気が付くとあえてそちらの方を向こうとしない。

「今回はどうのような御用で?」

「4Cから渡されたアマゾンズドライバーを回収させてもらいたいってことだ。」

「4C…? なんですかそれは。渡してきた方は野座間製薬の方でしたが…。」「福田さんだろ。あとその上司の橘の2人は今4Cにいる。余計なことをされる前に回収しておきたいんだとよ。」

信者の2人は顔を合わせた後、先ほどよりもさらに小さな声でヒソヒソ話をする。ある程度話が終わると片方の信者が望の方を向いた。

「実は我々もあるのベルトによつて商様の力が強くなつたことに恐れを感じ始めています。」

「恐れ? どういうことだよ。」

信者を見ながらも焦点を奥に合わせ三崎を睨む。三崎はその目線に「おー、わいこわい」と口パクで伝える。

「アマゾンを喰いたくて仕方ないみたいで…その気持ち…っていうんですか? とりあえず俺たちにその牙が向くんじやないかと思うと…。」

「…なるほどな。アイツもアマゾンだしな。」

トラロックの日、マモルもそうだった。あれだけ優しかった彼もアマゾンの性には逆らえずに仲間の体を食した。

望と同じく三崎もそれを思つたのか自分の義手を握りしめる。望がマイクロバスの中にいる商の元へ行こうとした時、自身の携帯端末にメールが入つた。

「……」

「どうされました？」

「……ちょっと予定が入つた。また今度ドライバーを回収しに来るからよ。」

望は迷彩柄のバイクに跨りすぐに去つていく。

(ちえ、俺には何にも言わないでやんの。)

三崎も拗ねながらマイクロバスに乗ろうとした時、バスの出口にアマゾンズドライバーを握りしめた商が立つていた。

「あ。」

「おい、そこの2人。」

「え……あ……はい。」

「どういうことだ？こいつを回収？」

「いや…その…。」

どもる2人に代わって三崎が商をなだめようとする。

「いやさ、なんかそのベルト、調子悪いかもしないんだ。だからいつたん回収つてことで…。」

「ふざけるな。」

「…。」

商は早歩きで2人の所まで行き胸倉をつかんだ。

「この力を手離す気はねえぞ。」

「や…やめて…！」

「俺はこの力でさらに強いアマゾンを狩つてやる。それで文句ないんだろうが！」  
「は…離して…。」

商が手を離すと2人の信者はしりもちをついた。片方はそのまま後ろに下がると気を強くする。

「い……言う事聞かないとインジエクター渡さねえぞ！」

片方の強気な態度に感化されたのかもう1人の信者も商を煽る。

「そ……そ……だ！お前だつてアマゾンなんだ。人間の元で生きたいならいうことを聞け！」

「おい、よせつて！」

三崎の声は届くことなく商はアマゾンズドライバーを腰に巻き付け、起動させる。

—COPPA—  
コッパ

「ウオオオ!!アアマアゾオンツ!!

オレンジ色のエネルギーを放出させ2人を弾き飛ばすコッパ。傷はもう既にふさ

がっている。

「やめろ、ハ力ちゃん！ここで暴れたら他のアマゾンと一緒になつちまう！」

「俺の力だ！俺の勝手に！」

「もう俺は仲間を失いたくないんだよ！」

「…！」

いつもふざけている三崎。他の者は自分がアマゾンであるからかどこかよそよしさを醸し出していたが三崎はそんなことを匂わせもしなかつた。

「三崎…。」

「ベルトがなくてもお前は強いよ：ハ力ちゃん。」

ベルトを取ろうとアクセラーグリップとバトラーグリップ部を持つた瞬間、何かしてくると誤解した信者がアマゾンコッパに弾丸を放つ。

コッパには大したダメージはない。だがコッパは雄たけびをあげ、オメガに匹敵するほどの跳躍でその場を去つた。

望は運転していたバイクを黒い輸送用バンの近くに止める。運転席には福田が座つており、窓ガラスを開けた。

「福田さん、久しぶり。」

「…ああ。」

「商にドライバー渡したのは…4Cに入るためですか？」

「…ああ。」

「後悔…してないんですか？ 悠がやられそだつたけど。」

「…ああ。」

福田は口数が少ない。しかしその言葉の重みがあるからこそ駆除班ではサブリーダーとして信頼してきたのだ。

「なんていきなり呼び出しを？」

「…俺は命令をうけた。お前にコイツをつけるってな。」

福田は小型発信器を取り出し望の目の前で壊して見せた。

「？」

「橘局長は水澤令華を捜している。トラロツクのことについて知りたいらしい。」

「トラロツク…。なんで今更？」

「さあな。」

「じゃあなんで福田さんはそれを渡しにつけないんです？」

「…。」

5円玉のペンドントが福田の胸にあるのを見た望はその答えがわかつていた。福田は親の介護の費用を稼ぐために4Cへ行つた。

他の駆除班のメンバーは水澤令華について行つたことから裏切り者だと自分のことを思つてゐるのだろう。

「これ以上裏切ることは出来ない。」今回の任務で何を吹き込まれたのかわからないがそれよりもチームとしての糾を福田は取つたのだ。

「…気を付けろ。橋局長は何かを企んでる。」

そういうと窓ガラスを閉め輸送用バンを走らせ去っていく。

「福田さん…。」

そう咳き、望もバイクに跨り天条の屋敷へと向かつた。

イースヘブンの信者たちが襲われた教会はもはや建物としての原型を留めていないほどに崩壊している。その中を歩く商は手に持つアマゾンズドライバーを長椅子において腰を掛けた。

ここに来る前……トラロツクの雨を受けた時、商は人間を喰おうと裏路地で影を潜めていた。そこに同じ臭いをした“同種”が自分を止めようとしてきたことを思い出した。

「人間を喰うなんて駄目だ！この世界は人間によつて成り立つてゐる。僕たちが生きていくには人間の協力が必要なんだよ！人間と僕たち、絶対に共存できるよ！」

見ず知らずのアマゾンに何を話しているんだと商は思つていた。結局アマゾンを喰らうようになつてからは人間とまがいなりにも共存してきた。  
ところが今は結局このぎまだ。

「そら見たことか。」

あの時のアマゾンに言つてやりたい。それにしても……腹が減つた…。

「やっぱここだつたか、ハカちゃん。」

教会の入口のところに三崎が立つてゐる。商はすぐ立ち上がりアマゾンズドライバーを構えた。

「あー！ チヨイ待ちチヨイ待ち！ 僕以外誰もいないから！ ほんとに！ 臭い効くはずでしょ！」

確かに三崎以外の臭いはしない。それにアマゾンを差別しない彼だけは信用できた。

「なんでここが？」

「ハカラちゃんの行きそうなところなんてここかなーなんてさ。」

「あれから何日も俺を捜してたつてことか？ そんなに俺をイースヘブンに戻したいんだな。」

「なんことしないよ。さつき令華様に許可とつてさ、一緒に野座間の方に行かない？」

三崎は身に纏っていた白いローブを捨てて商の横に座つた。

「どういうことだ？」

「実はわたくし、イースヘブンの信者は仮の姿……その正体は！ 野座間製薬の人間なのでーす！」

「…。」

「ハハ、ま、安月給でパシられてるだけだけどさ…。」

イースヘブンか野座間製薬かなどはどうでもよかつた。ただ…この腹を満たしてくれさえすれば。

「野座間の方に行けば悪いようにはしないってさ。そもそも令華様はイースヘブンにハカちゃんがいるから支援してたんだ。野座間がまたアマゾンを所有してると世間体がよくない、ってことでこんな回りくどい方法で。」

「俺が野座間に行つたらそうなるじゃないか。」

「そこは俺とハカちゃんの友情パワーですよ。ま、イースヘブンから逃げちやつたから野座間で保護しましたってことでいいじやん。」

三崎とは半年ほどの付き合いだが本当に調子のいいやつだ。でもそれがいい、一緒にいて…アマゾンだと人間だとかを忘れることが出来る。

「お前と一緒にいたら…俺も暴走しないですむのかな。」  
「ハカちゃんがそだつて信じるなら大丈夫なんじやない？」

「…そんなもんかな…。」

微笑を浮かべる商だつたがアマゾンの臭いが近づいてきたことに気がつきアマゾンズドライバーを腰に巻き付ける。

「鼻が利くね。」

声のした方向を見るとそこにはマモルと2人の男が立っていた。

「マモ…ちゃん？」

「……三崎くん……。」

「マモちゃん！マモちゃん!!やつた…やつと会えた！」

笑顔でマモルに近づこうとする三崎の前に男たちが立ち塞がる。

「マモちゃん！俺、本当に全然気にしてないんだ！また一緒にチームを…」  
「三崎くんはちょっと黙つてて！ねえ君：コツパタイプだよね。」

「…それがどうした？」

「天城くんって…知ってる？」

「…？」

「マモちゃん、何の話してるんだよ？俺、マモちゃんと…」

「…2人とも！…ここ任せていいかな？」

三崎の話を一切聞こうとしないマモルに対しどんな人にも積極的に話しかける三崎ですら声をかける事を止めてしまう。

「ああ行け、マモル。」

「コツパタイプは我々が仕留める。」

マモルは三崎から逃げるようその場を離れていく。

「マモちゃん、待つてよ！話を…！」

「おい、俺から離れるな！この2人、アマゾンだ！」

そう言いながら三崎を引き留める商はアマゾンズドライバーのアクセラーグリップを捻つた。

—COOPPA—  
コッパ

「ウオオオ！アマゾンッ！」

相手のアマゾンも商がコッパに変身するのと同時にカニアマゾンとコウモリアマゾンに変わっていく。

「うつわ…ランクA…大丈夫？ハ力ちゃん！」

三崎の声に応えることなく跳躍でカニアマゾンにしがみ付くコッパ。噛みつき攻撃でカニアマゾンから体液を放出させる。

しかしコウモリアマゾンによつてコッパは背中を攻撃され、カニアマゾンから引きはがされてしまった。

コウモリアマゾンとカニアマゾンに覆いかぶされるように喰らいつかれるコッパ。

「ハ力ちゃん！くつそ、なんで…！」

いつものコツパよりも明らかに動きが鈍い。アマゾンがその状態のときは決まって“腹が減っている時”。

アマゾンを狩るためにには狩ったアマゾンを喰らわなくてはならないという本末転倒な状態。今可能性があるとすれば三崎のポケットの中に入っていたたんぱく質入りアマゾンズインジエクターで栄養を補給するしかない。

そもそもはシグマタイプと呼ばれる“第四のアマゾン”がまた生成された時のために簡単にたんぱく質を与えることが出来るようになると国際営業戦略部が作つたものだそうだ。

しかしアマゾンを作ることを禁止され、結局無意味の産物として野座間製薬内で放置されていたものを水澤令華がアマゾンへの点滴代わりとして使うことにしたらしい。

いずれにせよこのアマゾンズインジエクターをコツパに打たなくてはならない、経口摂取から得られる養分には及ばないだろうが…。

「くつそ…隙がねえ…！」

三崎は必死に抵抗するコツパの姿を見て焦っていた。一方のコツパも遠ざかる意識の中で三崎の方を見ていた。

(もし…三崎を喰えれば：俺は体が動かせるのか…？)

コツパのオレンジ色の瞳には遠くにいる三崎が少し旨そうに映つた。

その頃、4Cにもアマゾン出現の連絡が入り出動しようとしていた。しかし商という戦力と令華からの出資を打ち切られたイースヘブンは4Cに自分たちの身の安全を守つてもらおうと入口を封鎖し抗議をしていた。

「私たちを守れー！」

「もう自分たちでは守れないんだ！税金払つてるだろうが！」

「このビルは安全なんだろう！入れろ！」

隊長になつた青山の最初の仕事は毎朝起こるこの暴動を抑えることだつた。青山隊には藤尾、中島、そして任務失敗により隊長の座を“新入り”に奪われた福田が所属し人々のビルへの侵入を押さえている。

「落ち着いて下さい！4Cは皆さん的安全を守りますから！」

「ふざけんな！話によれば神山もここにいるそうじやないか！あのくそ教祖め！俺たちがアマゾンに襲われていて逃げたんだぞ！」

「冒涜だ！神山をだせ！出さないならこの建物ごと…！」

信者の一人が手榴弾らしきものを取り出した。それを見た福田は思わず大声を上げる。

「伏せろ!!」

信者が手榴弾のピンを抜こうとしたその瞬間、どこからか銃声が鳴り響き信者は足を押さえながらその場に倒れた。

「ふいー、あぶねえ、あぶねえ。素人がんなもん持つてんじやねえぞ。」

銃を撃つた男は今風の髪型に全身黒で統一した服を着ている相貌。だがアサルトライフルを片手で扱うその姿はプロの戦闘を知っている、そんな雰囲気を匂わせる。

「おい、一般人を撃つことはまずい！」

「青山ア、お前甘いんだよ。今こいつが手榴弾オモチャぶつぱなすことでどんだけの人間死ぬと思つてんだ。あ、爆発でじやねえぞ。俺たちが余計な怪我をすりや”善良な”一般市民がアマゾンの餌になつちまう。」

「黒崎：お前……」

橋の推薦によつてアメリカの特殊部隊から派遣された“新入り” 黒崎は青山の肩を叩くとイースヘブンの信者たちにアサルトライフルを向けた。信者たちは悲鳴を上げてその場を立ち去ろうとする。

「聞け、イースヘブンの連中！局長からの伝言だ。」

黒崎はアサルトライフルを首にかけ、ポケットから伝言が書かれた紙を取り出す。

『イースヘブンの皆さん、ご安心下さい。尾宿商のようにアマゾンを狩ってくれる者は

時期に増えます。皆さん的生活を脅かすアマゾンはやがて自滅するでしょう。』だそうだ。聞いたらさつさとお家でネンネしてろ!』

そう言い再びライフルを構える黒崎を見て信者たちは蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

その様子を見ている青山は黒崎のライフルの先を下に向けさせる。

「それはよせ。あとどういうことだ?」

「さあな。局長が言つてたことをそのまま言つただけだ。それよりさつさとアマゾン狩り行くからここ掃除しとけ。イースヘブンの連中、ごみ落としていきやがった。』

黒崎は桶からのメモを丸めるとイースヘブンの信者たちが落としていつたゴミの中に投げて輸送用バンが停めてある駐車場へと向かつた。

# E p i S o d e 5 「M E s s i a h , s i n S t i n c t」

コツパはコウモリアマゾンとカニアマゾンの囁みつき攻撃によつて冷氣を発しながら商の姿に戻つた。

体のあちこちから出血していいる商に遠慮なく攻撃を続ける2体のアマゾンに弾丸を撃ち込んでいく三崎だが敵はそれを気にも留めない。

「くっそ！効いてるはずなのに！」

「我々はマモルにコツパタイプを必ず仕留めると約束した！人間にかまつている猶予はない！」

「コツパタイプつて…一体…？」

やがてサブマシンガンの弾丸が切れ、後は武器がサバイバルナイフだけとなつた。

(俺は物理は苦手だから…くそ…)

アマゾンズインジェクターを手にし何とか商の手に届くようにそれを投げるもカニアマゾンによって弾かれ中から液体が飛び出した。

「まじかよ……」

その時、駆除班の輸送用バンが教会の前に急停止しそこから駆除班の制服にショットガンとスナイパーライフル、レガースとメリケンサックを装備した3人の男たちが飛び出してきてアマゾンたちに攻撃を加える。

「志藤さん！」

三崎が呼んだのはかつて駆除班のリーダーとしてアマゾンを狩ってきた男　志藤真。今はショットガンを手にカニアマゾンの心臓部を狙い撃ちしている。

「三崎！車ん中にある銃使え！」  
「さっすが！」

三崎はすぐにバンの中からサブマシンガンを手に取りコウモリアマゾンに発砲する。血だらけの商から引き離すと、商が気絶しているのが見えた。

志藤と共に来た男の一人が腰につけていた手榴弾を取つてピンを抜く。

「伏せろ！」

三崎が伏せたと共に手榴弾はコウモリアマゾンの近くに落とされ爆発した。コウモリアマゾンは爆散し、カニアマゾンも志藤が放つた銃弾が心臓を貫き倒れた。

「ふう、何とか間に合つたな。」

「助かつたぜ、志藤さん。えーっとこの人たちは…？」

「まつ、新生駆除班つてどこだな。加藤と若槻だ。」

加藤は黒ぶちの眼鏡をかけたいかにも知的な雰囲気を出している。背の高さを始めスタイルの良さは似ても似つかないが福田の役割を果たしているのだろうか。

一方の若槻は三崎に似て陽気そうな雰囲気を漂わせてるがどこか幼さを感じる。手

にしている武器がナイフやレガースであることから三崎、望そしてかつてのマモルの霧囲気を感じさせた。

「とにかくお前もこい。そいつも連れてくるんだ。本部長の命令だ。」

「令華様の…。りよーかい。」

加藤と若槻は気絶している商に肩を貸し、バンの中へ4人は入つていった。

青山は出来たばかりの4Cのビルの排水溝に落ちた最後のゴミを拾つてゴミ袋に入れた。

ため息をつきながら腰を叩いているとビジネススーツを着た美月がビルの中から出てきた。

「あれ、えーと…美月…さん？」

「あ、えつと…青山さん、あの時はご迷惑おかけして申し訳ありませんでした。」

「どんでもない…。それで…なんでここに？」

アマゾン駆除がしたいと美月が4Cの前に現れた冬が明けて今は春。新入生、新入社員の時期であるのは確かではあるがなぜまた4Cに彼女が来たのか…？

「4月からここで働かせてもらつてるんです。駆除班じやないんですけど…。」

話を聞けば駆除班の戦闘を見たショックで倒れてしまつたことからすぐに自分がアマゾンを駆除することは出来ないと気が付いたらしい。

そこで4Cの駆除以外の業務をすることで少しでもアマゾンに関わる仕事を…と考え今に至るようだ。

「なんでそこまでしてアマゾンにこだわるんです？」

「彼に私がなにをしてあげられるのかわからなくて。でも何かしてあげたいんです。」

彼女が言つてているのは水澤悠のことだろう。いじめられていた上に母親から相手にされなかつた彼女にとつて悠は唯一の居場所だつたのだ。目の前からいなくなつた今

も美月は悠を追い求めていた…。

美月は深々と頭を下げる駅の方へ歩いていった。その背中は弱弱しくまだ自立できない雛のような印象を青山に抱かせた。

気絶した商は畳の部屋に置かれたベッドの上に横にされ、様々な装置に繋がれた状態になっていた。その横で令華と研究者が作業を行つていてる。

志藤と三崎、そして後から合流した望は令華に呼ばれその部屋に通される。

「まさか尾宿商がイースヘブンを飛び出すとは思いもしませんでしたが、かえつて好都合です。」

「どういうことです？」

「アマゾンは人間に無理やり指示をされて動いてもいつかは餉いきれなくなる。それを嫌というほど味わったでしょう。」

令華の言つていることはマモルのことなのか、悠のことなのか、それとも両方なのか

3人ともわからない。

「だからイースヘブンという管理しにくい組織にいることも黙認していました。偶然イースヘブンの潜入をしていたあなたに見張りを任せて。」

三崎は頭をポリポリ搔きつつ「どうも。」と一言告げた。

「しかしそのイースヘブンを抜けてここに来てくれたことで彼の唯一の居場所はここになりました。彼が嫌がらなければ私たちで彼を管理できます。それに彼の身体情報も今明らかになりました。4Cにも伝わっているでしょうが。」

「橘はコイツの情報を使ってまた何かするつもりなんですか？」

志藤の質問に令華は「恐らく。」とだけ答えた。

「しかし先ほど情報流出のプログラムを消しました。これ以上は4Cに彼の情報が行くことはないでしよう。」

「ハカちゃんの体…どうなつてたんすか？その左手の傷…見たことなかつたし…。」

「その傷…鷹山仁の顔の傷に似てねえか?」

望の言葉にハツとする三崎。 そうだ、あの爛れた傷、トラロツクによつて精神に異常を來した仁の傷にそつくりだ。 つまり商はトラロツクのせいでアマゾンを喰らう体になつたのか。

「鷹山仁同様尾宿商はアマゾンが負つた傷口などからトラロツクの成分が侵入し影響を受けて何らかの異常が発生したコツパタイプであることは確実です。 コツパタイプは個体によつて異常が異なります。 実験体で多かつたのは発狂死するものや身体構造が変化する個体ですが、 尾宿商は私の予想通り鷹山仁と同様、闘争本能の上昇と精神異常です。」

「精神異常? 人間のたんぱく質でなくアマゾンのたんぱく質を求める体質変化じやないのか?」

志藤は初めて商のことを聞いた時、『人間のたんぱく質を求める』というアマゾン本来の性質が変わつて『アマゾンのたんぱく質を求める』ものになつたと考えていた。 それならば真の意味で人間の仲間になれると。

「違います。錯覚という一種の精神異常に過ぎません。彼は”アマゾンを喰いたい”と錯覚しているんです。彼の体は本当は今でも人を口にしたいと求めていません。」

アマゾンの体は人間のたんぱく質に比べ養分が少ない。商はアマゾンを喰らつても大して栄養を取る事は出来ないのだ。

「じゃあアンタはそれを予想してたからたんぱく質入りのアマゾンズインジエクターの定期接種をイースヘブンに推奨してたってわけか。」

「そうです。人のたんぱく質を求めるというアマゾン細胞の本能を簡単に変えることなど出来ないとつてましたから。恐らく橋本部：いえ局長も気がついたでしよう。4Cの研究機関に潜入している私の部下にもこれまで以上に情報を流すよう伝えておきます。」

4Cがどうなど関係ない。今まで一緒にアマゾンを狩ってきた商は本当は人間を喰いたがつてている。彼もその事に気が付いてはいない。

マモルもあの時喰いたくないという理性に負けて自分の腕を喰つてしまつた。 いざ  
れ商の本当の本能が目覺めてしまつたら自分は食われてしまうのか…。

三崎は眠り続けている商を見てから部屋を黙つて出ていった。

「三崎…。」

志藤も三崎の後を追いかけていく。

「おい、大丈夫か？」

「マコさん…。はい、大丈夫つす。それよりマコさん今まで何してたんすか？」

「関東以外のアマゾンを狩つてたんだ。野座間製薬の事故が起きてからすぐに政府は秘密裏にアマゾンが国外逃亡しないよう国民一人一人出国時に万全の身体検査をしていただろ。だからアマゾンが海外に逃げることはなかつたが国内は別だつたからな。新生駆除班を率いて今まで全国回つてたんだ。」

「そりやお疲れさまだ。もう終わつたんです？」

「また行くよ。今回は中間報告をしに戻つてただけだ。こつちは任せたぞ。」「…おつす。」

志藤の首にも5円玉のペンダントがつけられている。それを見た三崎は少し安心したように笑顔を見せた。

令華の予想通り、4Cの研究部門も商はアマゾンを喰らいたいという錯覚をする精神異常を持ったコツパタイプのアマゾンであることに気がついていた。

加納はすぐに橘にその旨を報告する。

「どうやらトラロックによつて錯覚作用を脳に及ぼす成分が分泌されているようです。」

「素晴らしい成果だ、加納くん。それで研究部門はその技術は応用できそうだと？」

「その成分を人工的につくることは野座間の開発部の情報からトラロックの成分を分析すれば可能だそうです。しかし作りだせたとしてもそれを十二分に活用するには鷹山仁が開発したドライバーのような力をコントロールするものが必要になるはずとのことです。」

「問題ない。予算はいくらでもだそう。期間はどれぐらいかかりそうかね？」

「予想では4～5か月…と。」

「いいだろう。しかし必ず完成したまえ。」

「伝えておきます。」

加納はいつも通り軽く会釈をすると局長室を去つていった。そしてすぐにスマートフォンを取り出しシーケレットフォルダに入つた令華の連絡先に電話をかける。

「加納です。やはり橘局長も動きました。何を考えているのかはわかりませんが、4～5か月は目立つた動きをすることはなさそうです。…………はい、失礼します。」

ジリジリと暑い日が続く。夏に入りしばらく経つて気温は35℃を超えている。毎年テレビで聞く『例年以上の暑さ』というやつだろう。

ボロボロの山小屋ではあるが一応電気も通っているから悠はテレビから情報を得ることが出来た。こんな生活が出来ているのも近藤と仲の良かつた剛のおかげだ。剛は覚醒後のアマゾンに襲われていることを偶然近藤が助けたことがきっかけで仲

良くなつた人間だ。人間にしては珍しくアマゾンの中にも人間を喰わないものもいることを信じてくれた人もある。

悠がテレビを消したタイミングでマモルたちが帰ってきた。

「マモルくん！」

「…！水澤くん…いたんだ。」

「マモルくん、また天城くんの情報を集めに行つてたの？」

「そうだよ、彼はチームの仲間だつたからね。」

「もういなくなつて何か月も経つてるんだ。もう…。」

悠の悲しそうな顔にマモルはむしろ腹をたてているようだつた。

「やつぱり諦めてたんだね。そんな水澤くんに協力してもらおうだなんて思つてないから安心してよ。どうせ守つてはくれても戦つてはくれないんだからね。」

悠は何も言い返すことが出来ない。マモルは部屋の奥へ行こうとする。すると戸棚を修理しに来ていた剛とすれ違つた。マモルは目を合わせることなく奥の部屋へ向か

う。

「へへ、ご機嫌斜めみてえだな。」

「…すいません。」

「悠が謝ることじやねえよ。」

「僕たちみたいなアマゾンに隠れ家まで貸して下さつていてるのに…。」

「これはあ恩返しだからなあ。まあ助けてくれた近藤さんは…。」

悠は覚醒してしまった近藤をこの手で殺したことを見出しぐく。

「おっと、すまねえ。戸棚は直しといたからあとは勝手にやんな。んじやーな。」

昔ならではの父親の雰囲気を出しながら優しさも持ち合わせている剛はまさにアマゾンたちの父親のような存在になっていた。

悠はそんな後ろ姿に頭を下げて外に出た。仁の恩師である星埜始と日を改めて研究の段取りを決めるべく昨晩約束をしたのだ。

仁の無事と七羽の妊娠に関して聞きたいことはあつたが、今はアマゾン細胞に関する

ことを少しでも知つておくことが優先事項だ。悠はヘルメットを被りジヤングレイダーを走らせた。

福田は隣に変装した神山の実家からの帰り道を走っていた。保護対象にも関わらず注文の多い神山。今日は「久しぶりに母に会いたい、自分の身を案じていてるに違いない。」と言い、福田と共に東北にある家に向かつたのだ。

結局神山の母親は神山が宗教を立ち上げてうまい汁を吸つてている間に亡くなつていたことがわかり、家もなくなつていた。親孝行したいときには親はなしと言うが果たして神山は親孝行がしたかつたのだろうか。

母のために自分を犠牲にしてきた福田は神山の人生を否定したい気持ちでいっぱいであつたが保護対象を殴つては元も子もない。黙つて車を走らせるしかなかつた。

関東に入つたところで福田の元に通信が入る。

『福田、聞こえるか？』

「福田聞こえます、青山隊長ですか？」

『ああ。ちょうど俺たちも×県付近にいる。お前の走つてるところあたりだろ?』

「そうですけど…一体どうして?」

『野座間の駆除班がアマゾンの隠れ家を見つけたらしくてな。俺たちも現場に向かって  
るが人員が足りん。すぐ来れるか?』

「行けますが…保護対象者はどうしましよう?」

『連れてきて構わん。俺が許可する。中島とバロンで守つてれば大丈夫だろう。』

バロンは最近4Cに来た軍用犬だ。ギスギスした4Cの中で唯一癒される存在と  
言つても過言ではない。

「了解しました。」

福田が通信を切つても神山はしょげたままで何も言わなかつた。いつもだつたら「ア  
マゾンのところなんかに連れてくな!」なんて騒ぐのだろうが、母親の死がショック  
だつたのか、自由になれる時間が終わつてしまつのが悲しいのか、とにかく何も反応は  
しなかつた。

先ほどまで悠がいた隠れ家は今や駆除班とアマゾンたちが戦う戦場となつていた。三崎は片手でサブマシンガンを撃ちまくアリアアマゾンたちを狩つていて。望はランクCやDと呼ばれるアマゾンを得意の肉弾戦で確実にダメージを負わせていく。

「くっそ、結構多いな！」

「アマゾンの隠れ家らしいからな……！」

まだしやべる余裕のある2人も奥の部屋からマモルが出でくると少しの隙が生まれる。

「マモちゃん……！」

「マモル！」

「よくも僕たちの家を……！」

マモル、そして彼の横にいる島田とカオリは熱を放出しアマゾン体へと変わった。島

田の変わったハチアマゾンとカオリの変わったアリアマゾンはそれぞれ三崎と望に襲い掛かる。

モグラアマゾンは隙あらば2人のどちらかを襲うため硬化クローキーを研ぎ澄ます。望がアリアマゾンの攻撃に足を引つかけ転んだのを見てモグラアマゾンが動いた瞬間、窓ガラスを割つてコツパが侵入しモグラアマゾンを襲つた。

「君は…コツパタイプ！」

「お前…教会であつたやつか！…ここで喰つてやる！」

アマゾンズドライバーのバトラーグリップを引き抜きアマゾンブレイドを生成し、逆手に持つたそれでモグラアマゾンに斬りかかる。

しかしクロードアマゾンブレイドによる攻撃を弾き、左手のクロードでコツパの腹部に反撃する。

「ぐつ…！」

「ハカちゃん！…マモちゃんのこと殺さないでくれよー！」

戦闘モードに入ったアマゾンコツパに三崎の声は届いていない。興奮するコツパはアクセラーグリップを捻った。

— V I O L E N T · B R E A K —

飛びかかつてその勢いでモグラアマゾンに向けて斬りかかるうとするコツパ。斬りかかる直前、別の部屋から入ってきたクモアマゾンがその斬撃を受ける。

「山田くん!!」

「マモ…ル…みんな…逃げ…ろ!」

クモアマゾンは最期の言葉を残してバイオレンントブレイクによって上半身と下半身が分裂した。

モグラアマゾンとハチアマゾン、アリアマゾンは悔しそうに裏口から外に出ようとす  
るも玄関から入ってきた青山隊から銃撃を受ける。

「…! 4Cか!」

三崎と望も青山隊に気が付いた。その青山はちょうど今到着した福田から車に置いてきた神山を警護するために中島を行かせるように伝えていた。

マモルたちが銃撃の嵐から逃れるとしおくれた神山が乗った車が目に映る。

「あれだ！」

島田はすぐにその車の運転席に乗り込む。神山は驚いて逃げようとするが手だけをアマゾン化させたマモルに後部座席から脅されじつとせざるを得なくなつた。

同じく後部座席に腰を下ろしたカオリは剛のことを案じる。

「あの家から剛さんのこと、バレたりしないかな？」

「持ち主は分からぬようになつて言つてたよ。剛さんだつて自分の家に帰つたしね。まあそんなことはどうでもいい。コイツは4Cのやつと一緒にいたからな。貴重な情報源になつてもらう。」

ガタガタと震える神山の首筋にクローやを当てるマモルはその場で尋問を始める。

「4Cによつてカラスのアマゾンが狩られたという事実はあるか？」

「力…カラス…？あ…お…俺は4Cじゃなくて…。」

「なら死ぬか？」

「ひや…！で…でも…4Cの誰かが言つてた…気がする…カラスアマゾンを…捕獲して…いる…つて…。」

悠はジヤングレイダーで啓践大学の校門を通つて隠れ家に帰ろうとしていた。付属の病院に始の計らいで極秘に入院している七羽の見舞いにも行くことが出来た。そのせいで遅くなつてしまつたのだ。

（みんな心配してゐるかな。）

カーブを曲がり、後は山の方まで上がつていくだけ。ジヤングレイダーのアクセルをさらに回した瞬間、今走つてゐるところの数百メートル先に男が飛び出してきた。

すぐに減速しジャングレイダーを止める悠。道に飛び出してきた男は顔なじみのアマゾンだった。

「天城くん……！ 生きてたんだね！ 良かつた！ 心配してたんだ！ マモルくんなんて特に……」

「水澤くん……ごめん……俺……お腹が空いてるんだ……。」「え？」

天城はバツクル部のネオコンドラー コアがオレンジ色のネオアマゾンズドライバーを腰に巻き、左手に持ったアマゾンズインジエクターをインジエクタースロットに装填して右手でその部分を上に傾ける。

左手でアマゾンズインジエクターの中のロウ成分を注入すると天城の目がオレンジに光つた。

——R H O——  
「……アマゾン……」

天城からアマゾンズドライバー使用時以上の熱とともに何度も爆発するようにな熱風が吹き荒れる。思わず悠も顔を抑えた。

その風がおさまり前を向くとそこにはカラスアマゾンに不完全な強化装甲が施されたアマゾンロウが立っていた。

## Episode 6 「Mental Fatigue」

黒崎はあくびをしながら局長室のあるフロアへエレベーターで上がつていた。こんな時間に職場へ呼び出されるのは不快だったが局長命令とあらば仕方がない。

局長室の扉をぶつきらぼうに開けて入るとそこには大きな液晶が置かれ、その画面には悠にアマゾンロウが襲い掛かっている映像が映されていた。

「んだこりや。」

「夜中に呼び出してすまないね、黒崎くん。」

「今日は当番のはずじやないはずだが？」

「わかってるよ。だがこれを君に見てもらいたいんだ。私が君をアメリカから呼んだ理由だからね。」

手と足を広げ咆哮するアマゾン。これが自分を呼んだ理由ということだろうか。

「コイツはなんなんだ？」

「天城クロト。私がまだ野座間製薬で本部長を務めていた時にわざわざ話の場を設けてほしいと野座間に直談判に来た愚かなアマゾンさ。」

天城は野座間の役員全員に「人間を喰う氣はないアマゾンもいる。自分たちを殺さず人に道的な扱いをしてくれると約束してくれれば監視下に降りる。人間を喰おうとするアマゾンを狩ることも厭わない。」と説得した。

しかし役員の面々はアマゾンの言つたことなど信用するはずがない。会長の天条の命令で何もせずに帰したもの、天城の提案に乗る気など野座間側はなかつた。

「しかし私は会長にも秘密で天城を捕らえた。新しくアマゾンを作ることが禁止された今、既存のアマゾンは我々にとつて貴重な戦力になりえると考えたからだ。」

今のところ自分が必要な要因などない。黒崎は近くにあつた椅子に座りまたあくびをした。

「このアマゾンがいつか使い物になつた時、君のような優秀な“人間”がアマゾンの手綱を引っ張つてほしいと思つてね。」

なるほど、ようは強い人間がアマゾンを見張つてほしかつたというわけか。

「んで結局使い物になつたから出したつてわけか？」

「そうだ。共食いのアマゾン、コツパの体を調べた結果、トラロックによつてアマゾンを喰いたいという錯覚をもたらす成分を作りだすことに成功した。その成分は錯覚だけではなくアマゾンの戦闘能力も底上げする素晴らしいものだつたのだよ。」

また興味のない話に戻つてきてゐる。頭が痛くなつた黒崎は胸ポケットから頭痛薬を何錠か口に投げ入れた。

「聞いているかね、黒崎くん？」

「はいはい…。」

「フン：コツパタイプとはトラロック後に現れた言わば奇種。当時は原因や行動原理が分からなかつたことからQuestionのQをギリシャ文字化した？からつけられた名だ。また？は数字の90を示すとも言われてゐる。」

本当に興味がない。自分はこのために睡眠を邪魔されたのかと思うと腸が煮えくり返つてくる。黒崎はスマートフォンを取り出しいじり始めた。

「だがアマゾンを喰うアマゾンを人の手で意図的に作り出せるようにしたのはこの私だ！まさに水澤くんのトラロツクが<sup>9</sup><sub>0</sub>？ならば私の研究は<sup>1</sup><sub>0</sub><sup>0</sup>P！」

橘は高笑いを上げている。ようはアマゾンロウを黒崎隊で管理しろということが言いたいのだろう。黒崎はスマートフォンをいじりながら局長室を後にした。

「へえ。P<sup>ロウ</sup>は数字の100を表す…ねえ。」

エレベーターの中でロウの意味を調べた黒崎はスマートフォンをポケットにしまった。

ロウは暴走しながら足のフットカッターによる斬りかかりを仕掛けるも悠は冷静に

それらを回避していく。

「天城くん！…くそ！」

ロウの左腕につけられたアマゾンズレジスターの表示は青を示している。つまりまだ覚醒はしていない…。

間合いをとった悠はリュックサックに入ったアマゾンズドライバーを取り出し腰に取り付けてアクセラーグリップを捻つた。

「…アマゾンツ！」

「…エヴォル・エヴォ・エヴォルト・イオン!!」

オメガに変身した悠は先ほどと同じくロウの手足による攻撃を見切つて避ける。

ロウはアームカッター、フットカッターをそれぞれ大きくさせ殺傷力を高めて襲い掛かってきた。

「く…落ち着いて！天城くん！僕だ！悠だよ！」

ロウは自分の理性を抑えきれずにオメガに襲い掛かっているようだ。覚醒していくにも関わらず暴走する理由をオメガは理解できるはずもない。

ロウのフットカッターによる攻撃を避け続けるオメガ。ロウは左手でインジエクタースロットに装填されたアマゾンズインジエクターを操作した。

N E E D L E . L O A D I N G

右手のシエルスライサーグローブからアマゾンネオニードルが生成され、足技を避けたオメガの胸部に射撃攻撃を与える。

「ウアア！」

続けて怯んだオメガに左手のアームカッターで下から上に斬りかかつた。胸から血が噴き出しオメガはその場に膝をつく。

(や……やばい……)

とどめの一撃を食らわせようと近づくロウ。アームカッターが届く距離まで近づいた時、突然ロウが苦しみ始めた。

「？」

動物的な鳴き声を上げその場にのたうち回るロウを背にオメガはジャングレイダーに乗つてその場を去つていく。

走りながら冷気を放つてオメガは悠の姿に戻つた。シャツは右の下腹部から左の肩にかけて破れ、そこから血が染み出している。

貫通していれば話は別だがこの傷程度であれば一口二口、たんぱく質を摂取出来れば回復するだろう。傷口もふさがってきたことが悠自身にもわかる。

剛の隠れ家の近くまで来るとそこに4Cの情報部と監察部があり、ジャングレイダーを近くに止めて悠は誰にもばれないよう家の近くまで歩いた。

(まさか4Cにみんな駆除されたんじゃ…。)

天城のことを真っ先に伝えたかったのに…。悠がもつと家に近づこうとした時、後ろから悠を呼ぶ声がした。振り向くとそこには剛が立っている。

「剛さん！あれ、一体どういうことなんですか？」

「ああ、なんかアマゾンを駆除する奴らがあそこを襲つてな。何人かやられちまつた。」

「そんな…。」

「だがマモルたちは生きてんぞ。何人かが近くの車を奪つて逃げたのを遠目で見てたからよ！」

「じゃあ他の隠れ家に…！」

悠はすぐジャングレイダーを停めた場所に戻ろうとする。

「おいおい、今何時だと思つてんだ！それにその傷。ウチで休んでからじやダメなんか？」

「すいません、でも天城くんがいたんです。それをマモルくんに言わなくちゃ。お世話

になりました。」

悠は剛の方を向いて深々とお辞儀をする。そして傷口を抑えながらマモルたちが向かつたと思われる別の隠れ家に向かつた。

4Cの研究棟にストレッチャーに雁字搦めにされた天城が運ばれた。泡を吹き続けているものの意識はないものと思われる。

その様子を見た加納は思わずハンカチで口を抑えながら研究者たちに命令を下す。

「すぐに治療を開始してください。ロウ成分の過剰摂取による症状でしようからすぐ手を施さなければ命は保証できません。」

治療室を出てハンカチをポケットに戻す加納。辺りに誰もいないことを確認するとスマートフォンを取り出し電話をかける。

「加納です、夜分遅くに失礼します。橘局長の命で作つたネオアマゾンズドライバーですが、口ウ成分の摂取が上手くいかず実用段階には至つていらないのが正直なところです。…………はい、しかしデータは局長ご自身で管理されているため私でも中々盗み出すことは難しいかと。…………ええ、システム部に送信されたものでしたら先ほど送りましたので確認をお願いします。…………はい、失礼します。」

悠がマモルたちがいる隠れ家に着いたのは数日経つてからのことだつた。いくつかある隠れ家を回るとどうしてもそれぐらいの日数がかかる。

むしろ数日でマモルたちを見つけられたのは運がよかつた方だろう。

「よかつた、無事で。」

「無事…なのかな？」

カオリが悲しそうにしているのを見ると前の隠れ家での戦いで相当の仲間たちが目の前で無残に散つていったのだと予想できた。

「…めん、助けられなくて。」

「悠が悪いんじゃないよ。でも…人間を食べない私たちを殺すような人をなんで私たちは殺しちゃいけないんだろうね。」

悠は答えられなかつた。「確かにそうだね」と言つてしまいそうにもなる。なんで自分たちは殺されてもいいのに人は殺してはいけないのか…。

「マモルくんと島田さんはどこに？」

「それが…。」

「？」

「4Cに行つたわ。あの人、天城くんが4Cにいたつて。」

隣の部屋を見ると拘束具を付けられた神山がモゾモゾと動いているのがわかる。

「なんでこんなことを！」

「貴重な情報源だからこうしとけってマモルが。」

カオリの答えなど聞かずに拘束具や口につけられた手ぬぐいを取る悠。自由になつた瞬間、神山は外に飛び出していこうとする。

「言つておくけどここらへんには私たちの仲間がウロウロしてる。その意味、わかつてゐるわよね？」

カオリの一言に立ち止まり、再び部屋に戻つていく神山はここから出る方がむしろ危険だと察したのだろう。

「とにかく今天城くんと会つちゃだめなんだ。僕もすぐ4Cへ行く。」

「どういうこと？」

「…帰つたら話すよ。」

テーブルに置かれた手作りのハンバーガーを1つ手に取つて頬張ると悠はすぐに隠れ家を飛び出していった。

治療が終わつた天城は拘束具を付けられ 4C のビル内にある隔離部屋に閉じ込められた。一切身動きが取れない状態で食事も排泄も全てその場でさせられる。

意識を取り戻した天城はそのストレスとアマゾンを喰いたい衝動に駆られ続けるのだ。

12 時の鐘がなつた。やつとたんぱく質の摂取が出来る。研究員たちが天城の右腕に 1 本目のアマゾンズインジェクターで栄養を撃ち込む。2 本目は待ちに待つたロウ成分が含まれたものだ。

ロウ成分が入るととても気持ちよくなる、というのもアマゾンを喰つたような感覚を味わえるから。

しかし数時間もすればロウ成分を撃ち込まれる前以上にアマゾンを喰いたくなる。まさに麻薬のようなもの、それがロウ成分だ。

今日の分の注射は終わつてしまつた。研究者たちが隔離部屋から出ていくのを見ると辛くなる。

(俺は…人間とアマゾンの共存を…でも…アマゾンを…喰いたい…)

そんな天城の気配を4Cのエントランスから清掃員の服装をして潜入したマモルと島田は感知していた。特に島田は仲間のアマゾンを感知しやすいタイプなのだ。

「マモル。」

「うん、上だね。」

帽子を深くかぶりながら清掃道具を積んだカートを引いてエレベーターに乗る2人はとりあえず最上階のフロアのボタンを押した。

清掃道具の中にはブルーシートを被せた下にカオリが用意した食料が大量に積まれている。これだけの量があれば戦闘が長引いたとしても持ちこたえられるだろう。

天城の気配が近くなつた。島田はすぐに次の階のボタンを押す。恐らく次の階に天城が捕らえられているのだろう。

(なんだこの感じは……近すぎる気が……。)

島田は天城の気配に違和感を感じざるを得なかつた。同じフロアとはいえ囚われているのならばこんなに気配を近くに感じるはずはないのだ。

エレベーターのドアが開いた瞬間その理由は分かつた。エレベータの目の前に立つていた天城は昔見た爽やかな笑顔ではなくやつと好物にありつくことが出来る…ストレスから自由になれると悦を感じた顔をしていた。

—R<sup>ロ</sup>·H<sup>ウ</sup>—O—

「ハアハア…ヘヘヘ…アマゾン…」

衝撃波がエレベーター内に充満し警告音が鳴り響く。マモルたちは口ウから放たれる熱気で外に出ることが出来ない。島田の機転でドアを閉め、さらに上のフロアのボタンを押す。

ロウはエレベーターの入口の横の扉をあけ階段に出た。真ん中が吹き抜けになつており、そこから跳躍して停止するフロアに到着した。

エレベーターの扉の前に行くとちょうどそのフロアでエレベーターが止まる。ロウは扉が開いた瞬間、右手に生成したアマゾンネオブレイドで一突きにする。最早アマゾンロウに理性などなかつた。

扉がゆっくりと開く。刃が入る隙間が出来た瞬間、ロウは右手をエレベーターの中に勢いよく突っ込んだ。

……感触はない。扉が全て開き目に入つたのはモグラアマゾンの硬化クローで突き破られたエレベーターの底の大きな穴。

「チイ！」

後ろを振り向こうとした瞬間、モグラアマゾンのクローがロウの腹部を後ろから貫いた。

「ガフッ！」

「天城くん……、覚醒してしまつたんだね……。」

モグラアマゾンがロウの腕を見ると表示は青、未覚醒の証だった。

「え？ そんな……！」

隙が生まれたモグラアマゾンを後ろに蹴り飛ばす口ウ。すぐにインジエクタースロットに入っていたアマゾンズインジエクターをその場に捨て、ストックのアマゾンズインジエクターをインジエクタースロットに装填し注入する。

すると傷口はみるみるうちに塞がつていき、苦しそうだつた口ウは再びファイティングポーズを見る余裕を見せた。

「そんな…天城くん！僕だよ、マモルだよ！」

「わかつて…いる…喰いたい…アマゾンをおおお!!!」

— C L A W • L O A D I N G —  
ク ロ ウ ディ ング

アマゾンズインジエクターを操作することで右腕からフック状のクローナーが生成された。ワイヤーを射出してモグラアマゾンに引っ掛けると一気に近くまで引き寄せ、近づいたところをフットカッターで斬りつける。

「ヴヴヴア!!」

モグラアマゾンの両肩を切り裂き、そこから黒い血が川のように流れ出る。

「ヴヴヴアアアア！い、た、い、！ウグアアア!!!」

痛々しい悲鳴を上げのたうち回るモグラアマゾン。そこへ階段を駆け上がりつてちょうどマモルたちを追いかけてエントランスに来ていた悠を連れて島田が戻ってきた。

「マモル！ 悠連れてきたぞ！」

「ヴヴウウウ…水…澤…く、ん…！」

悠は島田に持つてきた食料をすぐにマモルに上げるよう伝えた。島田の正体はハチアマゾン。正直戦闘能力が高いわけではない。それよりもすぐにマモルを回復させて戦闘に加わつてもらう方が効率的なのだ。

悠の腰にはコンドラー・コアが赤く輝くアマゾンズドライバーが装着されている。かつての仲間を狩らなくてはならない心苦しさを抑えながら悠は叫んだ。

「僕は…天城くんを狩る！」

「…アマゾンツ！」  
 — E V O L U · E V O · E V O L U T I O N !! —

オメガが放つ爆風に耐えながら島田はカートに入れていたハンバーガーを人間体に戻ったマモルに渡した。

オメガはバトラーグリップを引き抜き彼の得意武器 アマゾンサイズを作る。襲い掛かってきたロウをアマゾンサイズで切り裂こうとするもアームカッターによつて弾かれてしまう。

「グラアアアア!!」

野獣のようなうめき声をあげるロウに対し冷静に相手の行動を分析しようとするアマゾンオメガ。前までならばオメガも本能的に戦つていたが、戦闘に慣れたせいか最近は冷静な行動分析が出来るようになつていた。

しかし今はそれが返つて邪魔になつているのかもしれない。ロウはトリツキーな攻撃をしてくるためまるで予想が付かないのだ。

「島田さん。」

「どうした、悠！」

「…いつたん引きます。」

「……そうだな。」

４Cの戦闘員たちの足音も聞こえてきた。島田はハチアマゾンに変わつてマモルを連れて窓から飛び出した。ガラスの割れる音に反応するロウの隙をついてオメガも階段の吹き抜けから1階まで落下した。

オメガの姿から悠に戻り、階段の横の扉を開けて調査部のフロアを駆け抜けていく。急いでビルから出ようとした悠は差し掛かった曲がり角でちょうど調査部からたくさんの中の書類を持った女性とぶつかってしまった。

「あ、すいません…！」

「悠…？」

「……美月…！」

それは義理の妹、トラロツクの日以来会つていなかつた美月だつた。まさか4Cで再会するとは予想もしていなかつたが、驚いている余裕はない。上層階からアマゾンロウが飛び降りてきた音がする。

「ごめん、美月。僕急いでるから！」

「待つて、悠ア！」

（また私を置いていくの？どこに行くの？）

あの時言いたかつた言葉が今も出てこない。自分には彼を引き留めるための力もない。少しでもアマゾンの近くにいようとただけでは彼自身のことを知ることは出来ないし、ましてや彼が自分を見てくれるわけでもない。

美月はただ自動ドアの向こうに小さくなつていく悠を見ていることしかできなかつた。

ジャングレイダーで郊外の方へ走つていく悠。隠れ家の方向へ向かつてしまえば仲間たちがまた襲われてしまうかも知れない。悠はマモルや島田の無事を祈つてしまらく隠れ家には行かないことにした。

それに：調べなくてはならないことがある。ポケットに入つたメモ帳の切れ端に書かれた住所に行こうとカーブを左折すると目の前に金のメツシユが入つたボロボロの服を着た男 鷹山仁が道路をふさぐようにして立つていた。

「よう、また会つたなあ。」

「仁さん…今あなたに構つてる時間はない！」

「どういうことだ？」

「…。」

「もつたいぶんなよ。俺とお前の仲じやねえか。」

「どんな仲だ」と悠は思つた。助け助けられ殺されかけ殺しかけ…。だがアマゾンに関する知識ならば令華に負けずとも劣らない彼ならば何かを知つてゐるかも知れない。

それにこの男は隠し事が苦手なタイプなのだ。

「僕の仲間のアマゾンが：僕たちアマゾンを襲うようになつたんです。」「覚醒しておかしくなつたのか？」

「いえ、未覚醒です。」

「てなるとコツパタイプになつたか。俺もそうだつたしな。」

仁は左の頬を抑えながら言つた。

「天城くんは確かにトラロツクの日、戦闘はしていたみたいですね。でも後で見てもトラロツクの影響は受けてなんていなかつた！」

「じゃあ単純におかしくなつちまつただけじやねえかあ？話はもういいだろ、こないだの続きを始めようぜ。」

仁は傷だらけのアマゾンズドライバーを腰に巻き、アクセラーグリップを捻つた。

—A L P H A —

「…アマゾン！」  
—B L O O D & W I L D!!—  
ブ ラッド アンド ウィルド

アルファに変身したのを見て悠も同様に腰についているアマゾンズドライバーのアクセラーグリップを捻る。

— OMEGA —

「…アマゾンツ！」

— EVOLU・EVOLU・EVOLUTION!! —

赤と緑のアマゾンが対峙する。アルファは腕を大きく開いて、オメガは腰を低くしていつでも飛びかかる姿勢を取つた。

戦闘が始まろうとした瞬間、オメガとアルファの双方に弾丸が撃ち込まれる。

「…ツ！…なんだあ？」

道路の横にあるコンテナの上を見ると4Cの戦闘員がスナイパーライフルを構えているのが見えた。その男が右手を上げるとあちこちから隊員たちが現れ2体のアマゾンを囲う。

その中に赤松がサブマシンガンを持つて立っていた。

「鷹山仁に水澤悠だな。」

「そうだが：俺は4Cの皆さんに危害を加えたつもりはねえぜ？」

「そちらがそうでもこちらはアマゾンを全て狩るつもりだ。」

「へえ、気が合うな、俺もだ。だが今ここでくたばるわけにはいかねえな。」

「僕だつて…今ここで死ぬわけにはいかない！」

オメガとアルファは攻撃姿勢を取りながらゆつくりと背中を合わせる。

「ここはとりあえず休戦つてとこだな。お前とこうやつて戦うのはシグマ戦以来か？」  
「ここを切り抜けるまでですかからね。」

「わーつてるよ。また嫌そうな顔すんなや。」

「わかんねえけど…ですよね？」

赤松のハンドサインで隊員たちが一斉に発砲する。2体のアマゾンはその瞬間お互いの背中を守りつつ戦闘を始めた。

# E p i S o d e 7 「M o m e n t o u s G l i t c h」

放たれた弾丸を見切つてシェルカットグローブで弾くオメガとアルファ。  
続いて赤松隊の隊員たちがサバイバルナイフでオメガに襲いかかる。アームカッターを大きくさせてサバイバルナイフを弾き、腹部にパンチを叩き込んだ。

一方のアルファも銃弾を浴びせられながら手刀で隊員たちの後頭部を攻撃する。どんどん倒れていく隊員の多さに動じることなく赤松は圧裂弾を装填し、アルファの方に銃口を向けた。

「……仁さん！」

「……」

オメガの声で圧裂弾の存在に気が付いたアルファはコンテナに飛び乗る。

「な……！」

「わりいな、コイツは没収だ。」

アルファは赤松の顔面に裏拳を叩き込み、圧裂弾を撃つ銃を足で踏んで壊した。溜息をつくと共に下からジャングレイダーが走り去っていく音が聞こえる。

オメガは冷気を放ちながら悠の姿に戻りこの場を去つていった。

「へ、俺を囮に使うとは……少しは成長してるじゃねえか。」

「鷹山ア……！」

「お前が4Cの隊長か。ご心配なく。俺はアマゾンを狩るだけだ、一匹残らずな。」

アルファはそういうと隣のビルへと飛び移つていきその場から姿を消した。

カオリは家の外から物音がしたことに気が付き恐る恐るドアを開けた。そこには傷だらけのマモルに肩を貸すハチアマゾンが立っている。

「マモル！ 大丈夫？！」

ハチアマゾンは冷氣を放ちつつ島田の姿に戻る。

「4Cにやられたの？」

「いや…実は…」

「島田くん！」

島田は天城のことをカオリにも伝えた方がいいと言つたが、マモルは傷だらけになつた今でもそれをカオリに言わないよう島田に念を押していた。

「…4Cの奴らが多かつたんだ。」

「うん…。」「そうなんだ…。仲間の中でも戦うのをやめた人もいるし…仲間が欲しいね。」「うん…。」

それでも仲間が変わつてしまつたことは伝えなくてはならないと思う島田。しかし今はマモルの治療が最優先だ。島田はカオリに傷薬と冷蔵庫に入つてゐるハンバー  
ガーを持つてくるよう頼んだ。

カオリが部屋の奥へ行くのを見ると島田はマモルの耳元で天城のことを話す。

「天城……一体どうしたというんだ。覚醒していただけじゃないだろ？」

「うん……もしかしたら4Cに何かされたのかも……ね。」

マモルの目は出会った時に比べて随分鋭くなつたようと思える。それは戦いの中に身を置く決意をした彼成りの覚悟の現れだつたのかもしれないが島田にとつてはどこか寂しくも感じだ。

夜まで研究に勤しんでいた始はやつと自分のマンションにたどり着いた。自転車を駐輪場に置き、鍵を探しながら歩いているところの間大学で出会った青年が入口に立つていた。

「水澤くん！ どうしたんだ、こんなところで。」

「先生、すいません。この時間なら、自宅にいらっしゃるかと思つて。」

「いやそれは全然いいんだが。それよりその血…アマゾンか？怪我は？」

「大丈夫です。ほとんど返り血です。」

「そうか、とりあえず家に入りなさい。」

「いえ、娘さんもいらっしゃると思いますしここで失礼します。先生にお会いしにきたのはこれを調べてほしいんです。」

「そういってアマゾンロウが捨てたアマゾンズインジエクターをポケットから取り出し初めに渡す悠。」

「これは？中に少し液体が残ってるようだがこれを？」

「はい、僕の温厚だった仲間がアマゾンを喰らうコツパタイプになつてしまつたんです。恐らくその薬品がそうさせたんだと思います。」

「コツパタイプ：今まで鷹山くんもそうなつていたらしいね。彼の細胞も採取してあるから、それも含め見てみよう。」

「ありがとうございます。僕、こんな感じでいつ死ぬかわからないからすぐに先生に渡さないとつて。」

「そんなことを言うなよ。君とはきちんとアマゾン細胞の研究をするつて決めたじやな

いか。」

「そうでしたね。すいません。じゃあ…失礼します。」

「あ、そうだ。鷹山くんの子供：生まれるのは12月になりそうだ。」

「…じゃあ僕はその間、仁さんを見張っています。」

悠は赤いメットを被り、ジャングレイダーで去つていった。夜は真夏の暑さを感じさせず心地が良い。もしこんな状況じやなかつたらもつと気持ちがよいツーリングが出来るのにと新たな命の誕生のことを聞き思う。悠はジャングレイダーのアクセルを回して山の方へと走つていった。

冬に入ると早朝の任務にはカイロが必須となる。きちんと腰と腹部にカイロをつけた三崎はサブマシンガンを手にボタンフックエントリーの態勢でアマゾンたちの隠れ家のドアに背中をつけていた。

「じゃあ行くぞ。」

—COPPA—  
コッパ

「ハアア！アマゾンツ！」

熱気による衝撃派によつて隠れ家のドアを吹き飛ばす。コツパの合図と共に三崎と望が部屋の中へ入つていく。サブマシンガンとサバイバルナイフを構えた2人に襲い掛かるアマゾンたち。

「ノンちゃん！」

「わかってる！オラア！」

望の蹴りがクモアマゾンの腹部に叩き込まれる。レガースから放たれる電撃がクモアマゾンの体を麻痺させる。

三崎はサブマシンガンによる連射攻撃をモズアマゾンに放ち、体の部位を吹き飛ばしていく。

コツパは2人の攻撃に怯んだアマゾンたちの頸動脈に両手を使つてアームカツターで切り裂く。奇声に近い叫び声をあげて2体のアマゾンは倒れた。

「ハ力ちゃん、終わつたよ。」  
「ああ。」

コツパは倒れたアマゾンに飛びついて喰らい始める。その姿を見ないように三崎と望は家の外に出た。

「何度見てもありや慣れないなあ…。」

「そんなことよりおかしくねえか?」

「え?」

「少なすぎだろ。アマゾンたちの隠れ家で一齊駆除つて話だつたのに2体しかいねえつてどういうことだよ。」

「あ、確かに…。」

望がすぐにトランシーバーで令華にこの違和感を伝えた。通信をしている間に口にアマゾンの黒い血がべつとりとついた商が家から出てきた。三崎はすぐにハンカチを出して商に渡す。

「あーあーあー、これで拭きなさいよ。」

「…さんきゅ。」

「おい、お前ら。」

「あ、なんかわかつた？」

「ああ。この場所に行つて話を聞けつて。」

「話つて…だれに？」

望は黙つたまま輸送用バンに乗り込む。三崎もやれやれと呟きながら運転席に乗り、商は渡されたハンカチで体についた返り血を拭きながら望が座る荷台に入り込んだ。

指定された場所にいたのは三崎と望がよく知る人物 福田だった。今シーズン最も寒い日と天気予報で言つていたが、福田はいつもと変わらぬ装備で無表情で武器の手入れをしていた。

「福田さんがウチらを呼んだんですか？」

「…そうだ。アマゾンが全然いなかつただろ。」

「そうそう。隠れ家なのにおかしいねって話しててさ。」

「4Cが先に駆除していたんだ。家から離れていた奴らをお前たちは駆除したというわけだ。」

「なるほどね。お残りを頂いたってわけだ。」

「その話をしにきたんじやない。橋局長からお前たちに伝言を預かつてきた。」「伝言…？」

福田はポケットに入っている封筒を手渡した。

「簡単に言えば4Cと野座間共同でアマゾンたちの最大の隠れ家を叩こうというわけだ。先ほどお前たちが駆除を行った家で別の隠れ家の情報が手に入った。場所は関東北部の地方都市の山林地区の中にある廃別荘だ。」

「なんで4Cが共同なんて？」

「お前たちには…尾宿がいるだろう。」

バンの中で必要にハンカチで血を拭き続いている商を見ながら言う。

「こちらにはアマゾンロウがいる。2体のアマゾンの戦力と我々、そしてお前たちの力で一気にやろうつてわけだ。」

「なるほどね。これを令華様に言えつてわけね。」

「お前たちとパイプがつながっている俺に橘局長は言つてきたというわけだ。：頼んだぞ。」

福田の顔はどこか疲れているようであつた。アマゾンを駆除するという点に関しては昔と何ら変わりはないのにその頃と比べて何か違う気がする。

「おつけ。まあハカちゃんにもそれでいいか聞いてくるよ。」

「三崎。」

「ん？」

「…奴はマモルじやない。代わりにはならないぞ。」

「…！」

「……わかつてているならいい。」

今の自分の顔も福田のような顔になつてゐるに違ひない。三崎はそう思いながら商の元へ行くのをやめた。

後日三崎と望、商は4Cに呼ばれた。入口で福田が出迎え、厳重なセキュリティを通して櫛のいる局長室に足を踏み入れた。

「久しぶりだね、元駆除班の皆さん。是非実戦経験豊富な皆さんには”私の”4Cに入つてほしかったから非常に残念だつたよ。」

皮肉交じりの再会に三崎は思わず苦笑いを浮かべる。仲間だつた前原をあんな姿にしたこの男の元で誰が働きたいと思うだろうか。

「そして初めまして、尾宿商くん。」

「アンタがこのベルトを俺に渡した張本人つてことか。俺の体を調べて何しやがつた？」

「君のそのアマゾンを喰らいたいという『感情を量産』したんだよ。」「感情を…？」

「それがこれだ。」

局長室の扉が開くとそこにはストレッチャーに縛られた天城が運ばれてくる。その顔は無機質で感情が失われていることが一目でわかつた。

「…」

「ハカちゃん、知ってるの？」

「…いや。」

嘘をついた。三崎は信用できる男だつたから今まで嘘をついたことはない。だが今は単に昔の自分を知られたくないくて嘘をついたのだ。この男はトラロックの日、人を喰っていた商を止めに入つた“人間とアマゾンを繋ごうとしたアマゾン”だつた。

そんな男が今や人間たちについてアマゾンを無慈悲に狩る機械になつたというのだろうか。今はアマゾンを喰らうような生き物には見えない。いやむしろ生き物に何か必要なものが欠けてしまつたかのような存在…。

局長室を出ると三崎たちは青山隊の待機室に通された。中には青山と隊員の藤尾、中島が座つており、わざとらしく丁寧な挨拶をする。

「私が4Cの青山隊隊長 青山です。よろしくお願ひします、元駆除班の皆さん。」

「へつ、くつさいことしてんじやないよ、青山ちやん。」

「へへ、皆さんお久しぶりです。俺が野座間にいた頃と変わんないっすね。」

「まさか清掃班だつたお前が4Cで隊長やるとはな。」

「三崎さんと同じような理由ですよ。」

「金は大事だなあ…。」

野座間製薬の元清掃班であつた青山は駆除班の面々とは顔なじみであつた。福田も久しぶりの雰囲気に表情にはあまり出さないもののどこか嬉しそうであつた。

「今回はウチの班、そして白木隊と野座間の皆さんで別荘地へ駆除にし行きます。天城は黒崎隊の管轄ですが今日は非番なので俺たちがみます。」

「4Cの戦力は?」

「最近完成した圧裂弾という武器がありますが、衝撃波が凄まじいことや別荘の構造上

崩壊の恐れもあるので容易には発射出来ないのが推測されます。後は野座間側とそこまで変わらないかと…。」

「じゃあ天城つてアマゾンは？ハ力ちゃんとそんな変わらないかね？」

「尾宿商に関してはこちらもそこまで情報がないので何とも言えませんが、黒崎から1つ言伝があります。」

「言伝？」

「『天城には決して見方は近づくな』だそうです。」

「…！」

ストレッチャーに縛り付けられ大人しくしている彼が本当に戦いに参加出来るのか不安であつたがまた別の不安が三崎と望を襲つた。

一方の商は青山隊の隊員たちに天城のことを聞いていた。

「なあ、奴は口ウ成分つてやつでアマゾンを喰いたくなつてるんだよな。」

「そうだよ。お前の中で分泌された成分を人工的につくつたもんらしい。」

「そんな成分ごときであんな腑抜けだつたやつをアマゾン狩りのモンスターに出来るもんかね…。」

カラスアマゾンになつた時の戦闘力は確かに目を見張るものがあつたのは覚えているが結局甘いことしか言つていなかつた印象が大きい。そんなやつが容易に殺戮衝動に目覚めるものなのだろうか。

そんなことを思いながら準備を始めた周りを見て、商も身支度を始めた。

十数人分の食器を洗い終えたカオリは次に洗濯をするために別荘地の庭に出た。各地の隠れ家が4Cと野座間の駆除班に襲われ、行き場をなくした者たちは皆この別荘にいるのだ。

「カオリちゃん、洗濯は俺がやるよ。」

声をかけてくれたのは剛だ。アマゾンを助けた人間ということで足がつくのは時間の問題だと思ったのか一緒についてきてくれた。そしてもう1人の人間がここには住んでいる。

「でも結構な量ありますよ…？体壊しちゃいますって。」

「おいおい、俺はあ昔大工だつたんだぜ？体力なら自信があんだ。それより神山になんか持つてつてやつてくれねえか？ブーブーまた文句言つてんだ。」

伸びきつて脂ぎつた髪にニキビだらけのその顔にはイースヘブンの教祖として贅沢の限りを尽くしてきた男の面影はない。

「わかりました、じゃあお願ひしますね。」

人間を喰らうことなどアマゾンならば簡単だ。しかしカオリたちにはそれは出来ない。マモルはかつての仲間を喰らいそうになつてしまつたから、島田は単に趣味が合わないから、そしてカオリはかつて人間を愛してしまつたから人間を喰えなくなつてしまつた。

逃がせばアジトの場所も4Cにバレてしまうだろうし結局神山をここまで連れてきてしまつた。しかし無理やり連れてきたころに比べて随分安定したというか：とにかく馴染んでいた。

わがままでいい奴でないが、神山がいることは最早当たり前のようになつていた。ペットのような感覚なのだろうか。カオリにもよくわからなかつた。

「はー、気持ちいいなあ。」

体と洗濯物のしわを伸ばしながら作業をするカオリ。今日は12月にしては珍しくちょうど良い気候だ。しかし島田の一言でその余裕はなくなる。

「人間たちがここに近づいてる！すぐに準備をしろ！」

「…！じゃあ水澤くんに連絡も…。」

「…アイツに…か。マモルは嫌がるだろうな。」

「…でも守つてはくれるし。」

「…そうだな。だがまずは逃げる事を優先するんだ。」

カオリはすぐに洗濯かごを置いて自室へ駆けていった。ついにここも見つかってしまつた。また逃亡の日々が始まるのだ。

『こちら白木隊です。アマゾンたちがこちらの動きに気が付いたようです。』  
「まじか：了解。先におっぱじめててくれ。」

青山隊のバンに先に別荘付近で待機していた白木隊の隊員から連絡が入った。

「あらら、どつからバレたんかな。」

「簡単だ。俺や天城がこのバンに乗っているからだろ。」

「どういうこと？」

「アマゾン同士はお互いの存在が分かる。コツパタイプの2人は匂いがちがうんじやねえか？」

望の指摘通り。三崎も「ああ」という声を漏らした。

「そんな遠い所から感知できるやつがいたなんてなあ。まあもう白木隊が戦闘に入ります。すぐに援護行きますよ。」

青山と野座間駆除班らの会話を聞いた福田はアクセルを強く踏んで現場へ急いだ。

銃声の音を聞いて部屋で休んでいたマモルは目を覚ましすぐに飛び起きる。部屋を出ると白木隊の隊員たちがマモルに向けてショットガンを放つ。熱を発しながらモグラアマゾンに変わるマモル。

「ウオオオオ!!」

傷が治つたことでかえつて強化された肩アーマーがモグラアマゾンの戦闘力の高さを思わせる。硬化クロード襲い掛かる隊員たちを次々と攻撃していく。

入口の方では青山隊の輸送用バンが到着し、後ろから三崎、望、青山、商が出ていく。そして福田が運転席の横にあるボタンを押すと天城は自身の拘束が取れて自力で荷台から降りた。

「……ンンアアアア!!!!」

「?」

拘束が取れたことがトリガーとなつてゐるようだ。天城は血走つた眼をギラギラと輝かせて手にしているネオアマゾンズドライバーを装着した。それをみた商もアマゾンズドライバーを腰に巻く。

天城はオレンジ色の液体が入つたアマゾンズインジエクターをネオアマゾンズドライバーのインジエクタースロットに装填しギミックを動かしてすぐにアマゾンズインジエクターでロウ成分を注入する。

—R<sup>ロウ</sup>  
H<sup>コッ</sup>  
O<sup>パ</sup>  
P<sup>パ</sup>  
P<sup>パ</sup>  
A—

「アアアアアア！アマゾンツ！」  
「ウオオオ！アマゾンツ！」

爆風が辺りを包み込み、周りは砂埃で前が見えなくなる。それが晴れると2人はコツバ、ロウヘと変身していた。

「さて行くぜ、ハ力ちゃん。」

「待て。」

コツパは後ろにいる4Cと駆除班のメンバーたちを止めた。アマゾンコツパの視線の先は砂埃が晴れてたところにバイクに跨つた人間のシルエットがあった。

「…！」

それはジャングレイダーでここに駆け付けた悠だつた。ヘルメットを取るとどこか大人びた表情が見え成長が感じられる。

「悠…お坊ちゃん…？」

「悠…。」

「…お久しぶりです。でも…みんなを殺させはしない！」

カバンからアマゾンズドライバーを取り出し装着し、アクセラーグリップを捻つた。

「アマゾン。」  
Oオ Mメ Eメ Gガ A  
Eエ Vヴ Oオ  
Eエ Vヴ Oオ  
Lリュ T  
Iショ O  
Nン N!!

冷静な掛け声はどこか鷹山仁を思わせる。立ち姿も理性的なオメガに対し、ロウは奇声を発しながら立ち向かつていった。

# Episode 8 「Meaningless Hunting」

| B <sup>ブ</sup>  
L <sup>レ</sup>  
A <sup>イ</sup>  
D <sup>ド</sup>  
E <sup>・</sup>  
L <sup>・</sup>  
O <sup>ー</sup>  
A <sup>・</sup>  
D <sup>・</sup>  
I <sup>・</sup>  
N <sup>・</sup>  
G | <sup>ング</sup>

ロウは右手に生成されたアマゾンネオブレイドで襲い掛かるがそれを全て見切るオメガ。コツパはオメガが避けたところを狙つてフットカッターで蹴りをいれようとす  
るもオメガは自身のアームカッターでキックを抑える。

(俺の蹴りを左手だけで…!)

軸足となつている左足を狙つた攻撃を繰り出し、それを避けるために後ろへ下がるコツパ。ロウは距離を取ることはせず猛攻を仕掛けるも感情的な攻撃はオメガには通用しない。

「ウガアアアア!!」

「天城くん…。」

ロウの暴走する姿はかつてトラロックによつてコツパタイプとなつたアルファの荒々しい戦いを思い出させる。

これがあの優しかつた天城なのだろうか…。

「天城くん！ 思い出して！ 僕だよ、水澤悠だ！」

前に会つた時は悠のことを覚えてはいたが、結局欲望を抑えることはできずオメガに襲い掛かっていた。今はもう悠にすら気づかずにただ目の前の獲物を捕らえるためだけに動いている猛獣となつていた。

ロウにアームカツターによる斬撃攻撃で怯ませるとコツパが再び襲い掛かる。

そんな攻防を遠目から三崎、望、福田が見ている。あの悠が今は敵になつてゐるのだと改めて感じるのだ。

しかしアマゾンの自由のために戦う悠を攻撃するコツパとロウ、特に意思を持たずに戦うロウの姿は何だか嫌なふうに感じる。

「福田さん！援護射撃です！」

青山の声に我を取り戻した福田はショットガンライフルを手にスコープからオメガの姿を見る。

（俺は…4Cの人間だ！）

「フクさん！」

ショットガンライフルの引き金を引こうとした時、三崎の声がしてその指を止める福田。

「ホントに撃つのか？相手は悠坊ちやんだよ!?」

「…。」

「三崎さん…やめとけ。」

「でも…。」

「…アソツは強いな。自分の信じるもののために戦うことが出来る。だが俺は…。」

再びスコープを覗きこみ、オメガに焦点が定まつた瞬間引き金を引いた。オメガの肩に命中しバランスが崩れたところにコツパが噛みつき攻撃を繰り出す。

ロウが足と手を地面につけて飛びかかるうとした時、建物内から飛び出してきたモグラアマゾンがロウの体を抑え込む。

「天城くん！しつかりして！僕だよ、マモルだよ！」

「マモル！」

「マモちゃん！」

三崎や望の声に一瞬反応するマモルだが、その方向を見ることなく硬化クロード抑え込んでいるロウにひたすら声をかけている。

「天城くん！天城くん!!」

「ヴウウ…アアアアア!!」

「あま…ぎ…くん…。」

天城が理性を取り戻す様子はない。

「俺たちなら人間とも仲良くなれると思うんだ。」

天城はいつもそう言つていた。三崎の腕を喰つてしまつたマモルにとつて最初はその言葉を聞くと辛い気持ちに駆られる。悠は素直にそれに賛同していたが、マモルも含めた他のアマゾンたちは聞き流すばかり。

そんなある日、天城は一人で野座間製薬に直談判へ行つた。アマゾンの仲間たちは下らないと言つていたが、襲い来る人間たちを迎え撃つチームの仲間だつた天城をマモルは放つておくことなど出来ない。

結局1年以上マモルは天城を追いかけてきた。もしかしたらあの海岸で駆除班の仲間たちと決別を交わした自分とは違う結末に行きつくかもしれない天城にどこか期待していたのかかもしれない。

コツパがオメガの攻撃を喰らいつつ何とか防御しているとき、また新たに4Cのバンが到着し、数人の小隊が下りてきた。最後に降りてきた赤松の掛け声で全員が一斉にオメガに向けて発砲する。

「ウグッ!!」

「尾宿！別荘に入つてアマゾン狩れ！コイツだけをやるのが目的じやねえだろ！」

赤松の指示に頷いたコツパは銃弾に撃たれ続けるオメガを横目に建物内に入つていく。

「ま：待て！」

「お前水澤悠だな。全員撃ちまくれ！」

だが指示に従うことなくスコープでアマゾンオメガを見続けている隊員が一人。

「…水澤。訓練生志願した割には度胸がないな。」

「…すいません。」

「明日から青山のとこへ行け。優秀な部隊たる俺の隊には必要ない。」

赤松の一言にショックを受ける美月。隣にいる青山も思わず驚きの表情を見せる。オメガを助けることを望む彼女にとつてはただ見ているだけでも辛いのだろうと青山は思つた。

一方のロウはモグラアマゾンの拘束を振り切つて自由になると近くにいた駆除班のところへ飛びかかる。

「な…！」

「ヴァアアアア!!」

アマゾンネオブレイドで望に襲い掛かるロウ。すぐにモグラアマゾンはロウに飛びかかり抑えつける。

「マモル…！」

「違う！僕はただ天城くんを助けたい…だけだ!!」

赤松隊は一斉にモグラアマゾンとロウに発砲し、徐々に建物の方に迫いやっていく。建物内からはコツパがアマゾンたちを狩つていき、阿鼻叫喚の地獄絵図となつていてる。

「ヴァアアア！くそお！」

モグラアマゾンは建物内に入りコツパを止めるためにロウとの戦闘を放棄した。しかしそんなことはお構いなしと言わんばかりにロウはモグラアマゾンにしがみ付き噛みつく。

モグラアマゾンは振りほどこうと抵抗しつつ建物内に入つた。それを見た赤松はすぐにつランシーバーで建物内にいる白木に通信をする。

「白木、すぐに建物から出ろ。」

『しかし…隊員たちが重傷で！』

「今アマゾンたちを狩る絶好の状況なんだ。圧裂弾を使う。」

『そんな…！』

「局長の命令だ。」

『…了解。』

建物内でロウはインジエクタースロットを操作する。

| A<sup>ア</sup> M<sup>マ</sup> Z<sup>ゾ</sup> O<sup>ン</sup> · S<sup>ス</sup> L<sup>ラ</sup> A<sup>ツ</sup> S<sup>シ</sup> H |

左手のアームカッターにエネルギーが溜まっていくのが目に見える。その腕でモグラアマゾンに斬りかかるうとする。その間にボロボロのカニアマゾンが立ち塞がり、モグラアマゾンを守つた。

「立山くんっ!!」

「マモル…みんなを…守つてくれ！」

カニアマゾンはアマゾンパニッシュによって下腹部から出血しやがて液状となつた。

「ヴウ…アアアアア!!」

モグラアマゾンはすぐに建物内に残っている仲間たちを集め、裏口から逃げようとす  
る。ロウはそれを一蹴するため近づこうとするも自身の左腕が解け始めていることに  
気が付く。

!?!? アアアアヴウウ：！』

その姿を見たアマゾンコツパは何が起きているのかわからなかつた。しかしそれこそネオアマゾンズドライバーの代償。エネルギーが強い分その反動がある。アマゾンたちから見ればそんな死に方など望まないだろう。しかし今のコツパにとつてはそんなことはどうでもよかつた。

今自分は“何でもいいから”喰いたい。

アマゾンを喰らえば人々は喜ぶ。自身は望まれず生まれてきた実験体だが、アマゾンを喰らえば人間たちに迎えられるのだ。

しかしトラロツクの影響が薄まってきた今、人間を喰いたいという願望が抑えきれない。教会でマモルの仲間たちと戦った時、遠目に見た三崎がとても旨そうに見えてしまつたことは忘れられない。

辺りには液状のアマゾンの死体と戦闘で死んだ白木隊の隊員たちの死体が転がつて

いる。

旨そだ…。

「ハ力ちゃん！逃げろおおお！」

外から聞こえる声にハツとするアマゾンコツパ。その瞬間窓が割れ、光を点滅させながら圧裂弾が目の前で炸裂した。

赤松が放った圧裂弾の威力は別荘全体を破壊することなどたやすかつた。とてつもない衝撃波に外で戦闘を行つていたアマゾンオメガ、駆除班、4Cの面々も周りの物にしがみ付いて何とか吹き飛ばされないようにしていた。

爆風が落ち着いた跡には瓦礫とアマゾンの死体の液体。そしてバラバラになつた人間の四肢。

「なんだ…こりや。」

撃つた赤松本人も威力のすさまじさを驚かずにはいられない。実戦で初めて使われたこの恐るべき弾丸は奥の手といえるものになるだろうとその場にいる誰しもが思う。こんなものを何度も使つていては人間こちらがもたない。

砂埃が舞う中で悠はすぐにジャングレイダーでその場を去つていく。後ろから弾丸を放つもそれを軽々しく避けていく悠。その後姿を美月は黙つて見つめていた。しかし美月以外は瓦礫を踏みつける音のする方に一斉に銃口を向ける。

「誰だ？」

砂埃の中にネオコンドラーコアのオレンジ色が輝いて見える。

「天城か？」

ネオアマゾンズドライバーの装着者は黒い体をしていたが、カラスアマゾンのシルエットではない。出てきたのは装甲をつけたコツパがネオアマゾンズドライバーを装着している姿であつた。

「お前：あの圧裂弾からどうやって…！」

「ハカちゃん！ 良かつた：無事だつたんだね！」

望や二崎の声などコツパには聞こえていない。

圧裂弾が破裂する前にアマゾンロウからネオアマゾンズドライバーを奪い取り、すぐに自分の腰に装着した。全身が解け始めていたアマゾンロウは抵抗できずにその場に倒れる。

—R<sub>H</sub><sup>O</sup>—

「アマゾンツツッ！」

商の肉体から熱が発せられると共に圧裂弾の爆発が始まる。変身途中でインジエクタースロットを操作する商。

— A<sup>ア</sup> M<sup>マ</sup> A<sup>ゾ</sup> Z<sup>ン</sup> O<sup>ス</sup> N<sup>・</sup> S<sup>ラ</sup> L<sup>ツ</sup> A<sup>シ</sup> S<sup>ュ</sup> H —

腕に力が溜まつた時、ただひたすらに地面を掘つた。圧裂弾の衝撃を感じつつ痛む体に鞭を撃つてただひたすらに喜びを感じながら。

「俺は…アマゾンを喰いたい！ 口ウ成分を摂取した俺は…人間を欲していない！」

アマゾンズインジエクターを取り外しコツパから商の姿に戻る。

「ハカちゃん！」

「…三崎。俺はもう駆除班には戻らねえ。」

「え？」

「赤松…とか言つたよな。」

商は赤松の方に近づく。アマゾンに臆さず近づく赤松。

「なんだ？」

「俺を4Cに入れろ。そしてこのドライバーを使わせろ。」

「な…ハカちゃん！何言つてんだよ！」

「俺のドライバーは圧裂弾で使い物にならないしな。それにこのロウ成分…最高だ。」

商の顔は満面の、しかし狂気的な笑顔をしていた。確かに三崎はどこか商をマモルのように共に戦うことが出来るアマゾンであると誤解していたのかもしれない。

マモルはチームとハンバーガーのために戦っていた。

商は違う。彼は居場所を守るためにだけに戦っているのだ。食人衝動を抑えられるなら彼はどこにだって行く。半年以上共に戦ってきた仲間のことを何も…何もわかつてはいなかつた。

そんな日の午後、人とアマゾンとの間に生まれた赤子は産声を上げた。

雪が積もり足場が悪い山道をマモルたちは歩いていた。別荘での戦いからまた多くの仲間を失い、今いるのは島田、カオリ、高橋、そして剛と神山だ。

神山に関しては別荘においておけば圧裂弾で死んだだろうとマモルは言つたが、カオリはそれを許さなかつた。なぜここまでされても人間を恨まないのだろう。いやそれは自分にも言えることだ。なぜ人間が今でも喰えないのか。

山道を上がつたところに動物園が見えた。しかしどうの昔に閉園しているようで食料となるものはなさそうだ。

「次行こうか。」

「ハアハア…。」

「高橋…くん？」

「ダメ…だ…人だ…人の匂いが…する!!」

高橋の左腕を見るとアマゾンズレジスターが赤を示している。ついに高橋まで覚醒してしまつた。

「ウアアアア!!」

高橋の真の姿である蝶アマゾンの成虫態へと変化する。すぐにマモルたちもアマゾンに変化し蝶アマゾンを止めようとするが、蝶アマゾンは剛たちに襲い掛かる。

「いけないよ、高橋くん！だめだ！く…剛さん！逃げて！」

「マモル！やるしかない！やるしかないんだ！」

「ウワアアアア!!」

モグラアマゾンは蝶アマゾンの心臓を一突きにした。まもなくして蝶アマゾンの体は解けていく。

「どうして…どうしてアマゾンがアマゾンを殺さなきやいけないんだ！天城だつてそうだ。アマゾンを殺したくないのに殺させられるなんて…こんななの！」

ハチアマゾンから島田の姿に戻り涙をこぼす。体全体に黒い血がへばり付いたモグラアマゾンもマモルの姿に戻りながら冷静に答える。

「アマゾンがアマゾンを殺していいなら……人間が人間を殺してもいいのかな。」

「マモル……？」

「……何でもない。」

「おうい！こつちに来てくれ！」

逃げていった剛の呼びかけに答えマモルたちは馬小屋に近づく。そこには子供を抱きかかえて眠る女性の姿があった。

「こんなところで寝てるんだ。この女の人。」

「お……おいマモル！わかるか？」

「うん……この2人……アマゾンの匂いがする……！」

アマゾンたちの声に目覚めた女性はすぐに飛び起き赤子を抱いてその場を去ろうとする。

「待ってくれ……アマゾン……なのか？」

「……あなたたち……アマゾン？」

「俺は人間だ！ とりあえず安心してくれ。」

剛が間に入りその場を落ち着かせる。話を聞けばその女性はアマゾンとの子を授かつたのだという。

「アマゾンに生殖能力はないはず。一体どういうことだ？」

「仁は元々アマゾンじゃなかつたから。」

「仁って…あの鷹山仁!?」

マモルは思い出した。何度か見たことがある。駆除班にいた頃、鷹山仁のパートナーだつた女性 泉七羽。

「こいつ、私たちの仲間を狩つてくやつの…！」

カオリは熱を発しアリアマゾンへと変化する。七羽はまたすぐに馬小屋から出ようとするが剛が七羽の前に出た。

「よすんだ、カオリちゃん！彼女に罪はねえだろう。それにこんな赤子を襲うなど言語道断！」

「…すいません。」

アリアアマゾンからカオリの姿に戻る。剛は七羽に赤子を抱かせてくれと頼んだ。

「俺の息子はよ、アイツの嫁さんと一緒に事故で死んじまつて…。孫ももうすぐ生まれるって時だつたのによ。ああ…こんな感じなんだな、子供つて。アマゾンも人間も関係ねえよ。」

赤子を抱きく剛の涙は赤子の頬に落ちた。

「おっといけねえ。」

剛が指で赤子に落ちた涙をぬぐつた時、赤子はその指に噛みついた。

「いて！」

「すいません、大丈夫ですか？」

「いいんだいいんだ、もうしつかりした歯が生えてるんだな。」

「はい、私もこの前やられちゃつて。」

そんな2人のやり取りは祖父と母になつたばかりの人間たちのように島田の目には映つた。仲間を増やしたい…その願いが叶うかもしれない。

そんなことを思いながら島田とカオリは食料を確保するついでに粉ミルクも手に入れようとして話しかけた。笑うのはいつぶりだつただろうか。

皆が笑っている姿を見てからマモルは外に出て声を抑えながら涙を流す。中からは赤子の名前を聞くカオリの声が聞こえた。

「名前は…なんていうんですか？」

「千の翼で…千翼です。」

## E p i s o d e 9 「M I s t a k e s」

ジリジリと暑い日照りが続く中、七羽は島田と共に穴が開いてしまった屋根の修繕をしていた。

「はい2人とも！・冷たい飲み物どうぞ！」

カオリがアウトドア用のコップにいれた水を梯子の下に置いた。

「あ、ありがとう！」

「ごめんね、千翼の遊び相手してもらつてのにこんなことまで…。」

「逆ですよ。私たち修理とかそういうの出来ないから七羽さんにお願いしちゃつたんですけど。」

そういうとカオリはまた海岸でスイカ割りをしている千翼たちの元へ走っていく。別荘での大規模駆除が起きた後、仲間たちはバラバラになつてしまつた。しかしアマゾ

ン同士の共鳴によつて徐々に仲間が集まつていき、今は10数名のコロニーを形成している。

「そういえば前にいたふれあい動物パーク、あそこに鷹山仁が現れたらしいですよ。」

「…！ そう…なんだ。」

「悠もいたらしいからあとから言つてみたんですが、まあ当然誰もいなくて。」

「あの子、まだ生きてるんだ。」

微笑を浮かべて梯子を下りる七羽。もう修繕は終わつたようだ。

「前にいた場所に鷹山が現れるつてことでここもいづれ危ないかもしね。だから別の隠れ家になるかもしね」ところを見てきます。」

島田も梯子から降りると土間に置いてあつたポーチを手に神山の名を呼ぶ。

「神山さんも行くの？」

「ちょっとまあ…なんていうか…。」

「俺も行くぜ、七羽ちゃん！」

神山に続いて剛も家から出てきた。江戸っ子を思わせるねじり鉢巻きは顔のあちこちにしわのある剛の顔にとてもよく似合う。一方の神山は前に比べて随分アマゾンたちと話すようになつたものの、七羽と話すときはどこか恥ずかしそうだ。

「いってきます…。」

「いってらっしゃい。」

七羽に送られて島田と神山、剛は隠れ家を後にした。海岸を歩いてから人の目に着かぬように田舎町を通っていく。町を抜けて山道に入ると先ほどよりもずいぶん涼しくなつた。直射日光も当たらなくなつたので神山は麦わら帽子を外した。

「あー涼しい…。まだ夏は続くからこういうところに隠れ家を用意しておくつてのもありだなあ。」

「神山ア…おめえなんか…。」

「?」

「いい感じになつたな。」

「ハア？ 何言つてんすか。」

恥ずかしそうにまた麦わら帽子を深くかぶる神山。大規模駆除から必死に逃げている間に神山は性格が変わつたような気がする。

「ただ…アマゾンも必死に生きようとしてるつて思つただけすよ。人間も一生懸命生きようとして…そんな奴らを騙すようなことして飯食つてたんだなつて実感しちやつて。」

「それがわかつただけでも十分いいことじやねえか。アマゾンに喰われてなくてよかつたな、神山くんよ！」

ボンと神山の背中を叩く剛。

「それともう神山はよしてください。本名の小林でいいですよ。」

「神山の方がなんか面白いじやないか。自分でつけたんだろ？ だつさいな！」

島田も神山をからかって笑い飛ばす。思わず神山も照れ隠しに島田へ体当たりしようとすると、木の幹に足を引っかけて転んでしまった。

「おおい！大丈夫か？」

「いつて…くじいたかな？」

「しようもないことでケガすんのは相変わらずだな。」

「ん…あ！ちょっと島田さん！あれ！」

ちようど転んだ角度の視線の先に川が流れ、そのほとりに小屋が立っている。

「でかしたぞ、神山あ！」

「小林でいいです！」

神山に肩を貸す剛と島田、なんとかその小屋までたどり着いた。剛が足を見てみると捻挫している様子だ。

「湿布持つてくりやよかつたなあ。」

「じゃあ自分戻つて湿布とか持つてきますよ。」

「夜にならんようにな。このあたりよくわからんねえからよ。」

このあたりにアマゾンが出るなどは聞いたことがないが一応ショットガンライフルを一丁置いて島田は七羽たちのいる隠れ家へ戻る事にした。4時間もあれば往復できるだろう。

かつては足手まといとして嫌がっていた神山の存在も今は足手まといであることに変わりはないものの嫌な感じはなかつた。

いやむしろ人間の彼が自分たちを毛嫌いせず接してくれるようになつたことは心地の良いことでもあつたのだ。

そのような良好な関係を最も喜んでいたのは人間とアマゾンの共存を夢見ていた剛だ。生きてさえいて正常な状態であれば天城はもちろんだつたが…。

「剛さん、ちょっと飲み物貰つていいですか？」

「…。」

「剛さん？」

足をさすりながら立ち上がつてゆっくりと剛のいる方へ向かう神山。ゆっくりと振り返つた剛の首から顔にかけて黒い血管が浮き出たかのような模様が浮き出でている。

「ひやあ！…剛さん！」

「か…みやま…。」

腰を抜かす神山の前で剛は熱風を放ちながら異形の姿へと変わつていった。

青山は溜息をついてから隊員たちが待機する部屋へ入つた。一面が打ちっぱなしのコンクリートで寂しい感じは否めない。入つてまずすぐに白木が立ち上がり一礼をしてくる。

別荘での一件で白木隊はほぼ全滅し、その責任を取る形で白木は隊長から降ろされて青山隊に配属となつた。政府側の人間とはいえ優しく協調性もある白木が隊に入つたことは青山にとつてはよいことだつた。

青山隊にいた藤尾は隊長となり中島と共に隊を編成したという。これで青山隊は福

田、白木、そして別荘戦で得た4Cの新たな戦力 商の4人となつた。

商はといえばことあることにロウ成分の入ったアマゾンズインジエクターを体に打ちこんでいる。最近は接種のし過ぎを白木に叱られていた。

半年ほど野座間の駆除班で戦っていたようだつたが、そちらに未練はないと言つてゐる。人間を喰らつていた時は喰う立場でありながらその人間に追われる駆除対象でもあつた。

トラロツクによつてそれが変わり、アマゾンを喰らうようになると今まで命を狙つてきた者たちが今度は自分を必要とするようになる。駆除班での活動はそれを特に感じることが出来たといふ。

しかし分け合つて駆除班ではなくロウ成分を持つ4Cの方へ自ら望んできた。青山には理由が分からなかつたが、本人が納得していればいいと思つている。

「そう言えば青山、水澤美月はどうなつてる?」

「あー、福田さん知り合いなんでしたつけ?ウチに預けられてはいましたけど本人の希望でまた訓練生に戻りました。なんかまだ自分はアマゾンとは戦えない、やらなくちやいけない訓練がある…とかで。」

「…そうか。」

福田は4Cに入つてから饒舌になつた：気がする。野座間の駆除班にいた時には声など聴いたこともなかつた。

あの頃から随分状況は変わつたなあなんて考えていると別室のサイレンが鳴り響いているのが聞こえた。しばらくして男たちが武装して地下駐車場に走つていく足音が聞こえる。

「どこの隊だろ？」

「今日の当番は黒崎隊ですね。」

さすが白木。

黒崎隊は名前の通り黒咲が隊長を務める実力派の小隊だ。橘自らの推薦で黒咲は4Cに来たということもあり政府から派遣された札森は黒崎の下に着くことになつたことに納得がいつていないようだつた。

同じ隊の本田と鴻も初めは同じような感じだつたが、訓練で黒崎の実力を見てからは他の隊長に対しても同様、敬意を示すような態度に変わつたらしい。

すぐに足音はなくなる。輸送用バンに皆乗り込んで現場にいつたのだろう。待機班

である青山隊はそれぞれの暇つぶしをしていた。

4Cの輸送用バンを進めるギリギリのところで駐車して黒崎隊は銃器を手に山の中を進む。今回のアマゾン出現の警報はアマゾンズレジスターから発せられた反応ではなくこの山を歩いていた登山客が呟いたSNSがきっかけだった。

7年前野座間製薬で事故が起き4000匹の実験体が放たれた際、すぐに野座間製薬は極秘に日本政府に対してそのことを報告した。

それによつて日本から出国する際は極秘でアマゾンか否かを確認するシステムが空港や港でなされるようになつたため、国外に実験体がいることはほぼ100%ありえない。

とはいゝ念には念をということで4Cの情報部は世界中のSNSを常に監視し、アマゾンらしき目撃証言があればどんな遠い場所にも駆けつけることにしているというわけだ。

その監視体制が今日初めて役立つ…かもしれない。登山客曰く遠くにあつた小屋から悲鳴のような声と獰猛な生物の唸り声が聞こえた“かもしれない”のことだった。

黒崎は性格柄そのような曖昧な情報で駆り出されることにとても不快感をあらわにしていた。しかし問題の小屋に着いた時に不快感は消えた。

血の匂いがする、それもかなり強い。小屋の中からは何かを喰うようなクチャクチャという音が聞こえる。

クマなら一発で殺せるが経験からこの感じは山に住む動物ではないと黒崎は察していた。バンに残つた札森以外のメンバー2人は小屋の扉の左右につき、ボタンフックエントリーによる突入準備を整える。

黒崎のアサルトライフルによる射撃で扉が壊れると同時に黒崎は左手で合図をし、本田と鴻がサブマシンガンを構えながら小屋へ入つた。

部屋の中はまさに血の海。挽げた四肢と臓器が辺りに散らばっている。人の体だつた肉の筋肉の筋を丁寧にすすつてている老人の姿。

「こ……これは！」

「札森イ！」

『んー、おかしいっすね。腕輪の反応はないですー。』

ということはアマゾンズレジスターがついていない、あるいは自力で外したアマゾン

なのだろうか。いずれにせよ満面の笑みで振り向きながら熱を発し始めた老人は間違いない駆除対象である。

半分寝かかっていた青山の所に増援要請がかかってからすぐに青山隊も出動し、数十分で現場に到着した。隊員で死人は出ていないらしいが苦戦しているようだ。

いつも偉そうな黒崎が増援を頼むのは相当なのだろう。笑顔を見せている商を除いて青山隊の隊員たちは緊張感に苛まれている。

銃撃音がする方向へ向かうと小屋の近くでヒヒアマゾンと黒崎隊が戦闘を行つていた。電撃が走る弾丸を撃ち込んでも大して効いている様子はない。通常の実験体ならばかなりの効力があるはずだ。

「くっそ！なんだコイツ！」

「隊長！弾がもうありません！」

「くそがア！」

黒崎が悔しがっているのは先ほども言つたように気分がいい。しかし今はそんな状況ではない。福田のスナイパーライフルから放たれた弾丸がヒヒアマゾンの足に命中

する。

「……やつと来やがったか！おせえぞ、青山ア！」

「うるさい！こつちだつて急いできたんだ！それよりアマゾン1体ごときで何苦戦してんだ！」

「そんな言うならやつてみやがれ！」

「だそうだ、商！」

「……ああ！」

商の腰には既にネオアマゾンズドライバーがつけられている。オレンジ色の液体が入ったアマゾンズインジエクターをインジエクタースロットに装填し操作する。

「ウウウ……アマゾンツ!!」

— N E W · C O P P A —

とてつもないオレンジ色の爆炎と同時にパリアのような半球体を出すエフェクトがかかり、商はアマゾンニューコッパへと変身した。

ロウ同様、コッパの姿に不完全な装甲が胸につけられただけだが、ネオアマゾンズド

ライバーによつて適量のロウ成分が摂取され続けているため、戦闘力はもちろん食人ならぬ食アマゾン衝動も高まつてゐる。

「ウウウウアアア！」

待ちに待つたごちそうだと言いたげにヒヒアマゾンに飛びかかるニューコツパ。噛みつき攻撃は弾丸と異なり傷口からは黒い血は噴き出している様子から効果を示しているようだ。

「物理攻撃が一番つてか。」

「そつちが得意な奴はあいにくここにはいない…。商！頼むぞ！」  
「ウウウ！わかっている!!!」

興奮しつつもまだ理性は保ててゐる。4Cに商が入つてから間もない時はアマゾンの存在に興奮してしまひまるで周りの声は聞こえていなかつた。

ニューコツパは左手のアームカッターの刃を大きくさせヒヒアマゾンの頸動脈を一撃で切り裂く。尋常ではない量の血が噴き出しそれを顔に浴びるようにニューコツパ

は近づいていく。

「オラ、解ける前に喰うんだろ？早くしろよ。」

黒崎が吐き捨てるよう言うとため息をついて撤収準備を始めようとした。ニュー  
コツパは商の姿に戻ると言われるがままにヒヒアマゾンの死体を貪る。

肉を口にいれた瞬間、とてつもない違和感を感じる。

自分はアマゾンが喰いたい。でも今口にした肉はわずかに人間の味がする。自分は  
人間を喰いたくない。アマゾンが喰いたい。今アマゾンを食べている、アマゾンの味が  
する。自分はアマゾン。アマゾンがアマゾンを喰らう…………？

「ウアアアアアアアア  
!!!!!!」

訳が分からなかつた。そうだ、自分はアマゾンがアマゾンを喰つていいのか疑問に  
思つていた。しかし人と生活を共にすることアマゾンを喰らえば人間に必要とされ  
るからその疑問を自分の心の奥深くに隠していたのだ。

今口にした人間の味もするアマゾンの体はそれを商に思い出させた。発狂を続ける

商を落ち着かせようと青山隊の隊員たちが近づくが興奮を抑えられない商の体から熱が放出され始める。

「伏せろ!!」

黒崎の声と共に商はサソリアマゾンへと姿を変え、毒が仕込まれた尾を見境なく振り回す。ヒヒアマゾンに突き刺さる直前に死体は解けることなく硬化する。

「?  
!」

サソリアマゾンの暴走に気を取られている白木以外はそれに気が付かない。しばらく尾によつて木々がなぎ倒されていつたが、まもなくして辺りは静かになる。

サソリアマゾンはいなくなつた様子を遠目から見た島田は涙を流しながら隠れ家へと帰つていつた。

サソリアマゾンから商の姿に戻るとすぐに道の端に吐瀉物を出した。もはやアマゾンを喰いたいのか人間を喰いたいのかわからない。体と心の受け付けているものがめちゃくちやで、何なのかわけがわからない。

「お前、アマゾンを喰えなくなってきたのか？」

振り向くとそこにはフードをした男が立っている。辺りをキヨロキヨロしているが焦点が定まっている様子はない。

「ハアハア…鷹山…仁！」

「やっぱこの匂いはお前だつたか。前に嗅いだことがあると思ったよ。それにアマゾンの血の匂いもしたからな、お前がそのアマゾンを狩つたんだろ？」

「そうだ！俺はアマゾンを喰らう！」

「おいおい、でも胃酸の匂いがブンブンだ。アマゾンが喰えなくなつてんだよ、お前。」「どういう…ことだよ！」

仁はフードをとつてアマゾンズドライバーを腰につけた。

「お前トラロツクによる症状は既に治ってんだよ、俺と同じくな。」

商にとつてのトラロツクの影響は食人衝動が食アマゾン衝動に変わった事。それが治つたということは商が欲するのは人の肉ということだ。

「で…でも俺は口ウ成分を打ち続けている！あれさえあればどんなアマゾンだつて人じゃなくアマゾンを喰らうようになる！」

「そんな便利なもんがあつたらとつくに野座間の本部長様が利用してるだろうよ。トラロツクを大量に浴びた者にしか口ウ成分は効かねえ。そういつたところだろ、口ウ成分つてのは。」

確かに天城とはトラロツクの雨を浴びながら戦闘を行つていた。たまたま自分は傷口からトラロツクが侵入し症状が出たようだが、天城も症状には出なかつたもののトラロツクを浴びていたのは事実。

つまりロウ成分によつてアマゾンを喰らう衝動に駆られるためにはトラロツクを浴びてそれが体に残留していなくてはならないのだ。

「でももうトラロツクからは3年。おかげさまで俺もこの通りトラロツクの影響なんて治つちました。まあこの目は別件だけだな。」

目と目の間の傷をなぞつた仁はその手でアクセラーグリップを捻つた。

| A<sup>ア</sup> L<sup>ル</sup> P<sup>フ</sup> H<sup>ア</sup> A |

「アマゾン…！」

| B<sup>ブ</sup> L<sup>ラッ</sup> O<sup>ド</sup> O<sup>ド</sup> D<sup>アンド</sup> & W<sup>ワ</sup> I<sup>イ</sup> L<sup>イル</sup> D<sup>ド</sup> !! |

自分の体に起こっていることを知り震えが止まらない商。容赦することなくアル  
フアが戦闘態勢を取つた。

# Episode 10 「Maximum Judgement」

アルファのアームカッターの一閃を受けニユーコツパは変身を強制解除させられた。とても視力に障害がある男だとは思えない動きをしてくる。

スペック的にはネオアマゾンズドライバーを使う商が一步リードしているはずだが、その差を全く感じさせないどころかまるでアルファの方がネオアマゾンズドライバーを使っているようだ。

「さあ終わりだ。死んでもらうぞ。」

匂いを追つて横たわる商を跨ぐようにアルファが立つ。アームカッターによるとどめを刺そうとした時、どこからか弾丸がアルファに飛んできて商から引き離した。

「グア！」

発砲したのは三崎だった。その隣には望もいる。

「ハ力ちやん！」

声の方へすぐ行く商。それを追いかけようとするアルファだつたが、視力低下のせい  
で方向がいまいち定まらない。

(ち、アマゾンと人の血の匂いで奴の居場所がいまいちわからねえ。)

アルファが辺りの匂いを嗅いでいるうちに3人はその場を去つていった。

三崎は相変わらずの調子で久しぶりに会つたとは思えないほど親しく接していく。  
別荘での戦いの際、商は口ウ成分を初めて摂取したことアマゾンを喰らいたいとい  
う気持ちが湧いてきたことに夢中だつた。その時、三崎や望が何を思つていたのかなど  
考えもしなかつた。

「三崎…。」

「ん？」

「俺は…お前らを捨てたんだぞ。」

「それが？」

「え？」

三崎は義手をプラプラさせながら獸道から山道へと飛び出る。

「俺にとつてはイースヘブンにいたハカちゃんも駆除班にいたハカちゃんも4Cにいるハカちゃんもみんな同じハカちゃんだよ。」

「ウチらはお前がアマゾンを狩ってくれるいい奴だつて信じてる。どこにいたつてそれは変わらねえだろ。」

自分はなぜこんな仲間たちを捨てたのだろうか。アマゾンを喰らいたいと思うことがそんなに重要なことだつたのだろうか？

このまままた駆除班に戻つてしまおうか。そう思つた時、山道を輸送用バンが走行し

てきた。停車すると中から青山と福田が下りてくる。

「…フクさん。」

「…三崎、望。商は返してもらう。」

「ああ…。わかってるよ。」

今商が戦えているのは4Cの助力があつてのことだ。自分の意思だけで駆除班に戻るわけにはいかない。同じような理由で4Cにいる福田にとつてはその気持ちが痛いほどわかる。

商はゆつくりと三崎たちの元を離れ、青山に連れられ輸送用バンに乗り込んだ。福田は運転席に座り一度うなずくとギアをバックにいれて引き返していく。

「よかつたのか？連れ戻さなくて。」

横を見ると木にもたれ掛かった志藤が腕組をして立っていた。

「マコさん、アマゾンのこと教えてくれて…ありがとうございます。」

「ウチらのレーダーには映らなかつたよ。」

「俺も偶然帰り道にアマゾンを見つけただけだ。まさか商まで来るとは思つてなかつたけどな。」

「……俺たちも帰りますか！」

手をパンと鳴らすもやはり左腕には違和感があるようだ。

「……お前らアイツがマモルの代わりだと思つてないだろうな？」

「……フクさんにもおんなんじようなこと前言われたよ。」

「正直：思つてた。でもウチらのどこから4Cに行つちまつて……チームのためにアマゾン狩つてたマモルとは違うんだなつて思つたよ。」

「ならなんで俺の連絡にすぐ駆けつけた？ アマゾンにやられる様子はないつて言つたよな。」

珍しく真剣な顔を見せる三崎は志藤の方を振り向いた。

「ママモちゃんがどうとかだけじやないんだよ！ 仲間だつたんだ！ ハカちゃんは……」

「そう、ウチらの仲間だつた…。だから助けに来たんだ！」

「…なるほどな。でも俺から1つアドバンスをさせてもらうが…お前らこの仕事から少し離れる。」

「え…？」

「なんで？」

志藤が運転してきた車に乘ろうとした2人は思わず手を止めてしまう。

「お前たち…いや俺たちは…アマゾンに関わるとどうしてもマモルの跡を追つちまう。」

「…。」

「俺も全国でアマゾン狩りをしてて人間を喰つたことがない奴を仲間にしたほうがいいんじやないかだとゴチャゴチャ仲間たちに言つちまつてた。でも仲間たちからしたら狩りの対象を仲間にするなんてありえねえんだよ。マモルがいたことは”異常”だつた…！」

「そんな言い方ないでしょ！」

「わかつてゐるはずだ！駆除班に身を置いちまつたばかりに…マモルも背負わなくていい分の辛いことも抱えちまつたつて。」

「それは…。」

何も言えない。

そうだ、マモルの影を追つてここまでアマゾンに関わってきた。マモルで“失敗”をしてしまったから今度こそは…。

そう思つてはいる自分たちもいた。

「水澤令華には俺が言つてある。もちろん何か仕事を依頼することははあるかも知れないが…しばらくは堅気の仕事をやれ。」

「…。」

「お前たちは少しアマゾンから離れた方がいい。」

志藤は車に乗つてエンジンをかける。キーを捻つてもなかなかかからないエンジン。それはまるで3人の心の引っ掛かりを表しているようだつた。

輸送用バンの中には黒崎隊の面々も乗っていた。バンが進んでからしばらくして黒崎が商に近づくと早業で腕に手錠をする。

「なんだこれは！」

「なんだじやねえんだよ。てめえが尻尾ブンブン振り回したせいで白木がどうなつたと思つてやがる。」

「え…？」

白木はサソリアマゾンの尾による攻撃でかすり傷を負った。しかしサソリアマゾンの尾には毒が仕込まれている。今白木は4Cに運ばれ生死の境をさまよっているのだ。

「そんな…。」

「おめえ…アマゾンを喰いてえつてのは嘘か？」

「そんなことはない！俺はアマゾンを…！」

「じゃあなんであのアマゾン喰えなかつた!?あ!?」

あのアマゾン…ヒヒアマゾンのことだろう。なぜあのアマゾンから人間の味もした

のかは未だにわからないが、とにかくあのアマゾンを喰うとわけがわからなくなる。自分はアマゾンを喰つているのか、人を喰つているのか、アマゾンを喰いたいのか、人を喰いたいのか……？

「わからない……でももう……アマゾンは……喰いたくない……。」

「ついに正体を現しやがったな。聞いたな、お前らあ、コイツはアマゾンを喰いたくないそ、うだ。これは局長にチクつとかなきやなあ。」

もう言い返す気力もわかぬ。自分は何を喰いたいのかわからないのだから。

島田の口から衝撃の真実が告げられる。静かに波の音だけがするここでは島田の声がよく通る。

「そんな……剛さんがアマゾン……？」

「違うと思う。彼がアマゾンだったら俺たちは気がついていた。」

「じゃあ人間がアマゾンになつたっていうの!? それに：神山くんだつて…。」

その場に泣き伏せるカオリにアマゾンの仲間たちが寄り添う。その中に七羽と千翼の姿はない。

「あれ、七羽さんたちは？」

「2人なら別の隠れ家を探しにいったよ。」

「マモル…。」

「みんな：確かに剛さんや神山の死は辛いよ。でも人間がアマゾンになつたってことは仲間を増やすことが出来るかもしけないってことだよ。」

「おい、マモル！ 今そんなことを…！」

「黙つてよ、島田くん。」

ものすごい剣幕で島田を睨むマモル。かつての優しかったマモルの面影はもうない。別荘戦以来マモルは変わった。今まで天城という仲間を救うために戦ってきた彼にとって戦う目的がなくなつてしまつたからだ。  
しかしアマゾンたちにとつて戦う理由など“生きるため”で十分。

生きるためには仲間が必要なのだ。人間は優れた武器も持つていてが何よりその数の多さ、数の暴力がアマゾンらを不利にしている。

マモルはそう考へ始めてから仲間を増やすことに夢中になつていて。アマゾンに生殖能力はないがどうにかして増やそうとここ半年は動いていたようだつた。

七羽と出会つてから新たなアマゾンの誕生に希望を持ち、医者として人間の中で生きているアマゾンに協力を仰ぎ彼女らの細胞を調べているとも言つていた。

「たぶん剛さんがアマゾンになつたのはあの2人の影響だ。」

「なんだつて？」

「あの2人の細胞が人間の体の中に入ると…アマゾンになる。これだよ、僕が求めていたものは！」

マモルのこの表情を見ると島田はいつも思う。昔の優しかった彼はもう戻つてこないのだろうかと。

島田が溜息をついた瞬間、銃撃音が鳴り響き仲間の何人かは倒れ込む。4Cの赤松隊の襲撃だつた。

いい匂いがする。海辺の隠れ家にいた多くのアマゾンの匂いに似たものも混ざつているが、その中にあるのは人間の匂い。

無条件に自分を愛してくれる母親からこんなにいい匂いがする……。シャンプーの匂いだとかそういう類ではない。ただ旨そうなのだ。

それは特に腕からする。これをかぶりついてしまえば……。

そう思つてしまえばもう止めるものは何もない。自分の母親の腕にかぶりつき、引きちぎろうとした時、母の体から無数の触手が飛び出し千翼を弾き飛ばした。

その衝撃に思わず千翼は青色のアマゾン体へと姿を変える。6つの腕を使つて構つてほしい子供のように七羽を引っ張ろうとする。しかし七羽から繰り出される触手攻撃によつて掴んだ腕は引きちぎられていく。

「グギヤアアアア！」

七羽の姿は溶原性細胞を持つた新種アマゾンと同じく黒い血管のような模様を浮かび上がらせながら徐々にクラゲアマゾンへと姿を変わっていく。

腕を切り取られたアマゾン体は千翼の姿に戻る。そこへ赤松隊を中心とした4Cの部隊が到着しクラゲアマゾンに発砲をする。

そんな攻撃が効くわけもなく隊員たちの体が触手によつて切断されていく。泣き叫ぶ千翼、それを必死に抑える4Cの隊員たち…。

真っ白な部屋に閉じ込められてどれくらいの日が経つただろうか。結局時が経つたとしても自分が何を喰いたいのかという結論に答えは出ないわけだからさほどその疑問は重要ではないかもしない。

桶によつて危険なアマゾンと認定された商は貴重なサンプルとして4Cの中で飼われている。いつも通りボーツとしていると珍しく扉が開く音が部屋に鳴り響いた。

入ってきたのは腰にネオアマゾンズドライバーを装着している少年だ。

「お前は…？」

商の言葉に答えることなく黄色のアマゾンズインジェクターをインジェクタース

ロットに装填する少年。

—NEO—  
ネオ

「アマゾンッ!!」

赤いエネルギーを放出しながら千翼は黄色いバイザーを顔につけ、生命体とは思えぬ装甲を身に纏つたアマゾンネオに変身を遂げる。

いつもは研究員がぞろぞろと入つてくる近くの扉が少し開き、そこからネオアマゾンズドライバーとアマゾンズインジエクターが投げ入れられた。

いまいち状況が理解できない。と思った商に襲い掛かるネオ。なるほどそういうことか。

すぐにネオアマゾンズドライバーを腰に巻く商。千翼と同じようにアマゾンズインジエクターをインジエクタースロットに装填しようとするも手が震えて中々入らない。

「…！」

何とか入るとインジエクタースロットを上に傾けた。

— N E W · C O P P A —  
ニユ  
コッ  
バ

「アマゾン！」

商からもオレンジの爆炎があがりニユーコツパへと変身する。久しぶりのアマゾン体の変化に身震いしてしまった。

自分は何を喰うために戦うのか。そんなことを考える暇を与えることなくネオはパンチによる攻撃を繰り出してくる。

「ヴ ヴ ヴ アアアア！」

ニユーコツパの目にはアマゾンに対する憎しみのまま体を暴れさせるネオの姿が映る。

(コイツ…憎しみに囚われている。何が喰いたいとか…今は考えていない?)

負の感情で動くネオだったがニユーコツパにとつては彼の戦う動機が新鮮であつた。

食べ物の為だけに戦わない、それが羨ましいのだ。生き物は食べ物を得るためにある  
いは食べ物にならないために戦うのが普通だ。アマゾンも例外ではない。

しかしネオはアマゾンに対する憎しみを拳に込めて戦っている。自分も食べる食べ  
ない以外の戦う動機があつてもいいのではないか。

ニューコッパは気が付けばあちこちに傷を負わされている。ここで死ぬのだろうか。

(…いや俺は死はない。俺は自分の気持ちの為に戦う!)

自分の気持ち…それは…。

真っ先に三崎の顔が思い浮かぶ。望、令華、福田、青山……。アマゾンニューコッパ  
の頭に浮かぶのはそれも人間の顔だ。

(俺は…人間のために戦いたい! 嘘う嘘わないじゃない、人間に必要とされるのが嬉し  
かつたんだ!!)

| B ブレード L A イード D E ロード · L O A ディング D I N G |

アマゾンネオブレイドを生成させ串刺しを狙うネオの攻撃を避けると壁に風穴が開けられた。

その穴を蹴破るとニューコツパはそこから部屋を脱出した。廊下のあちこちから櫛の声が響き渡るのが聞こえ、隊員たちがニューコツパを止めようとするもそれを掻い潜っていく。

気持ちがいい。そうか、何が喰いたいかじやない、何がしたいかを考えて生きればよかつたのだ。

駆けていくアマゾンニューコツパを止めるものは誰もいない。しかし出口の付近に着いた時、目の前に圧裂弾を構える福田がニューコツパの行く手を遮った。

「どいてくれ！俺は自分のしたいことのために戦う！」

「自分のしたいこと？なんだ、それは。」

「俺は人間を守る！人間を守るためにアマゾンを狩るんだ！」

「……」

かつて三崎や望に言つた「マモルとは違う」という言葉。それは福田自身にも言い聞かせていました。商はマモルや悠とは違う……と。

直接関わる機会は4Cで青山隊として組んだことぐらいであつたが、思い返せば商にアマゾンズドライバーを渡し、戦いの道に駆り立てた張本人は福田だ。もしニユーコッパが暴走すれば…人を喰らえれば自分の責任にもなる。4Cの人間としてはニユーコッパを逃がすわけにはいかない。だが…。

「…お前は本当に人間を守るのか？」

「ああ、それが俺のやりたいことなんだ！」

彼の固い決心を感じる福田は横を過ぎ去るニユーコッパを引き留める。

「邪魔するつてのなら…！」

「まあ待て。」

福田は手にしていたアタッシュケースを開けた。また自分はアマゾンを逃がしてしまう。福田は自己嫌悪に陥るも後悔はしていなかつた。

青山が警報の鳴り響く4C施設内を走り回つているとアタッショケースをしまう福田の姿が見えた。

「あ、福田さん！…こつちに商来ませんでした？」

「…いや。」

「そうですか…。あ、それより大変です！局長がアマゾンに喰われた少女にアマゾン細胞を植え付けるとか言つてて…！」

「シグマタイプ…だと!?」

「つたく…商のことといいシグマタイプといい…もう…！」

やり場のない怒りを壁にぶつけると青山と福田はシグマタイプの実験室へと向かつた。

その際にチラリと監視カメラの方を向く福田。

(ダミーは動いているな。)

福田は監視カメラの映像がきちんとハッキングされたものになり、商の姿が映つていいことを確認した。

# E p i s o d e 11 「M a k e   K n o w n   w i t h c l a r i t y」

地下駐車場にはジャンサーチャーが黄色のジャングレイダーが置かれている。商はエンジンをかけるとジャングレイダーから生物的な音がした。

警備員の追跡などアマゾンの足として開発されたジャングレイダーのスピードにはもろともしない。久しぶりに外に出た商は昼間だというのに肌寒くなつたことに驚いた。

(もう冬…？いや秋の終わりか。)

並木道に植えられた銀杏の葉が美しい色をしているのだ。そんな雅な景色を福田から渡されたワイヤレスイヤホンから聞こえる罵声が汚していくような気がする。

『商が逃げたダア？ふざけんな！俺が駆除してやるよ！』

黒崎隊が追いかけてくるのだろう。あそこの隊は優秀ではあるものの血の気が多い奴が多い。商も人のことは言えないが……。

とにかく今捕まるわけにはいかない。自分が人間を喰うアマゾンを狩るのだ。商はアクセルを回してとにかく4Cから離れられる道を選んで走った。

人通りが少ない路地に入つた曲がり角でそこから加速しようとした時、交差点からバイクが差し掛かりジヤングレイダーの走行を止めた。

「くそ！ 4Cか!?」

ライダーはヘルメットを外す。その者の顔を見て商は驚きを隠せなかつた。

美しく桜が咲く季節になつてから人々の中である噂が流れ始めた。

“人が怪物になる”

ある者は恐れ、ある者は面白がり、ある者は大切な人が突然いなくなつたことに悲しみを覚える。

溶原性細胞。今はまだ極秘事項であるが、4Cの駆除隊員たちは皆その細胞に人間が毒されたことで生まれた新種のアマゾンを狩り続けている。

今日も黒崎は札森と隊員たちを連れてアマゾンたちにサブマシンガンを乱射している。

その表情はイライラした気持ちをどこかにぶつけたがっている様子だ。

「黒崎くん、商はまだ見つからないのかね？」

何度も言われた橘の言葉。なぜこんなにもたかが1匹のアマゾンが見つからないのか。

アマゾンズレジスターが反応しないということはまだ覚醒していないということだろうが商は昨年の秋の時点で食人衝動に目覚めようとしていた。

どこかで絶命したということだろうか…？

狩りが終わったバンの中で頭痛薬を数錠口にいれた黒崎の元へ聞くだけでノイローゼになりそうな声が通信で聞こえる。

『橘だ、黒崎くん。アマゾン狩りご苦労。』

「どーも。やっぱ新種でしたよー。」

『腕輪の反応がなかつたからね。いやあ、めんどうな奴が生まれたものだ。もちろん溶原性細胞についても手を付けねばならないが……商のことも後回しには出来ないよ。』

やはりまたその話か。車内で銃を暴発させてやろうかと考えていると、いつもとは違う内容の話を櫻はしてきた。

『とりあえずすぐ4Cに帰つてきたまえ。黒崎隊に人員を補給する。』

「？ 誰だ？」

『千翼。君も知つているだろう？』

「ふざけんな。あんなやべえ奴と一緒に狩りなんてできるか。」

黒崎は一度千翼を研究棟で見たことがあつた。しかしその時はまだネオアマゾンズレジスターをつけていなかつたこともあり、黒崎にとつて千翼は暴走する他のアマゾンと何ら変わらなかつた。

「イユもほかの隊に？」

『ああ。青山隊だ。福田さんもいますし。』

「よくわからんねえ理由だな。だったらウチの隊はイユを貰う。」

『勝手なことをいうのはやめたまえ。』

「イユじやねえなら俺は下ろさせてもらう。」

返答しようとすると通信が切れた。舌打ちをして橘はワイヤレスイヤホンを外すと同じタイミングで加納が局長室へ入ってきた。

「橘局長。衛生省長官からの通信が入っています。」

「ちいっ、また催促か！私が千翼と商を戦わせたことがキッカケで商が4Cから逃走したなどとという説教はもうこりごりだ！すぐに商を見つけさせろ！」

「はい。それと一つ私から提案を申し上げてもよろしいでしょうか？」

無表情を浮かべる加納が何を考えているのか未だにわからない橘であった。

青山隊は今日は待機との命令が出ていた。隊長の青山と副隊長の福田以外は今日は休みということで花見に行つているらしい。

「いいですよねえ。俺も行きたかつたつすよ。」

「そういうな。誰かがいなきやな。」

「福田さんも行けばよかつたのに。」

「お前一人で留守番させるわけにはいかない。」

そこに加納が入つてきた。福田は読んでいた本に葉を挟んでかけていた椅子から立ち上がる。

「休憩中申し訳ありません。」

「いや休憩じゃなくて待機ね。」

青山の突つ込みに何も反応を示さない。本当にこの時間は給料が出るのか不安になってきた。

「福田さんにご相談があります。」

「相談?」

「黒崎隊に入る気はありませんか?」

「どういうことだ?」

「これから2体のアマゾンが黒崎隊、青山隊に配属されます。」

「イユと千翼か?」

「はい。イユが黒崎隊、千翼が青山隊です。千翼は極めて戦闘力も高く戦い方がフレキシブルですから実力派の黒崎隊にと思いましたが黒崎隊長の意向もあつて青山隊へ:ということです。」

そういうと加納は手にしたノートパソコンを開いて青山と福田に見せた。それぞれの隊移動は福田が青山隊から黒崎隊に配属になる理由がズラズラと書かれている。

「…つまり一度シグマタイプと戦闘をした俺を万が一の場合を考えて黒崎隊に呼びたい」というわけか。」

「はい、札森は戦闘においてはど素人ですし戦力は増強させたいところです。もしイユが暴走することがあれば機能停止するまで食い止める必要がありますから。」

「機能停止？」

福田の疑問には答えようとしないところは相変わらず気に食わない。

「でも福田さんが抜けられるとなあ。青山隊（俺たちんとー）には千翼が来るとはいえ。」

「青山隊にはもう1名補充します。訓練生ではありますが何度も同じ訓練を自ら志願し行つて いるような優秀な人材ですので比較的使い物にはなるかと。」

「よかつたあ。」

「青山、世話になつたな。」

「こちらこそですよ。」

2人は握手すると福田は加納に黒崎隊の部屋へと連れられた。

「皆さん、本日から福田さんがこちらの黒崎隊に入ることになりました。よろしくお願  
いします。」

それだけ言うとすぐに出ていく加納。

「これから黒崎隊で世話になる福田だ。よろしく。」

「久しぶりだなあ、福田ア。」

「黒崎…。」

「どうやらこの死体アマゾンの世話の仕方を教えてくれるそうじやねえか。よろしく頼んだぞー。お前はアマゾンが大好きらしいからなあ。」

「…素直じやないな。」

「あ？」

「お前はイユが死んだ現場にいたそうだな。もう少し早ければと…」

「黙つてろ。お前は俺の部下だぞ、コラ。」

「…。」

福田はすぐ近くにあつた小さなテーブルに読みかけの本を置いた。壁側にはキヤミソールを着たイユが壁の方を向いて立つていて。その近くまで行くと福田は小声でイユに挨拶をした。

部屋に1人残された青山はいよいよ部屋を離れるわけにはいかなくなつた。福田がいればコンビニにフラフラつと行けたのだが…。

「はー、暇だなー。」

「そもそも言つてられませんよ。」

急に声がしたので飛び起きたとそこには隊服を着用した女性が立つていた。

「…水澤…美月さん？」

「お久しぶりです。水澤でいいですか…。」

「でも…」

「本日付で青山隊に配属になりました訓練生の水澤です。よろしくお願ひします。」

以前会つた時とはまた目つきが違う気がする。確かに最後に見たのは別荘での戦いの時…。

アマゾンたちの戦いを目の当たりにして新たな決意を胸に訓練を重ねてきたのだろう

う。

東京都渋谷区。

人通りの多い街中でとうとう溶原性細胞の感染者が覚醒してしまった。

アマゾンズレジスターをつけていないことから当然発信器による探知は出来ない。

だが情報部から得た情報で出現を確認した青山隊と赤松隊はすぐに出動した。ちなみに千翼はコンデイションが悪い…とかで未だに青山隊には挨拶すら来ていない。

「赤松、よろしく頼むよ。」

「ああ…せいぜい足を引っ張るな。」

「てめえ！」

「まあまあそこら辺にしましようよ。」

止めに入つたのは赤松隊に復帰となつた白木だ。商の毒に侵されていたが何とか復帰できるまでになつたらしい。しかし未だに決まった時間になると錠剤を服用してい

た。

しばらくすると福田が運転するバンは渋谷の裏路地に停車した。

「この付近だ。」

後ろから赤松、白木、青山、美月、そして他の隊員たちが下りていく。情報があつたのは古いビルの5Fだ。現在はクラブが営まれているようだが、昼間ということもあり営業している様子はない。

“何が何でも民間人には気が付かれないように”

橘からの命令はいつにもまして厳しい言い方であつた。これだけ人がいる地区で派手なことをすればまずいことぐらいは分かつていて。

いくら世間にバレつつあるアマゾンの存在も政府はまだ公の場では認めているわけではない。

商を逃がした橘としてはこれ以上日本政府に尻を叩かれるようなことは避けたいのだ。

装備を整えた青山隊と赤松隊の面々は静かにビルに入していく。エレベーターでもしアマゾンと鉢合わせになつた時は面倒だと野座間にいた時のマンションでの戦いで

学んでいた青山は階段を使うことにした。

しかし妙だ。このビルには空きテナントなどない。他のフロアには敗者や美容室、ホビーショップもあるのになぜこんなにも静かなのだろうか。

「当たり前だ。アマゾンがいるんだからな。」

赤松が青山の通信に答えてくれたのは珍しい。

こちらも珍しく返してやろうかと思ったその瞬間。突然窓ガラスを蹴破つてエプロンを付けたヘビアマゾンが青山に襲い掛かつた。

「ぐあ!!こちら青山! 対象発見! 場所は4Fの廊下だ!」

近くにいた美月はヘビアマゾンの背中にH & K M P 7型の短機関銃による射撃で注意をそらせる。

「ナイス! 美月さん!」

「水澤でいいです!」

ヘビアマゾンに生まれた隙をついてレガースによる蹴り技でヘビアマゾンに物理攻撃を食らわせる。

溶原性細胞によつて生まれたアマゾンには電撃やトラロツクなどの成分があまり通用しない。そのため射撃や物理攻撃で体を破壊していくしかないのだ。

「ちい！赤松！何してんだ！早く来い！」

『うるせえ！6Fで戦闘中だ！』

なんと、他のフロアにもアマゾンがいるのか。

『むしろ早く片付けてこっち来い！集団覚醒だ！』

溶原性細胞の影響をこのビル全体が受けているのだろう。後に知り得た情報だがこのビルのオーナーが推しているある会社のウォーターサーバーを全フロアに設置していたらしい。

「くそお！」

ヘビアマゾンに集中している間に後ろからウニアマゾンに襲われる青山。ここまでかと思われた時、階段の方向から声が聞こえた。

「アマゾン…！」

オレンジ色の炎をあげながら突然現れた男。それは4Cが必死で追つている商で間違いない。

「商!?」

「久しぶりだな、青山。」

アマゾンニューコッパはウニアマゾンにアームカッターとフットカッターによる切断技を食らわせあつという間に倒してしまった。

「お前どこにいってた！」

「そんな話をしている場合じやないだろ、すぐ来るぞ！」

今度は美月が相手をしているヘビアマゾンの方へ向かうアマゾンニユーコツパ。別のフロアからヒヨウアマゾン、カマキリアマゾンとどんどん新種のアマゾンたちが下りてくる。

「やべえ！ 千翼を呼ぶしかねえか…！」

「その必要はない。仲間がもう1人来てる。」

赤松のいる6Fでも同じようにアマゾンが群れを成し赤松たちに攻撃を仕掛けていた。

「白木！ 大丈夫か！」

「はい！ でもこれはなかなか厳しい…かと！」

「ちい…こんな街中じや圧裂弾は使えねえ。」

「アマゾン…！」  
 — E V O L U · E V O · E V O L U T I O N !! —  
 | エ ヴ オ リ ュ | エ ヴ オ リ ュ | エ ヴ オ リ ュ | シ ョ ン

突然鳴り響くアマゾンズドライバーの音。その方向を見ると既にオメガの姿となつた悠がアマゾンたちを蹴散らしていた。

「あれは…水澤悠！何でここに？」

「わからないんですけど…とにかくこのアマゾンたちを駆除してくれるみたいです。」「とりあえずはまずこのアマゾンたちをどうにかするのが先決か！」

赤松はメリケンサツクを手にはめアマゾンたちに打撃を繰り出す。

3人…とはいっても訓練生であることと女性であることから美月はどうしてもアマ

ゾンに對して致命傷を与える。そればかりか集団で襲われると最早手も足も出なくなってしまう。

「水澤！」

「任せろ。」

— C L A W • L O A D I N G —  
ク ロ イ デイ ニ グ

アマゾンネオクロード美月に襲い掛かるハゲタカアマゾンを引き離した。そのハゲタカアマゾンは体に引っ掛けたアマゾンネオクロードを外すと窓ガラスを割つて外へと逃げる。

「まずい！」

外に出すのは絶対に不味い。青山が窓から顔を出したことには既にハゲタカアマゾンを見た女子高生が悲鳴を上げ、サラリーマンが恐怖に怯えながらも”勇敢に”スマートフォンを向けていた。

「やつちまつた！」

「どけ！」

窓から飛び降りるニューコッパ。すぐにハゲタカアマゾンの首を捕まえてアームカッターによつて頸動脈から切断した。溢れる黒い血を録画したサラリーマンは急いで逃げ去つていく。

「お…おい！待て！」

青山の指示に従うはずもない。上からオメガが飛び降り、2体のアマゾンがそれぞれ商と悠の姿に戻る。

「あれって…水澤悠…？」

2人はジャングレイダーに乗つてあつという間に去つていった。上を見ると同じようく赤松が窓から顔を出している。どうやら狩りは終わつたようだ。今回はそれで済む話ではなさしきだが。

その日の夜に衛生省はアマゾンの存在を公表した。その日からしばらく昼のワイドショーやではアマゾンの話題で持ち切りとなる。

しかしどこにも“人間に感染するアマゾン細胞”的話は聞かず、あくまで某製薬会社の研究機関から逃げ出したアマゾンが人を喰らうことまでしか報道されていない。

「この度は大変申し訳ございません。…………はい、承知しております。…………ええ、しかし商の行方はわかりました！……………いえそんな言い訳などでは…………はい、千翼にあつたアマゾンズインジエクターの調整が完了しています。中身はロウ成分ではありませんが高濃度たんぱく質を入れるだけで彼は素晴らしい戦闘力を發揮します。…………もちろんです、では失礼します。」

テレビを見ながら衛生省長官の電話を切る橘。使えない部下を持つとこうも上の人間が損をすると橘は憤りを隠せずにいた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫なわけがないだろう！」

「…失礼しました。」

「いや私の方が悪かつた、加納くん。君のような優秀な部下に当たるとは。にしても衛生省も勝手なものだ。私が『のこと』を公にすれば政府からの目を4Cから衛生省へと変えることが出来るのを忘れたのだろうかね。」

「……。」

疑問文ではない言葉に加納はあまり答えない。その無駄のなさは橘は気に入つていった。この数年、ずっと自分の下で働いている加納。改めて令華からはいい部下を取ることが出来たと橘は囁みしめた。

## E p i S o d e 1 2 「M o o n L i g h t」

子供は両親に手を引かれショッピングモールを歩いている。玩具屋が彼の目に留まり両親の手を離し店へ駆けていく。

「パパ！ママ！こっち！」

店の前で止まつて子供が振り返ると2人は笑顔で手を振つてかけてくる。しかし2人とも首筋からは黒い血管のような模様が浮かび上がり、子供は泣きだしてしまつた。彼の両親の体から蒸気が放出されていく…。

とその時、銃声が鳴り響き2人はその場に倒れた。彼らの後ろから黒崎隊の隊員が射撃を繰り出したのだ。

倒れた2人はサイアマゾンとクワガタアマゾンへ変化し、隊員たちに襲い掛かる。

「チイ、やっぱ死なねえか。イーユー、やれ。」

「ターゲット確認」

黒崎の横にいる黒い服を着た少女 イユは無表情でありますながらハーフのようなきれいな顔だちをしている。掛け声と共に左腕につけられたネオアマゾンズレジスターのスイッチを作動させた。

「アマゾン」

イユから熱が放たれて体をカラスアマゾンへと変化させる。パルクールのような俊敏な動きでサイアマゾンとクワガタアマゾンに飛びかかり、足技で傷を負わせる。

「やっぱ戦い方がなつてねえなあ。」

「戦闘に関しては俺からつきしなんてわかんないすよ。まあでもあの天城の細胞を植え付けたらしいですからそれなりに個体としてはいいやつなんじやないすか?知らないんですけど。」

札森のうんちくなど聞く耳を持たない黒崎は援護射撃を繰り出す。カラスアマゾンの未熟な戦い方でも隊員たちの援護で数分もしないうちに2体のアマゾンは動かなく

なつた。

玩具屋の前で泣き叫ぶ子供の前でカラスアマゾンはイユの姿に戻った。両親が突然いなくなつた少年をしばらく見つめる。

「イーユー、行くぞ。」

「了解」

黒崎に呼ばれイユは隊員たちと共に輸送用バンへと戻つていく。そんな去つていく黒崎隊の写真を遠目で見ていた民間人がスマートフォンで写真を撮つた。

「というわけで問題になつてゐるよ、黒崎くん。せめて子供に声をかけるだとかあつたんじやないかね？」

「俺の仕事はアマゾン狩りだ。違いますかー？」

「…まあいいだろう。イユの調子はどうかね？」

「まずまずつてどこすかね。それより福田ですよ、なんすかアイツ。修復できるくらい

までならイユをこき使えると思ったのに福田がいちいち突つかつて来やがる。」

「かつての仲間もシグマタイプになつていたからかね。まあ気にしなくていい。」「りよーかあーい。」

やる気のない声を上げて局長室を出ていった。黒崎とすれ違う形で加納が部屋に入る。

「失礼します。橘局長、なんとかメディアに対しては対策が出来そうです。」

「ごくろう、加納くん。彼女のこともあるし衛生省も情報規制に協力はしてくれるだろう。」

加納は報告を終えると部屋を出る。しばらく歩いたところでスマートフォンを取り出し電話を始めた。

「加納です。……はい、イユはシグマタイプのアマゾンとして黒崎隊でやっています。……ええ、衛生省から依頼された方は隠し通すようです。……はい、何かあればまた…。」

日が落ちようとしているときでも4Cの建物から電気が消えることはない。赤松隊の部屋から赤松、白木をはじめとする隊員たちが警報を聞いて飛び出していく。

溶原性細胞の覚醒が頻繁に起きるようになつてから待機している部隊がいなくなつてしまふほど忙しくなつた。

通報は郊外地域の小さな山の山林内からだ。足の指がなくなつた死体が発見されたとのことだ。

「白木、周辺に突然いなくなつた一般人がいないか調べておけ。」

「それは先ほど見ておきました。近くの住宅街にここしばらく家を空けている家があるとウォーターサーバーの水を運ぶ宅配業者が証言しています。」

「そこの家の奴がアマゾンになつたか…？」

輸送用バンが山道の入口に到着すると2台のジャングレイダーが置かれていることに赤松隊の隊員たちは気が付いた。

「いるのか、商たちが。見つけ次第駆除しろ。奴もアマゾンだ。」

「隊長……ほんとに商を?」

「何をためらう?……ああ、お前は青山隊と一緒に仕事をする機会も多かつたからな。商とは一緒にやるときもあつたんだな。だがお前が死にかけた原因はなんだ?」

今でも思い出す。商が変化したサソリアマゾンの暴走に巻き込まれた時だ。毒が体内に入つて燃えるような感覚。

幾日も生死をさまよい、もうだめかと思われた時、自分は研究棟へ連れていかれた…。

「おい大丈夫か、白木!」

「え、あ、はい。大丈夫です。」

「とにかくわかつたな。この山の中は民間人立ち入り禁止にしてある。この中には奴はほぼ間違いくアマゾンだ。そいつらを全員狩る!場合によつては圧裂弾も用いる。以上だ。」

赤松の指示によって隊員全員が小山を囲むようにして駆除に取り掛かる。日が落ち

たためヘッドライトをつけて隊員たちは銃を構え山の中を歩いていく。

白木は武井という隊員と共に中へ入つていった。

「白木さん！」

「ええ、4時の方向からお願ひ。」

武井はそつと移動を始める。2人の視線の先ではヒョウアマゾンが人間の皮膚を剥がして喰らつていた。

武井がヒョウアマゾンにつられていると足元に落ちていた石に気が付かず転んでしまう。その音に気が付いたヒョウアマゾン。すぐさま白木は短機関銃を撃ちまくるも素早い攻撃でなかなか当たらない。

「くそ！」

ヒョウアマゾンが飛びかかってきた時、別の方から何者かがヒョウアマゾンに飛びひざ蹴りを食らわせた。

悠は山に人間たちが入つてきることを探知した。すぐに新種のアマゾンを狩つて商と共に脱出する。恐らくそう長い時間はかかるないだろうと推測していた。

「水澤くん、こんなところで何してるの？」

「……マモルくん……よかつた！ 無事だつたんだね。」

「一応……ね。」

「ここで何してるの？ そうだ、今ここに新種のアマゾンがいるんだ！ 何か知らない？」

マモルは何も答えようとしない。マモルが何か隠しごとをしたときはポケットに手を突っ込み何かを握る癖がある。

「まさか……何か知ってるの？ 溶原性細胞のこと！」

「へえ、そう呼ばれてるんだね。」

「……もしかしてマモルくんたちが……？」

「……。」

「なんでそんなことを！すぐにやめるんだ！」

「仲間…ほしくないの？」

「え？」

「やつと仲間を作るための準備が整つたんだ。邪魔はさせないよ。ああ、あとそれと水澤くんにも一つ忠告しておくよ。今この山に僕を追つてアイツが来てる。」

「アイツ…？」

そういうとマモルは夜の闇の中に姿を消していった。月明かりと匂いだけではマモルを探せそうにない。とにかくまずは新種のアマゾンを探すことに専念しようと悠は再び歩き出した。

白木は見上げると腰にネオアマゾンズドライバーを巻いた商が立っていた。

「商…？」

「…!?お前…白木だつたのか？」

「ええ。」

「お前…なんでお前から匂いが…」  
「前！」

白木の声にヒョウアマゾンが再び襲つてきたことに気が付いた商は左手でガードする。ヒョウアマゾンは左手にかぶりつき、そこから黒い血が流れ出る。

「フン…！」

「!?」

商は左手を痛がることなく右手手を使つてアマゾンズインジエクターを装填し変身の準備を整えた。

— N<sup>ニユ</sup>E<sup>・</sup>W<sup>コ・ツ</sup> · C<sup>・</sup>O<sup>・</sup>P<sup>・</sup>P<sup>・</sup>A<sup>バ</sup> —

「アマゾン！」

風圧によつてヒョウアマゾンを吹き飛ばし、ニューコツパに変身すると走つてヒョウ

アマゾンへ体当たりを食らわせる。

「ウオオオ！」

— N E E D L E · L O A D I N G —

右手からアマゾンネオニードルを生成して弾丸を射出しヒョウアマゾンの心臓を撃ち抜いた。どの動物とも異なる悲鳴をあげてヒョウアマゾンは倒れその場に固まつた。

「さて、今度はお前にについて聞く番だ。どういうことなんだよ。」

「それは…。」

「俺と同じ…つてことかな？」

突然男の声がし、その方向を向くと木を手探りで触りながらこちらへ近づいてくる仁がいた。

「鷹山…仁！」

「どーも。えっと…俺いまいち勘みたいのは働くタイプじゃないんだが…。ここにいる

のは俺も含めて『3匹』ってことでいいのかな?』

白木は銃を構えるのをやめて俯いた。

白木の意識がなくなりまもなく心肺も停止するだろうと判断されてからまもなくして衛生省から4Cへ指示がなされた。それは『白木千佳』にアマゾン細胞を移植し何としても生きすこと』であつた。

「しかしそろしいのですか?政府からはアマゾンを作るのは1体…という指示でしたが?」

『極秘にやるのだ。何が何でも千佳を殺すな!野座間から受け取ったBの細胞がまだあるのだろう!』

「…ええ。かしこまりました、白木大臣。」

橋が電話を切ると加納にすぐ白木を研究棟へ運ぶよう指示を出す。今まで第4のア

マゾンたるシグマタイプの製作にしか着手したことはなかつたがまさか第2のアマゾン人間ベースを作る機会を得ることが出来ることは。

(いい実験データがとれそうだ。それに衛生省にも強く出られるようになる。)

橋はほくそ笑みながら窓から外を覗いていた。

「じゃあ：俺のせいだアマゾンに。」

「…アマゾン細胞を取り入れてから一気に毒が無効化されたわ。」

「なるほどなあ：お前がBか。尾宿商。」

「何の話だ？」

「野座間の連中は扱いやすい実験体の細胞の中で最も出来がいい奴を改良するためにサンプルを多くとつていた。その実験体がBだ。かくいう俺も改良を重ねたBの細胞を体に移植した。水澤悠もおそらくはそうだ。」

「それがなんだってんだ？」

仁は白木を見ようと/orするも場所が分からず匂いで場所を把握しようとする。

「その女はBの毒の効果をBの細胞を埋め込ることで克服した…ってわけだ。…まあどちらも駆除の対象に変わりはないけどな。」

手にした傷だらけのアマゾンズドライバーを腰に巻く仁。アクセラーグリップを捻つて静かに、しかしどこか力強く呟く。

「A L P H A」

「…アマゾン！」

「B L O O D & W I L D !!」

「W W W W I L D !!」

ホワイトアイのアルファへ変身し、白木に襲い掛かる。しかしそれを止めるニュー・コツパ。その腕をアルファはしっかりと握りしめる。

「どういうつもりだ？」

「俺は人間を襲わないアマゾンは狩らないんだよ……」  
 「どこがで聞いたようなことだな。オラア！」

握つたままニューコツパにアームカッターで斬りかかるアルファ。その攻撃を見切つて避けるも掴まれている腕のせいでバランスを崩す。

（なんて強い力だ……）

視力の低下に伴い戦い方を今までと変えてきたのだろう。握力の異常さに驚きを隠せないニューコツパであつたがすぐにアマゾンズインジエクターを操作して対応する。

—B L A D E • L O A D I N G —  
 ブレード ロード イング

アマゾンネオブレイドで足に斬りかかる。避けられずに攻撃を喰らい耐えようとす  
 るがアルファもバランスを崩しあ互いに山を転がっていく。  
 アマゾン同士の戦闘が遠ざかつたため、白木の元に武井が寄ってきた。

「白木さん！大丈夫ですか!?」

「ええ…大丈夫。」

「それより何話してたんです？片方は商でしたよね？」

「いえ…何でもないわ。行きましょう。」

2人の戦いはアームカッターとアマゾンネオブレイドによる斬撃の勝負となつてい  
た。避けることが出来るニューコッパの方が分があるかと思われたがそのタフさでア  
ルファも倒れることはない。

攻防の中、月明かりが差し込んでくると白木はもう8時を過ぎていることに気が付いた。

「…！薬を！」

「え？薬？」

白木が武井の方を向く。……うまそうだ。いや違う。今は薬を飲まなくてはいけない。  
…………だめだ…。

「うわあああああ!!!!」

戦う2人は人間の血の匂いを嗅ぎ取り戦いを止める。

「まさか！」

ニューコツパが白木たちのいるところへ飛び上るとそこでは武井を喰おうとする白木の姿があつた。

「よせ！」

アルファがいるところまで白木を蹴り飛ばすニューコツパ。

「薬を忘れたか。腕輪をつけてりやいいものを。」

「うう…うあああ！」

「俺が腕輪なしでいられるのは”強い意志”だ！アマゾンになつた者の苦悩、それを全て受け入れたからこそ俺は暴走しない。お前にはその覚悟がなかつたようだな。」

「ウアアアアア!!」

「これからもアマゾンとして生きるには苦しいだろう。ここで俺が…殺してやる!」

暴れる白木の頭を掴むアルファ。

「よせ!」

ニューコツパの制止など聞くこともなく白木の首を搔き切った。残つた体はボトリ  
という音を立て倒れる。

「ああ…ああ…！」

「俺はアマゾンを1匹残らず狩る。どんな奴でもな。お前らみたいに勝手な線引きはし  
ねえ。」

「…お前だつて勝手な線引きをしているだろ…！」

「あ?」

「アマゾンと人間つて…勝手に線引きしてるじゃねえか!白木は…心は人間だつたはず  
だ!」

「人間が人間を喰おうと思うか？その時点で人間じやねえんだよ。」

既に声のする方向は把握している。素早い動きでアルファはニューコツパの元まで飛びかかり噛みつき攻撃をする。

「グアアアア！」

「お前もここで…殺してやる！」

「俺は…人間を守る!!」

「おおれえもだあああ!!」

しつかりとニューコツパの首を掴んでいる。このままアームカッターで切り裂いてしまえば絶命するだろう。

— V I O L E N T · S L A S H —  
 バイオレンツ・スラッシュ

アルファが腕を構えた時、ニューコツパは覚悟を決めたようにアマゾンズインジエクターを操作した。

— A<sup>ア</sup>  
M<sup>マ</sup>  
A<sup>ゾ</sup>  
Z<sup>・</sup>  
O<sup>ン</sup>  
N<sup>・</sup>  
S<sup>ス</sup>  
L<sup>ラ</sup>  
A<sup>ツ</sup>  
S<sup>・</sup>  
H<sup>・</sup>  
—

左手のアームカッターでアルファのバイオレントスラッシュにカウンターでアマゾンスラッシュを腹部に放つ。

「アグアア！…………クク……ハハハ！お前……左手に力が入らねえんだな。」

「……！」

「少しは効くが……この程度じゃないはずだ、本来はな。」

ロウのアマゾンズインジェクターを使って変身したあの別荘での戦い。

そこから体の調子は悪かつた。頭が痛かつたり手に感覚がなくなつたり……。  
必殺技を使うとそれは特にその影響が多くなつた。今のアマゾンスラッシュで意識が遠のきつつある。

「俺のとは違う音声がするドライバー……新しいタイプか？ 相当な副作用があるみたいだな。」

「ん？もうお前が何を言つてゐるのかもわからんねえよ。だから俺が一方的に言つてやる！お前みたいなやつがいると人間を喰わないアマゾンも消されちまう！」

「水澤悠か…。」

「殺させるわけにはいかねえ！溶原性細胞をばらまいてるやつを捕まえるためにもな

！」

「それは俺が蹴りをつける。お前はもう眠れ。」

「行くぞおお！！」

「…話を聞けよ。最期なんだからよ。」

ニユーロツッパの目も徐々に見えなくなってきた。しかしづかにわかる赤いものに向かって攻撃を繰り出していく。自分が生きる意味、それは人間に必要とされるため。悲しい結論というのもいるかもしれない。それでも初めて満足できる生き方がそれだったのだ。

(悠、後は頼む！人間を：アマゾンを守ってくれ！)

ニユーロツッパは意識が遠のくまで戦い続ける。その間、満月の光が2人の戦いを照ら

270 Episode 12 「M o o n L i g h t」

し  
続  
け  
た。

# Last Episode「Missing Men」

辺りはアマゾンと血の匂いで溢れかえつておりそれを特定することは難しい。しかしアマゾンたちが徐々に駆除されていくことは何となく悠にはわかっていた。

「…仁さん。」

匂いを嗅ぎながら山を下りようと/or>する仁が悠の方を向いた。

「やっぱお前だつたか。」

彼の左手には傷だらけのアマゾンズドライバー、右手にはオレンジ色のネオコンドラーコアのネオアマゾンズドライバーが握られている。

「仁さん…まさか…！」

「ああ、あの商とかいうアマゾンを狩った。」

「…よくも…！」

「仲間だつた：みたいだな。前はそんな様子はなかつたが？」

確かにそうだつた。それどころか実験体のアマゾンを喰つていた商とは敵だつたらいいだ。しかしあの日、商が4Cから逃げてきた日、悠は商の気持ちを痛いほど理解し仲間になつたのだ。

悠はイユの死体が4Cへ運ばれることを不審に思い尾行をしていた。ただの少女の死体を4Cが回収する必要などないはずだ。

考えられるとすれば溶原性細胞によつて生まれた新種のアマゾンの被害者の死因が世間に公表されることを防ぐため：だろうか。

裏路地を通つてジャングレイダーを走らせていくとき、交差点をもう1台のジャングレイダーがこちらへ向かつて走つてきた。

(アイツは…!)

「くそ！ 4Cか!?」

ジャングレイダーで走つてきた商は悠を4Cと思ったようだ。悠はヘルメットを取りつて自らの顔を見せた。

「お前：実験体の仲間の：。」

「ここで君は倒させてもらう。僕は仲間たちを守りたいからね。」

「そんなこと言つてる場合じやねえぞ。4Cが追つてくる！」

「どういうこと?」

裏路地の空き部屋に入つて商は悠に一連の出来事を伝える。自分はアマゾンと人間どちらを喰いたいのか。そうではなく自分は人間を守るために戦つていた時が一番生きている心地がしていたこと。アマゾン同種を喰つた時の罪悪感。

「俺は…勝手だけどアマゾンを喰いたくはねえし、人間も喰いたくない。でも人間を喰

うアマゾンは…狩りたい。」

そう語る商の目はまっすぐだつた。

駆除班では人間と共にいることを捨て、マモルたちとは人間側に立つ者を狩ることが出来ず実験体のアマゾンたちとの共存も捨てた。

そんな悠と同じ考えを持つ者が現れた。

もちろん仲間を喰らつてきた罪はある。だが自分も人を喰いたくなくても覚醒してしまつたアマゾンを狩つたことがある。

泣きながら覚醒してしまつた仲間を…この手で…。

「やろう、僕と一緒に。人間も…アマゾンも生きられる場所を作ろう。」

悠は商に手を出す。人なのかアマゾンなのか。それを常に問い合わせ続けてきた2人が固い握手を交わした。

「ウオオオ!! アマゾン!!」

「アアアマアアゾオオンッ!!」

2人の体から緑と赤のエネルギーが放出されアームカッターをぶつけ合う。アマゾンオメガは仲間を失つた悲しさと悔しさを、アマゾンアルファは自分の罪とすべてを終わらせるために戦う覚悟をその刃に変えて…。

商と白木の死はその場にいた武井によつて4Cに報告された。衛生省からの説明に關しては「白木千佳が覚醒した為。」との対応で大臣を黙らせた橘は満足し、引き続き溶原性細胞の出どころを調査するよう隊長たちに指示を促していた。

青山隊はそんな橘の命令で一家全員がアマゾンになつたと思われる戸建てに入つていた。青山の後ろには美月も短機関銃を構えてしやがんでいる。

「隊長。」

「分かつてる。まずは千翼、お前が行くんだ。」

「…わかってる。」

「いいか、いつも通りやるんだぞ？」

「分かつてる…！」

—NE<sub>オ</sub>O—

アマゾンズインジェクターをインジェクタースロットに装填した千翼は階段の陰から飛び出し人を貪るアマゾンに向かつて走つていく。

「お…おい！」

「アマゾンッ!!」

赤いエネルギーが狭いリビングから放出され、ネオがアマゾンたちをアームカッターで切り裂いていく。

「あーもう！だめじやん！」

青山は仕方なく援護射撃を美月と共にアマゾンネオを避けて放つ。

—B·L·A·D·E··L·O·A·D·I·N·G—

アマゾンネオブレイドを振るつてアマゾンたちの腕をグロテスクに引き裂くネオ。アマゾンたちからは液体が放出され体は凝固した。

ネオは固くなつた後のアマゾンの死体を繰り返しアマゾンネオブレイドで斬りつけようとする。

「おい千翼！ 落ち着け！」

「…！ あ…。」

「はあ…。とりあえず駆除は終わりだな。つたく、溶原性細胞はどうから入つてんだ。」

そう言いながら近くに置かれていたウォーターサーバーから水を飲もうとする青山。

「隊長！ 清掃班が来るまではこここの物は極力触らない様言われてますよね！」  
 「はー、すいませんすいません。」

青山は手に取った紙コップをそのままゴミ箱に捨てる。ネオはアマゾンネオブレイドにこべり付いたアマゾンの血を見ていた。

(違う…俺じゃない…母さんを喰つたのは…俺じゃ…。)

マモルたちは川が流れる山の中を歩いていた。どうやら先日埋めた腕から流れている溶原性細胞はうまくウォーターサーバーの水として配給されているようだ。

同種の匂いと共に足音がし、アマゾンたちは足を止める。

「水澤くん?」

「マモルくん、やつと見つけたよ。溶原性細胞を持つてるんだね。」

「…僕たちはオリジナルって呼んでる。」

「オリジナル…?」

「僕たちはいろいろ実験してみたんだよ。天城くんを実験台にした人間たちで今度は僕たちが!」

憎しみに染まつた眼…。あの頃の、駆除班にいた頃のマモルはもういないのだろう。

「させないよ、人間をアマゾンになんて！」

「へえ、じやあ僕たちを狩る？」

「それは…。」

「出来ないよね、水澤くんは優しいもん。でも優しいだけじや生き残れない。分かつて  
るでしょ？」

どこかで言われたような言葉…。

「マモルくん…七羽さん知つてるの？」

「…！」

「マモルくん？」

「行こう、みんな。」

マモルの指示で島田とカオリ、そしてアマゾンたちはその場を去つていく。

「待つて！」

「島田くん！」

ハチアマゾンに変化した島田が悠の足元目掛けて針を放つ。それを避けて起き上がり前を見るとそこにはもう誰もいなかつた。

(一人で戦う……こんな感じなんだな。)

悠の頭に浮かぶのは手探りでけもの道を歩く仁の姿。自分もその道を歩くことになるのだろうか。

イユがストレッチャーで4Cの研究棟まで運ばれて来た。腹部から黒い血が溢れ、口元は吐血によつて真つ黒になつてゐる。

その様子を見る札森は加納のスマートフォンに連絡を入れた。

「札森つす。橋局長にアマゾンを貸せつて言えと黒崎隊長からです。……すぐみた  
いっすよ。隊長はまだ現場にいますし。」

間もなくして青山隊から千翼が札森の元へ送られた。すぐに輸送用バンに乗せられ  
る千翼。

「えつと…。」

「はい、今から新種がしこたまいる映画館に突入つす。ゾンビ映画みてえにうじやう  
じやなんでよろしくです。さつきまでいたシグマタイプのアマゾンはやられちやつ  
たんで気を付けて。以上つす。」

「え、あ、あの。」

「質問?」

「いや…。」

「じゃあ終わり。」

青山たちと違つて随分あつさりしている。まずは自己紹介だとか…そういうのをす

るんじゃないのか。

札森と呼ばれていたこの男はもう既に千翼に興味はなくタブレットでゲームをしているくらいだ。

30分も経たないうちに現場の映画館に着いた。中は血の匂いでいっぱいになつてゐる。どの死体も首がなくなつており、それ以外に傷はない。思わず無傷の手に目が言つてしまふのは千翼の“悪い癖”だ。

「なんだ…この数。」

『同個体が喰い散らかせる数ぢやないすね。おんなんじよーなやつがたまたま覚醒したつてどこかな?』

札森は中に入ろうとはせずパンの中から通信で指示を出すらしい。副隊長が戦闘を行わないのは千翼から見ても珍しいと思った。

「千翼オ! 伏せろ!」

どこからか声が聞こえ反射的に伏せた千翼、そこへバラアマゾンが飛んできて近くの

鉄柱を腕の剣で切つた。

「…！」

すぐにネオアマゾンズドライバーをバツクから取り出し装着する。

—NEO—

「アマゾンツ！」

バラアマゾンの剣劇が繰り出されながら赤い炎を上げてネオに変身した。

「ハアア!!」

—BLADE・LOADING—

ネオの得意武器 アマゾンネオブレイドを生成しバラアマゾンの攻撃に耐えきる。

「どけ！撃つぞー！」

声の主はこの隊の隊長 黒崎だつたようだ。だがこの状況で間合いを取れるわけなどない。この指示に従えるシグマタイプのアマゾンとはどれだけ戦闘力の高いアマゾンなのだろうか。

そんなことを考えている間に隊員たちの射撃が一斉に放たれる。その何発かがネオに直撃し倒れた。

「うう…！」

「おら！ 邪魔だつたんだろうが！」

「くっそ…。」

バラアマゾンは隊員たちがいる方向まで突っ込んでいき容赦なく彼らを斬首していく。

「くそがあ…！ 早く行け千翼！」

「俺は道具じやない！」

「余計なこと言つてんじやねえぞ、アマゾン！」

「…！」

「おい！」

「俺を…アマゾンと一緒にするなああ！」

ネオの咆哮に何かを察した黒崎はその場に伏せる。すぐにネオの体から無数の棘が飛び出し、バラアマゾンを映画のスクリーンに向けて串刺しにした。

「おいおい危ねえじやねえか。」

「俺は…アマゾンなんかじゃない！人を喰うことなんかしない！うわああああ!!」

冷気を放ちながらネオから千翼の姿に戻りつつ映画館の外に飛び出していく。

「おい待て、どこ行く。」

黒崎の制止など聞く耳を持たずジヤングレイダーに跨る千翼。

「おい。まさか逃げるんじやねえだろうな？」

「こんなところ、もういたくない！俺をアマゾンと一緒にする4Cなんかに！」

千翼はそう吐き捨てると去つていった。

「チイ…こちら黒崎。千翼を追え。逃げやがった。」

黒崎は溜息をつき肩をもみながらパンに乗り込んだ。また面倒なことになりそうだ。  
黒崎は次の休日、スイーツ食べ放題に行くことを諦めた。

千翼が4Cへ戻ってきた。どうやら黒崎が千翼を不当な扱いをしたことが原因で逃げ出したようだが、結局戻ってきた後も黒崎隊に所属することになつたらしい。

その理由は今ここにいるイユが黒崎隊にいるからだそうだ。黒崎隊に2体のアマゾンが配属になるのはいまいち納得のいかないし、なぜイユがいるから黒崎隊に入るのか意味がよくわからなかつたが、とにかく黒崎隊からイユを借りることが出来たのは心強かつた。

橋から溶原性細胞の感染者の共通点がウォーターサーバーであることがわかつたと報告が入った。そのウォーターサーバーを取り扱うAroma Ozoneという会社の営業所に行くことが今回の青山隊の任務だ。それにしてももう片方の“やばい方”に行かされなくて正直よかつたと青山は考えていた。

何人の患者が失踪している病院なんて絶対にアマゾンの住処となつてているからだ。Aroma Ozoneの営業所も人の出入りが少ない所とのことだが、青山隊のバンが営業所の近くで止まつた。つい最近訓練生を終えた美月に続いてイユ、隊員たちが外へ出る。

「それじゃあ行くぞ、アマゾンがいることもあるからな、気を付けていくぞ！」

アマゾンが出現したらまず青山が発砲、その後隊員たちは援護射撃を繰り出す。その隙にイユが足技でとどめ。完璧だ。銃を構えながら近づいていったその時。

本当にそれは一瞬だった。

中から回転しながら飛びだしてきたウニアマゾンは針を自分の体を突き刺し体当たりしてきた。

痛みなど感じないまま意識が遠のいていく。ただちようど死角に隠れていた美月が

目を見開いて青山を見ている。

「援護…を！」

青山の言葉にならない最期の言葉に頷く美月。

「こちら青山隊！増援を願います！」

美月の言葉を聞いて青山は息を引き取つた。

千翼がオリジナル。

まさかこんな近くにいるとは赤松を含め誰も考えていなかつた。おまけにあのイユ  
が裏切ることになるとは。

突入口を黒崎隊の隊員たちと確認し、圧裂弾を嫌味たらしく渡してくる札森“局長代  
理”も合流して準備は整つた。各人配置につき突入口を一つずつ埋めていく。

赤松は正面から圧裂弾を持った木村と共に結婚式場へ潜入した。入口からすぐ行つたところで辺りをキヨロキヨロと見回す千翼の姿が見える。

(何を捜している? )

千翼が所定の位置に着いた。木村が圧裂弾を構えランチャー出放とうとしたその瞬間。

「ウアアアアア!!」

「何! ?」

近くに待機していた本田から熱気が放たれる。アマゾンだ。

ヘビアマゾンに変化した本田は知能があるのか、圧裂弾を構える木村を真っ先に襲う。そしてヘビアマゾンに圧裂弾を向けようとする木村。

「撃つな! 木村ア! 」

圧裂弾の威力が分からぬのか、こいつは。優秀であるはずの部下は死の危機に超面した瞬間、パニックを起こしたようだ。今、自分の肉体に圧裂弾が撃ち込まれた。何も考えられない。何が…起きているのかもわからない。

橋はスマートフォンを局長室のテーブルに置いた。新たなシグマプロジェクトは始まつた。数年後には新種のアマゾンですら圧倒的な戦力の前に消え去ることになるだろう。

シグマプロジェクトの資料に目を通してみるとノックもせず黒崎が局長室に入ってきた。自動車いすをドアの方へ向ける橋。

「オリジナルの件、ご苦労だつた。後は溶原性細胞の感染者を始末するだけだ。」「その1人に俺もなつたつてわけですよね。」

「…まあオリジナルとの戦闘で溶原性細胞が君の体内に入つていれば…だがね。」「十中八九入つてますよ。そこで…提案というか、お願ひがあります。」

「君が改まつて…珍しい。…フツ、まさか千翼とイユを見て改心したとでもいうんじや

ないだろうね。」

黒崎は答えようとしない。まさか図星とは。

「聞こう。」

「俺を…」

黒崎の言葉に目を見開く橘。

「…勘が鋭いな、黒崎くん。いいだろう、私が責任を持つて君の願いを叶えよう。しかし

もし覚醒した場合は…。」

「わかつてます。」

「よろしい。」

黒崎は局長室を出てから橘はソファに置かれた千翼のネオアマゾンズドライバーを見つめる。

「千翼：君は…。」

黄色のネオコンドラー・コアが局長室に差し入る日の光に反射して輝いていた。

a f t e r Z

## E p i s o d e 1 「Z i p p e d f r e s h m e N」

子供たちが中庭で遊んでいるのを煌は施設の中から黙つて見ていた。飲み終わつた  
コーヒー牛乳の紙パックをゴミ箱に投げるも入らない。

「ちつ。」

「あ、学校で買ったもんは持ち込み禁止だぞ。」

「んだよ、園長にはチクんじやねえぞ。」

「わかってるよ。でもこの前も怒られてなかつたか？」

「俺は緋彩とはちげえんだよ。」

煌は下に落ちている紙パックを拾つて勢いよくゴミ箱に投げ捨てた。制服のシャツ  
を出し、茶色の髪を立てるようになしたワックスの使い方。典型的ないきつて  
いる中学生の相貌だ。

一方の緋彩と呼ばれた少年は整つた髪に学ランのボタンを上まで閉めているよう  
な

優等生といつたところだろう。学生カバンも丁寧に使っているようで煌のものとは比較にならないくらいピカピカだ。

「エリート学生さんはさつさと部屋で勉強でもしてろ。」

「そうさせてもらうよ。お前もアイツらに混ざりたいならそう言えよ。」

「はあ!? なんで俺がガキなんかと…!」

「お前は何やかんやで面倒見がいって園長言つてたぜ。」

そう言つて部屋を出ていこうとする緋彩。扉を開けるとそこには幼稚園から帰つてきた施設の子供が目をこすりながら立つっていた。

「お、おかえり。みんな外で遊んでるぞ?」

「うん…でも僕…。」

「どうした? 泣いてんのか?」

「そうじやなくて…目が…かゆいんだ。」

そう言つて子供はこすつていた目を緋彩に見せた。その目は真っ赤になつておりそ

こから黒い血管のような模様が浮き出でている。

「これ…テレビでやつてた…やつ！おい煌！」

「それどころじゃねえ！外が！」

外の何人かの子供たちは体から熱を放ち異形の者へと変化していく。そんな様子に泣き叫ぶ別の子供たちを喰らう。

「ひい！」

緋彩も逃げようとするが外にいた子供が変化したアマゾンに噛みつかれ血がスプリングクラーのように飛び散る。

「緋彩お！うわああ!!」

先ほどまでの平穏な日常は崩れていく。これがテレビで報道されていた溶原性細胞とかいうやつによつて人間がアマゾンになつてしまふ現象なのだろう。

溶原性細胞を持った親から生まれた子供が母体を通して感染する事例も少なくないと言つていた。ワクチンを打つていたにもかかわらず発症してしまうとは…。

死ぬ直前にこんなことを考える余裕があるとは思つていなかつた。血が止まらない、意識が遠のいていく。

「やめろお！ 来るな！ くそ！ 緋彩！ 緋彩お！」

煌の声が聞こえる。「俺を呼んでも無駄だ。逃げろ、煌。」そう言いたいがもう声を出す力すら出ない…。

目をつぶつたその時、施設の窓ガラスが割れる音で緋彩は再び目を開けた。霞んでよく見えないが外からまたアマゾンが入ってきたようだ。

(ああ、煌もやられる。)

しかしそのアマゾンは子供が変化したアマゾンの心臓を一突きにし絶命させた。外からは大量のアマゾンが施設内へ入つてくる。2人を助けたオツドアイのアマゾンは襲い掛かるアマゾンを狩るために再び外へ飛び出していく。

緋彩のもとへ煌が駆け寄ってきた。

「もう大丈夫！もう大丈夫だ！」

（よかつた…でももう俺は…終わりだ。）

緋彩は静かに目を閉じる。煌の自分を呼ぶ声が意識が遠のくまで聞こえ続けていた。

隊服を身に纏つた男たちが武器を構えながら倉庫に近づいていく。加藤は輸送用バ  
ンの中から指示を出し、それぞれ出口になりえる場所に人を配置し終える。

『福田隊長、準備完了です。』

「よし、準備はいいな。突入！」

福田の指示でそれぞれ内部へ入っていく。中には溶原性細胞の感染者たちがウロウ

口しており、突入してきた男たちを見るとエネルギーを放出させながらアマゾンへと変化していく。

「つたく、ワクチンちゃんと打つておいてもらわないとね！」

『どの企業もワクチンを打つ余裕があるわけじやないですかね。』

「まあそうだけどさ、こうなつちや意味がないわけじやない？ そう思うでしょ、カトちゃん。」

「三崎！ 無駄口叩いてんじやない！」

「はー、マコさんに似てきたな、こりや。すいませーん！」

サブマシンガンでアマゾンたちの急所を狙う三崎。その横からネオアマゾンズドライバーを装着した悠がタイミングを見計らっている。

「悠お坊ちゃん！」

「久しぶりに聞きましたよ、それ。」

アマゾンズインジェクターをインジェクタースロットに装填した。内部の液体がネ

オアマゾンズドライバーを通して悠に注入されていく。

—NEW・OMEGA—  
ニユーオメガ

「アマゾン……」

緑色の熱を発しつつ、球体のエネルギー・フィールドを構築。それがはじけるようなエフェクトがかかり、悠はニューオメガへと変身した。5年前とは違つてニューラングアーマーをはじめとする装甲はネオ同様完全なものになつていて、

「あつち！」

「悠が変身する時は離れてくださいといつも言つてるじゃないですか！」

「くうー！また美月お嬢様に怒られちゃつた！」

「狩りに集中しろ！」

福田の叱咤に「やべやべ」という表情を見せる三崎はサブマシンガンの引き金から指を離す。

—CLAW・LOADING—  
クーロー・ディング

アマゾンネオクロードを装備しニユーオメガは先端部分をアマゾンたちの方向へと勢いよく飛ばした。アマゾンたちの腹部を貫通させ3体同時にとどめを刺す。

「悠！ 残りの1体は私が！」

「頼んだ！」

福田隊の紅一点 美月が弱つた1体に短機関銃で脳天を打ち抜く。傷口から黒い血を噴き出して最後の1体も倒れた。

「よーし、これで5体全部完了かな。」

『待ってください、ここで駆除できたのは4体です！』

「ということは1体は外に出たということか!? どこから?』

「上…ですね。』

全員が上を見上げるとそこに穴があけられている。ここから残りの1体は逃げたの

だろう。

「すぐ追いましょう！」

駆除班の一団は外へ出てニューオメガ以外は加藤が運転する輸送用バンに乗り込んだ。ニューオメガは自身のジャングレイダーに跨つてアマゾンの勘というやつを働かせた。

「……つちだ！」

倉庫は海岸沿いにある。ジャングレイダーも朝早い寂れた港を走っていく。上を見るとクワガタアマゾンが作業員の服を着用しながら空を飛んでいるのが見える。

「この距離じゃ攻撃が届かない……」

どのようにクワガタアマゾンに攻撃を当てるか。アマゾンネオニードルでは対象に届くまでに殺傷能力が軽減してしまうだろう。

ジヤングレイダーを止め見上げていると近くにヘリコプターが飛んでいるのが見える。扉の部分には“4C”的ロゴがでかでかと貼られているのが札森のセンスらしい。扉が開きそこから1体の銀色のアマゾンが飛び降りてきた。

「あれは…！」

— A<sup>ア</sup> M<sup>マ</sup> Z<sup>ゾ</sup> O<sup>ン</sup> · S<sup>ス</sup> T<sup>ト</sup> R<sup>ラ</sup> I<sup>イ</sup> K<sup>ク</sup> E —

銀色のアマゾンはフットカッターによつて回し蹴りのようにクワガタアマゾンを切り裂いて真つ二つにした。

クワガタアマゾンの死体は海にボトボトという音とともに落ちる。銀色のアマゾンはニユーオメガの近くに着地し、紫色のバイザーを手で拭つた。

「アマゾン…ニユーシグマ。」

かつて駆除班によつて狩られたアマゾンシグマにアマゾンネオの装甲とバイザーが装着された相貌をしているアマゾンニユーシグマ。向かい合う2体のアマゾンの元にそれぞれ2台のバンが近くに止まる。

「悠、行くぞ。」

「…はい。」

福田に呼ばれアマゾンズインジエクターを取り外すと冷気を放ちながら悠の姿に戻る。自分が乗ってきたジヤングレイダーで輸送用バンに続いてその場を去っていく。

一方の4Cのロゴがついたバンからは札森が出てきた。

「帰るよー、グズグズすんな。」

指示に従いニユーシグマはバンに乗り込んだ。立つたままのニユーシグマのネオアマゾンズドライバーに装填されているアマゾンズインジエクターを札森は雑に抜き取る。

「変身解除と。」

ニユーシグマは人間の姿に戻り、無表情で座る隊員たちの中の空いたスペースに座

る。札森は自身の言うことを聞くこのシグマ隊を見て鼻で笑った。

バンの中で福田はタブレットにメールが1件受信されていたことに気が付いた。

「……九州に行つていた二宮隊が戻つてくるようだ。」

「お、じゃあ久しぶりにノンちゃんに会えるね。カトちゃんもワカちゃんとしばらくやつてたんだつたよね？」

「別に私は若槻に会いたいとかはありませんが……。」

運転しながら眼鏡をあげつつ後ろの席の三崎に言う加藤。

「それと俺たちに面識はないが二宮隊には1体アマゾンもいるらしい。」「え？」

悠は驚きを隠せない。無理もないだろう、実験体は5年前に全滅し、千翼はもういな

い。シグマタイプも4C以外では作られていないはずだし、残る可能性は溶原性細胞によつて生まれたアマゾンということになる。

「溶原性細胞の感染者で：理性があるアマゾン：つてことですか？」

「詳しく述べ俺もわからないが：。とにかくその旨を水澤本部長から把握しておくようにとのことだ。」

悠は美月と顔を見合させた。今悠と美月はかつて住んでいた豪邸に住んでいる。というのも野座間製薬が溶原性細胞に対するワクチンを開発したことで再び上場企業となつて事業拡大が可能となつたのだ。

令華は“特定有害生物対策部”的トップとして本部長に返り咲いたため、家も取り戻すことが出来たのだろう。その本人は相変わらず家に戻つてくる事はないが。

一方野座間製薬がまた大きい組織に戻つたことで4Cの価値は下がつた。駆除に関しては野座間製薬の方が優れて いるし自由に小回りできる金もある。

半官半民の4Cでは機動性に欠けると世間からの評価を受け今やテナントを1つ借りて札森が局長として駆除を続けてる：のが表向きの4C。

実際は野座間製薬が4Cから手を引いたことで完全に政府機関の1つとなり、莫大な

予算を投与してニューシグマをはじめとするシグマタイプのアマゾンを率いて駆除に当たつているらしい。

5年前、オリジナルである千翼を狩つてからすぐに福田と美月は4Cを辞めたことから詳しいことを彼らも把握していなかつた。

二宮隊との集合場所に着いたものの二宮隊の車はどこにも止まつていない。

「あれー、早すぎましたかね。」

「確かに集合時間にはまだ早かつたですね。」

美月の時計は午後1時42分を示している。

「あらら、新しい時計！これはどうしたんですう〜？」

「いや、これは…！」

「僕が買ったんです。美月欲しがつてたから。」

何の恥じらいもなく三崎にいう悠。そんな悠の腕を美月は無言で叩く。

「おうおうおう、禁断の兄妹愛ですなああ！」

「そんなんじやないです！」

「……あれは！」

悠は空き地の向こう側に少年が立っていることに気が付いた。

「誰だ？」

「あれは……ああ。二宮隊の一人ですね、名前は……」

加藤を含めた福田隊の隊員たちはその少年が取り出したアマゾンズドライバーに目が留まり黙ってしまう。

「あれって……」

少年はアマゾンズドライバーを腰に巻き付け、アクセラーグリップを捻つた。

「O  
M  
E  
G  
A」

「ウ  
オ  
オ  
オ  
オ  
！  
ア  
マ  
ゾ  
ン  
ツ  
！」

—  
E  
V  
O  
L  
U  
·  
E  
V  
O  
·  
E  
V  
O  
L  
U  
T  
I  
O  
N  
!!—

釣り目のような赤いコンドラーが光り、緑色の熱と共に少年の体がアマゾンへと変化していく。悠がドライバーを使わずに変身した際のアマゾン態に非常に似ているが、体には赤い傷のような模様が施されている。

「君は…。」

「ア  
マ  
ゾ  
ン  
・  
殺  
す  
う  
う  
う  
！」

アマゾンアナザーオメガと呼べるそのアマゾンはアームカッターを大きくさせながら右手を横に構える。

「来るぞ！」

隊員たちはバンの中に戻り武器の準備を整える。まさか二宮隊のアマゾンがここで覚醒するとはだれが考えられただろうか。

悠もネオアマゾンズドライバーを腰に巻きアマゾンズインジエクターをインジエクタースロットに装填する。

— N E W · O M E G A —  
ニユ· オ· メ· ガ

「アマゾン……！」

熱気を放ちつつニユーオメガに変身するとアマゾンズインジエクターを操作し武器を生成する。

— B L A D E · L O A D I N G —  
ブレード · ロードィング

2人は武器を構えながら睨み合う。そして同時に動き出し刃を重ねた。

社長室の扉からノックの音が聞こえた。

「どうぞ。」

中に入ってきたのは黒髪の爽やかな見た目の少年。

「お呼びでしようか？」

「ああ、緋彩。またアマゾン狩りを頼んでもいいかな？」

「もちろんです。どこですか？」

「乙地点のハイフン7・5だ。2体のアマゾンが戦っている。」

「かしこまりました。」

一礼して部屋を出ていく緋彩。目黒は賀闇製薬代表取締役のネームプレートをハンカチで拭きつつジヤングレイナーで去っていく緋彩を窓から見下ろしていた。

アナザーオメガは本能のまま攻撃を繰り出すもニューオメガによつて全てかわされアマゾンネオブレイドによる一閃をうけ後ろへ吹き飛ぶ。隊員たちもニューオメガの優勢さをみて援護射撃を撃たない。

「大したことなさそうだね。まあ俺たちがやつたらひとまりもないんだろうけど……さ。」

「油断するな、三崎。 いつ攻撃の矛先がこちらに向いてくるかもわからんぞ。」「りょーかい。」

アナザーオメガは福田たちのことなど見えていない様子だった。溶原性細胞の感染者であれば真っ先に人間を狙いに行くはずにも関わらずあくまでニューオメガだけに固執するのはよくわからなかつた。

アームカッターとアマゾンネオブレイドが再びぶつかり、ニューオメガはアナザーオメガに己の疑問を投げかける。

「君、本当に新種のアマゾン!? どうして人間を狙わないの? もしかして……実験体の生き

残りとか!?」

「一緒にすんな、お前らとな！」

左腕を見るとアマゾンズレジスターどころかネオアマゾンズレジスターすらつけられていない。鷹山仁と同じくアマゾンズレジスターによる投薬なしで理性を保つているのだ。

「君はいったい……！」

「話すことなど何もない！」

右手のアームカッターでニユーオメガに攻撃をしようと手を振りかざした瞬間、ニユーオメガとアナザーオメガの双方にアマゾンネオニードルによる射撃が命中した。

「ぐう！」

「うあ！」

「なんだ!?」

隊員たちも攻撃の方向を見る。そこには赤い体にネオアマゾンズドライバーで変身した者に形成される装甲を纏つたアマゾンが立っていた。緑色のバイザーといい体のいろいろといいアルファをイメージさせる。

「仁…さん？」

「お前…！」

アマゾンニューアルファというべきそのアマゾンは2人に襲い掛かる。三つ巴の戦いに隊員たちは援護射撃を撃つか迷っていた。ニューオメガを助けるために銃を撃てば片方が隊員たちに襲い掛かってくるかもしね。ニューオメガの助けを見込めずそのような状況に陥るのは合理的ではない。

「悠！」

しかしそんなことを考えず美月は短機関銃でアナザーオメガとニューアルファへ攻撃を与える。

「…お前…邪魔をするなら消えてもらう！」

アナザーオメガは美月に向かって襲い掛かろうとしたが、それをニューアルファは止め、アームカッターで腹部を切り裂いた。

「ぐあ！」

人間がいくら攻撃してきても絶対に人間は傷つけない。そんな覚悟をニューアルファから感じるニューオメガ。

「仁さん…？ 仁さんなんですよね？」

ニューアルファは黙つたままニューオメガに襲い掛かる。

— B プ B ブ  
L レ A レ  
A イ D イ  
D ド E ド  
· L ロ L ロ  
O ! O ! A デイ  
A デイ D デイ  
I I N N G グ  
N G —

2体のアマゾンのアマゾンネオブレイドがぶつかり合つた。この感じ……違う、これは仁ではない。

長年に渡つて戦い続けてきたアルファはこんな甘い攻撃の仕方はしてこない。そもそも彼は武器を滅多なことがない限り使わないのだ。

「君は…誰だ！」

「アマゾンに話すことなどない。消えろ。」

—A·M·A·Z·O·N·S·T·R·I·K·E—

左手を使つてインジエクタースロットを操作しネオアマゾンズドライバーを装着するアマゾンライダーのキック技 アマゾンストライクを発動させようとするニューアルファ。

左足を軸足として右足のフットカッターでニューオメガに斬りかかろうとした時、福田隊とはまた別の部隊がニューアルファに向けて発砲した。

ニューアルファはバランスを崩し倒れる。ニューオメガは後ろに下がつて銃を撃つた部隊の方を見た。そこから1人全速力で走つてくる女性。望だ。

「おらあ！お前何やつてんだ！」

自分の方に来るかと思わず手で顔を覆っていたニユーオメガの方ではなく起き上がりうとするアナザーオメガの方に蹴りを入れる望。

「いてえ！」

「煌！先に行くんじやねえ！勝手なことすんなよ。」

「す…すいません。副隊長！」

「ふ…副隊長？」

ニユーオメガの驚く声を聞いて望は声をかける。一方のニユーハルニアは姿勢を立て直すと今度はアナザーオメガに襲い掛かろうとするも、二宮隊と福田隊がニユーオメガとアナザーオメガを囲むような陣形を取った。

「…」までか。」

ニユーハルニアは冷氣を放ちながら緋彩に戻った。

「待てよ！緋彩！」

アナザーオメガも少年の姿に戻り声をかけるも、緑色のジャンサーチャーをしたジャングレイダーに乗つてあつという間に去つていった。

それを追いかけようとする少年だつたが三崎がその首根っこを掴む。

「おいこら！なーんで坊ちゃんに襲い掛かつたりしてきたんだよ！」

「うるせえ！俺はアマゾンを1匹残らず狩るんだよ！」

どこかで聴いたことがある台詞。この煌という少年にしても先ほどのアマゾンにしても仁の影を悠に見せてくる。千翼を狩つた日から数度戦つたが、最近はパツタリと姿を見せなくなつてしまつた。

「お前いい加減にしろ！悠は駆除班の仲間だ！手出したらウチが許さねえからな！」  
望の一声で静かになる少年。

「それと、このメンバーで行きてえとこがあんだけど。」

運転手の加藤はその場所を聞くことなくナビの目的地を検索履歴に残っている霊園に設定した。

緋彩は賀閣製薬の本社ビルに着くと社長室へと直行した。3・4階にエレベーターが到着し扉が開くと金と黒で莊厳な雰囲気を醸し出している廊下が一直線にある。

その先の扉を開けば秘書室があり、そこをさらに抜ければようやく社長室……というわけだ。

社長室の扉をノックすると目黒の声がした。扉を開けると険しい皮をした目黒が社長室の椅子に腰をかけている。

「言いたいことはわかるね。」

「はい、申し訳ありません。」

「分かっていればいいんだ。今回は溶原性や寄生型ではなく野座間のアマゾンだつたし

まあいいとしよう。それにしてもまさか賀閣製薬われわれあいづらが野座間製薬のざませいやくの二の舞になるとはね。」

「…。」

「君に言つても仕方がないことか。」

「…失礼します。」

出口に向かおうとする緋彩を引き留める目黒。

「分かつてるよ、緋彩くん。彼に関するては安心したまえ。」

「…はい。」

緋彩は社長室の重い扉を開け出ていった。

三崎は“志藤家”的墓石に水をかけ、その間に望は火をつけた線香を香炉皿に置いた。2人が手を合わせそれに続いて駆除班の面々が手を合わせていく。

最後に煌も手を合わせるが知らない人の墓に参るというのはどうも釈然としないようだ。

「あの…誰の墓なんですか？」

パンに戻る道の途中で二宮に尋ねる煌。

「高井くんが前に入つていた隊長のだ。」

「アマゾンに喰われちゃつたんすか？」

「いいや、アマゾンになつちやつたんだよ。」

後ろにいた三崎が珍しく真顔で答える。

「それって：溶原性細胞とかいう？」

「うん、溶原性細胞のオリジナルのアマゾンと戦った時の傷が原因でね。」

「それで…。」

「狩つたよ、僕が。」

三崎の隣で歩く悠が自分の手を見つめながら言う。煌は腕組みをしながら悠の目の前で立ち止まつた。

「やっぱアマゾンつてろくな奴がいねえな。アマゾンになつちまつたとはいえ仲間だつたんだろー・どこかに閉じ込めておくだとかもつとあつただろーが！」

望が煌を殴ろうとすると、福田が望の前に入つて煌の頬を思いつきり殴つた。

「いって…。何すんだ！」

「…志藤さんはこうなることを望んでいた。」

「はあ!?」

殴られた勢いで地面に転がつていた煌に若槻が手を差し伸べて立ち上がらせた。

(なんなんだよ、こいつら。)

煌はノザマペストンサービスに着くまで納得がいってない様子。

一方の望はようやく志藤に会えたことへの安心感と最期の瞬間傍にいることが出来なかつたことへの後悔の気持ちの両方を感じながら帰りの車内はずつと黙つていた。

街の中に流れる川のほとりに洒落たカフェテリアがある。そのテラスでは男女をはじめとする数組の客が景色とコーヒーを楽しんでいた。

テラスの中にあるカウンター席に座るサラリーマン風の男の元に彼が頼んだアイスコーヒーが運ばれて来た。

彼は絶品だと評判のアイスコーヒーがいかほどの味か仕事ついでに確かめようと思つたのだ。一口飲んでみるとその熱さに思わず声が出てしまう。

「あつち！ おいおい、アイスつて頼んだだろ！」

「え：確かにアイスコーヒーをお持ち致しましたが…？」  
「はあ？ これ触つてみろよ！ すごく…あつ…い…？」

右手から熱が発せられている。コーヒーや熱いのではない。今自分の手が熱気と共に別の生き物のような相貌に変わってきたのだ。

ノザマペストンサービスのアジトに置かれたパソコンから機械音が流れる。長くここから離れていた望にとつては懐かしい音だ。

「はい、駆除班。」

『アマゾンの通報です。場所はN地区M川のほとり。カフェテリアにて客がアマゾン化した模様です。』

「溶原性か？」

『それはまだ確認できていません。』

「了解。だそだ。」

加藤が通信を切ると全員で行けば機動力に問題があるということで福田が全員に指令を出した。

悠と煌は当然出撃。狙撃担当の福田と美月、物理攻撃担当の望と若槻が現場に行く。一方の二宮と加藤、そして片腕というハンディを持つ三崎はアジトで待機することとなつた。

「二宮、情報を逐一報告してくれ。溶原性か寄生型かで戦い方が変わつてくるからな。」「了解。よろしくお願ひしますよ。」

福田隊の運転手だつた加藤が待機となればバンを運転できるのは隊長である福田だけとなる。ジャングレイダーに乗る悠以外は申し訳ない顔をしながらバンの後ろから乗り込み、福田は運転担当に戻ることとなつた。

組織というのは巨大な力となり得るが、巨大であるがゆえに身動きがとりにくくなつたり、情報の共有が遅れてしまうことがある。しかし今の4Cは約10年前に使つていたオフィスで十分間に合う機関となりかえつて身動きがとりやすくなつた。

⋮と札森は納得していた。4Cという機関でまともな昇進が可能な役職といえば局

長だろう。5年前は臨時の局長代理になつた時もあつたが、結局前局長である橘が戻つたことでただの副隊長になり下がつてしまつた。

今や札森は局長となつた。こんな小さなオフィスの一機関の局長に。

「ハーア…。ま、今の方が楽でいいけどね。」

5年前、座り心地が良さそうに見えた椅子は対していいものではなかつたが、とりあえずは今の状況に納得している。部下は両手の手で数えるくらいの数ではあるがアマゾンの駆除率は格段に上がつてゐる。

「そろそろついたー?」

『あと3分で到着予定。』

「りようかーい。野座間が来る前にお願いしますよーっと。」

この無機質な返事には聞き飽きたが絶対服従をするシグマタイプのアマゾンにはかなり満足している。これまで見た中で命令に従わなかつたシグマタイプのアマゾンはいなかつた。あの男でさえ今は自分の言うことを素直にきく。

「あ、イユは逆らつてたか。」

1人の暗いオフィスの中、札森は呟いた。

笑顔にあふれていたカフェテリアはキノコアマゾンによつて血生臭い惨劇の現場と化した。血が抜かれた人々の死体があちこちに転がつている。

最初に現場に到着したバンには、『4C』のステッカーが貼つてある。中からサンングラスをかけた屈強な男たちが6名ほど降りてきた。

「ヴウウ……？」

キノコアマゾンはその者たちの臭いが自分と同じアマゾンであることに気が付いたようだ。不思議そうな素振りを見せる。

「ターゲット確認  
「対象を抹消します」

隊員たちがそれぞれ咳きはじめ、左腕の袖を捲り上げた。それぞれの腕につけられているのはネオアマゾンズレジスター。

かつてイユが使っていたものとほぼ同様のものだ。技術の発達によつて今やアマゾンズドライバーで変身したアマゾンとほぼ同じスペックを装着者にもたらすことが出来る。

「「「「アマゾン」」」

5人の隊員がネオアマゾンズレジスターのクチバシ状のスイッチを押し込むと一斉にアマゾン化が始まる。

全員アマゾンシグマとうり二つの姿をしたシグマアマゾンはアマゾンズドライバーは当然腰には巻かれていない。ネオアマゾンズレジスターのランプは赤を示している。そして最後の1人がネオアマゾンズドライバーを腰に巻きながら前に出てきた。男の右耳にはめられたワイヤレスタイプのイヤホンから札森の声がする。

『じゃあお願ひしますよ。黒崎隊長。』

黒崎はサングラスを取りアマゾンズインジェクターをネオアマゾンズドライバーに装填し、内部の液体を注入する。

| N<sup>ニユ</sup>E<sup>イ</sup>W<sup>・</sup> S<sup>シ</sup>I<sup>グ</sup>G<sup>マ</sup>M<sup>ア</sup>A |

「アマゾン」

紫色の炎をあげながら黒崎の体が変化していく。紫色のバイザーにニユーラングアーマーを身につけたアマゾンニユーシグマに変身を遂げた。

「狩り、開始」

ニユーシグマの声に反応してシグマアマゾンたちがキノコアマゾンを囲むような陣形を取る。

キノコアマゾンがあたふたと周りを見回している間にシグマアマゾンたちは引っか

き攻撃や噛みつき攻撃を繰り出す。キノコアマゾンの体からは血が噴き出し、シグマアマゾンたちの目にこべり着く。

—B·L·A·D·E··L·O·A·D·I·N·G—

ニューシグマの右腕にアマゾンネオブレイドが召喚される。さらにインジエクター スロットを操作して必殺技が発動。

—A·M·A·Z·O·N··B·R·E·A·K—

腰を低くして構えたニューシグマは驚異の跳躍力でキノコアマゾンに斬りかかる。胴体が半分に割れその死体の中から同じく半分に割れた人間の死体が出てきた。

「…ターゲット沈黙。寄生型アマゾンだつたと思われる」

『あー面倒だなあ…。ま、うまいことやつとくんで。じやあ帰つてきてください。』

札森の指示を聞いてアマゾンズインジエクターを取りニューシグマから黒崎の姿に

戻った。周りのシグマアマゾンたちも冷氣を放ちつつ人間の姿になり、アマゾンとサラリーマンの男の死体を踏みつけながらその場を去つていった。

アジトで待機していた加藤のインカムに福田から通信が入つた。

『二宮、いるか?』

「二宮隊長は今席を離れます。」

『加藤か。まあいい、たつた今現場に到着した。既に駆除は終わっている。やり方から見て4Cだろうな。』

『シグマ隊ですか…。それで対象は?』

『寄生型アマゾンだつた。コアごとやられている。』

『相変わらず手段を選びませんね…。了解しました。水澤本部長に報告しておきます。』

加藤は福田からの通信を切るとすぐに『水澤令華』と書かれたボタンをクリックした。

『はい、水澤です。』

「こちら福田隊 加藤です。たつた今、福田隊長から連絡がありました。着いた頃には4Cによつて寄生型アマゾンが駆除されていました。」

『寄生型…ということは人間ごとですか。』

「はい、とりあえづこちらに帰還するそうです。』

『わかりました。ご苦労様。』

令華は野座間製薬役員フロアの廊下を歩きながら通話を切つた。手には寄生型アマゾンの資料が握られている。

寄生型アマゾン。溶原性細胞によつて現れたアマゾンが野座間製薬が開発したワクチンによつて覚醒を防がれた辺りから現れ始めたアマゾンだ。

その名の通り、生き物に寄生することで生きるアマゾン。最大の特徴は寄生される対象が生きたままであることだ。養分を吸い取りつつ宿主を蝕み続ける子のアマゾンは何としても駆除しなくてはならない。

旧4Cビルのほとんどは衛生省関連の別機関によつて管理されている。しかし研究棟のみシグマタイプのアマゾンの管理のために今も4Cが所有しているため、札森もそこへ向かつた。

研究棟の中は寂れた外観とは相対して多くの研究者たちによつて賑わつてゐる。存在が世の中に明らかになつてアマゾンに関する研究をする者も増えたことが影響しているだろう。

担当の研究者が札森を迎え入れシグマタイプのアマゾンを管理する部屋に案内した。

「じゃあまだ作れそうすか?」

「はい、毎日全国の拘置所から遺体が運ばれてきますのでそれにアマゾン細胞を移植し続けています。大半は拒絶反応が酷くて肉体が使い物になりませんが…。」

「それでも十分ですよ。んでネオアマゾンズドライバーを使えそうなやつは?」

「駄目ですね。とても作れる気がしませんよ。なぜ黒崎が使えるのかすらわかつていませんから。」

やはり無理かと札森は落胆する。ネオアマゾンズドライバーを今まできちんと使え

たのは千翼と悠だけだ。天城や商は結局副作用によつて苦しんでいた。

千翼のデータは4Cに残されていたが悠の情報は少ないため、ネオアマゾンズドライバーを使えるものの特徴は未だにわかつていない。

数年前、アマゾンとの戦いで黒崎が死にその遺言によつて黒崎はシグマタイプのアマゾンとして利用されることとなつた。

一方悠によつて回収されたネオアマゾンズドライバーは4Cによつて引き取られ、それを改造することで黒崎の体質に合わせたものになつた。

そうは言つてもシグマタイプのアマゾンが皆ネオアマゾンズドライバーを使えるわけではない。むしろ使用可能なものなど珍しいのだ。

黒崎は何の拒絶反応を起こすことなくそのネオアマゾンズドライバーを使ってニューシグマへと変身し駆除を続けている。

札森はオフィスに帰り机の中にしまつてある血だらけの封筒を取り出した。封筒のあて名の部分には『遺書』と書かれている。黒崎が駆除に行く際にいつも胸ポケットに入つていたものだ。

——これを読んでいるということは俺が死んだということだろう。俺の死後、もしオリジナルから直接入つた溶原性細胞が覚醒することなく俺が死んだとしたら俺の死体をシグマタイプのアマゾンにしてもらいたい。そして4Cの戦力として俺を使え。そ

れがイユや千翼を利用し続けてきた俺の責任だ。――

札森は鼻で笑いながら再び便箋を封筒へ入れて机へしまった。

「自分をアマゾンにしてほしいとか…。どうかしてるな。」

札森は窓から曇り空を眺めていた。

## E p i s o d e 2 「O p p o n e n t」

死にかけている緋彩の腕に注射器が刺さる。中学生になつても注射が嫌いだつた緋彩で打たれるとなれば泣きだしてしまつような女々しさだつたので今は意識を失つていることが幸いしたかもしない。

それにしてもここはどこなのだろう。どこかの学校：いや大学に連れてこられたようだ。多くの試験管やフラスコが置かれているがここしばらく触れられた跡はない。

妙に冷静でいられるのはなぜだろうか。自分をここまで連れてきたのはアマゾンであるのに。施設の子供たちが変貌し同じ子供を喰らつていたあのアマゾンと思いつ出しただけで震えが止まらなくなつてくる。注射器を置いた男が煌の傍に寄つてくる。

「大丈夫：大丈夫だ。」

煌が目を覚ましたのはノザマペストンサービスのアジトだつた。ビールの缶があちこちに転がつておりそれを避けながらトイレに入る。

あの日の夢を見るのは久しぶりだ。緋彩も同じような夢を見ることはあるのだろうか。

そんなことを考えながら煌は便座に座つた。

会議室から令華は真っ先に出てきた。寄生型アマゾンをどのように駆除するか。その議論がここ数か月の議題であつた。

寄生型アマゾンは宿主が生きている状態で肉体を支配していく。生きている人間ごと殺してしまうのが一番手つ取り早い駆除方法であるが、駆除班の者たちがそんな命令に従うはずもない。

初めはその命令を押し通そうとしていたものの、最近は悠や美月の強情っぷりに圧倒され口を出すのをやめていた。

しかし宿主を傷つけないようにしようとするとため、寄生型アマゾンの駆除率は4Cに比べ抜群に悪い。「口を出しても無駄」などと言つてゐる場合ではないのだ。

4Cよりも優れていることが世間に証明されなくては再び事業縮小も避けられまい。令華はスマートフォンのアドレス帳からノザマペストンサービスをタッチした。

『私は。皆さんにお話があります。』

加藤は指示通りハンズフリーにして二宮隊、福田隊の隊員たち全員に令華の声を聞こえるようにした。

『この度役員会議で寄生型アマゾンの駆除方法が決定しました。“宿主”こと駆除”とのことです。国の方にも許可を取つてあります。』

「そんな…待つてよ、母さん！」

『これは決まつたことです。しないというのであれば新たな駆除班を再編することも視野に入れる…とのことです。』

「そんな…。」

『現場にいる皆さんがご存知の通り、寄生型アマゾンを宿主から引きはがすことは大変

難しいです。強引に引きはがすとすれば宿主の皮膚、臓器に影響が及び十中八九それが原因で宿主は死にます。』

「それをどうにか出来るようについて私たちは言つてはいるの！」

美月は思わず立ち上がりつて顔の見えぬ母に向かつて言う。

『どうにか出来ていればやつてはいるわ。それが出来ないからこうして命令しているのでしよう。』

「…一つ聞きたいことがある。」

福田が話すと皆が福田の方を向いた。

『アンタは寄生型アマゾンに寄生されたら…自分ごと駆除されることについてどう思う？』

『……自分の体で人を喰うのを見なくてはならないのであれば駆除を望みます。』  
「…そうか。」

令華からの電話が切れた。そこにいる誰もが結論を導き出せない様子だ。

「うつ。」

座っていた三崎が横に倒れ込んだ。どうやら熱があるようだ。昨日はしゃぎ過ぎたせいだろうか。電話の内容についてみんなで話すことはせず布団を出して三崎を寝かせた。

三崎が眠つてからしばらく経たないうちにアマゾン目撃の通報が入る。場所はK地区、工場が多い地点だ。辺りにガソリンなどが積まれている恐れがあつたため、圧裂弾を持たずに前回の出撃メンバーで現場に向かうこととした。

賀閣製薬の4階は研究室エリアとなつている。緋彩はそこで体内のアマゾン細胞の観察と調節を行つていた。

ベッドに横たわり数本のチューブが緋彩の体に繋がれている。しばらくして研究員の1人が寝ている緋彩を起こした。

「調整中すまないね。社長がお呼びだ。」

「ん…、わかりました。要件は？」

「アマゾンだ。」

「…行きます。」

緋彩が起き上るとその拍子に体からチューインガムが抜け落ちた。

目撃情報があつたところに駆除班が到着した。今回バンで待機してアジトと現場の橋渡しとなるのは福田だ。志藤の班にいた頃は毎回その役割だったことを思い出しながら運転席で本を開いた。

それ以外のメンバーは円形の陣を作りながら工場帯に入していく。若槻と望はサバイバルナイフを構え、美月は短機関銃の弾を装填しながら移動する。

悠と煌はそれぞれ自身のベルトを装着した時、石鹼工場の窓ガラスが割れると共に中からゾウアマゾンが飛び出してきた。

音と共にその方向を向いた一同は飛び散る破片を避けつつゾウアマゾンに向けて攻撃を放つ。

「このタイプ：溶原性のアマゾンです！」

「ああ、つてことは容赦する必要はねえ！」

と言つても元は人間なのだが…。アマゾンとなり人間を喰らうようになつてしまつた存在を今から救うことは出来ない。悠はアマゾンズインジエクターをネオアマゾンズドライバーに装填し、煌もアクセラーグリップを捻つた。

— N E W · O M E G A —  
— O M E G A —

「アマゾン…！」

「ウオオオオオ！アマゾンツ！」

— E V O L U · E V O · E V O L U T I O N !! —  
— エ ヴ オ リ ュ エ ヴ オ リ ュ エ ヴ オ リ ュ シ ョン !! —

2人の体から緑色のエネルギーが吹き荒れる。悠の方は球体エネルギーを周りに作

り出し装甲を構築した。

アナザーオメガとニューオメガの姿になる頃にはゾウアマゾン以外のアマゾンも現れる。駆除班のメンバーは円形の陣をより小さくした。

「…！近づくんじゃねえよ、アマゾンが！」

「君だつてそうでしょ。それにこの数のアマゾン…、気を付けなきややられるよ。」

「先輩ぶんじやねえ。行くぞお！」

アナザーオメガはアマゾンズドライバーのバトラーグリップを引き抜きアマゾンサイズを生成し敵の方へ駆けていく。

「おい！煌！先走んな！」

「若槻さん、さつさとやらないと俺が全部狩つちまいますよ。」

「それは困る…今月は金が必要だかんな。行くぞ！」

「待つてください！連携しなくちや…。」

美月の制止を振り払つてアナザーオメガと若槻はアマゾンたちに襲い掛かつていつ

た。それに続いてニユーオメガらも2人を援護する形で参戦する。

アナザーオメガがアマゾンサイズを振り下ろしながらアマゾンたちを切り裂いていく。望は怯んだアマゾンたちの腹部にチエーンソーのような刃がついたレガースで蹴りをいれ内臓を切つて大量の黒い血液を噴き出させる。

— C L A W • L O A D I N G —

ニユーオメガはアマゾンネオクローナ右手に作り、遠くにいるアマゾンたちを近くに引き寄せた。その間に美月はアマゾンたちの体に弾丸を撃ち込む。比較的接近してきたところでサバイバルナイフでアマゾンたちの頸動脈を切つていく若槻。

倒れていくアマゾンは続々と硬直していき残りは片手で数えられるほどの数になってしまった。その旨を望は福田に連絡を入れるも返事が返って来ない。アジトと連絡を取っているのだろうか？

うなされながら三崎は布団にくるまつている。二宮は何かの用事で外に出てしまい、

加藤がパソコンの前で待機している。そもそも加藤は戦闘に向いているタイプではなかつたのでこちらの仕事の方が本人としてもよかつた。

志藤、若槻と共に約5年前まで全国を回つてアマゾン駆除をしていた時も車の中で待機し状況をまとめる役目を果たしていた。

志藤：。

優秀な男だった。リーダーシップに溢れ決断力も人望もあつた。自分が持つていなきものをすべて持つているような男、それが志藤だった。

しかし彼に憧れたことはない。自分は自分だと考えていたし、ああいう立場の人間はああいう立場なりに大変なことがあるのだろう。それでなければアマゾンなどに関わつたばかりに死ぬことなく、旭日章を背負つて今でも働いていたはずだ。

ただ自分は楽な所にいて楽に生活できればいい。仕事では楽をして休みの日は気楽にゲームをして…そんな普通の生活が出来ればいい。

今日も帰つたら新作のゲームを進めなくては…、腕がなる。

そんなことを考えている間、加藤は三崎の体から蒸気が発されていることに気がつかなかつた。

「え？」

「かと…う…！にげ…ろ！」

三崎の体は溶原性細胞の覚醒によつてヤゴアマゾンへと変化していく。

ただ楽にこのアマゾンが蔓延る世の中で生きていたかつた、ただ何も知らずに生きていくのではなく、アマゾンと戦う者たちの傍にいて守られながら生きていきたかつた。しかし今加藤を守るものは誰もいない。武器を手に取ることなくインカムのスイッチを入れて福田に助けを求めようとした加藤の心臓をヤゴアマゾンはかぎ爪で突き刺していた。

「おい！加藤！くそ…！」

加藤の断末魔が聞こえ福田はアジトで何かが起きたことが分かつた。現場からも連絡が入つている。

「こちら福田！どうした!?」

『高井だ。こつちはもうすぐ終わる。通信してたみたいだけどアジトで何か?』  
 「加藤の身に何かあつたのかもしれん、悠と望は車に戻れ。アジトに戻る!』

望はすぐにニユーオメガにその旨を伝えるとニユーオメガはネオアマゾンズドライバーを取り外し悠の姿から戻つて車へ向かつた。

悠たちはボロボロの内装なつたアジトを見て愕然とした。崩れているあちこちの棚、壊された机、心臓を引きずり出された後のある加藤の死体、そして部屋の奥でかぎ爪に突き刺さつた臓物にしやぶりつくアマゾン。

アマゾンの下半身には今朝まで三崎が履いていたジャージが身につけられている。

「お前…。」

「三崎さん…。」

「嘘…だろ…?」

3人の驚きは最もだろう。しかし何度も仲間を失つてきた彼らに取つて哀しい慣れ⋮とでもいうべきものなのだろうか。望はサバイバルナイフを、福田もスナイパーライフルを構えて悠は再びネオアマゾンズドライバーを装着した。

「僕が⋮僕がやります。」

「悠⋮」

| N E W · O M E G A |  
ニユ·一 オ·メ·ガ

「アマゾンツツ!!」

ここまで力んだ掛け声は久しぶりだ。ニユーオメガはアームカッターをヤゴアマゾンの元へ飛びかかりながら振りかざした。

ジャングレイダーが先ほどまで戦闘が行われていた工場に辿りついた。緋彩はメントをハンドル部分にかけて周りを見回す。

向こう側に野座間製薬の清掃班が文字通り清掃を行つてゐるのが見えた。彼らにばれない等にアマゾンの死体と思われる固形物を見るためにしゃがんだ。

溶原性細胞によつて生まれたアマゾンは死ぬと実験体のアマゾンと異なり固形物へと変化する。チエーンソーなどでないと破壊できないほどの強度のものとなるはずだが緋彩の足元にあつた死体の一部にはスライム状の物質がこべり着いてゐる。

「やはり寄生型…」

緋彩はスマートフォンを取り出し目黒の電話に連絡をする。溶原性細胞と寄生型アマゾン細胞。その2つが合わさつた時にどうなるのか、研究室長が喜びそうなネタだと緋彩は思つた。

ノザマペストンサービスの事務所とされてゐたアジトは今回の一件で使えなくなつてしまい、悠たちは野座間製薬会長である天条隆顕の屋敷に身を置いていた。和室の部屋ながら洋風な家具を置くセンスは天条らしさを感じさせる。まもなくし

て令華が駆除班らが待機していた部屋へ入ってきた。

「久しぶりね、悠。」

「…。」

「…美月も。」

ついでのように扱われるのは慣れている。何から言うべきか迷う美月を遮つて福田が令華の前に立つた。

「本部長…溶原性細胞でいつかアマゾンになつてしまふかもそれないことは俺たちも十分承知している。」

「ええ、そんなあなたたちを戦わせることを許可しました。」

「それについてどうこう言うつもりはない。ただこんな悲劇をもう繰り返させないためにも全国に駆除班を作つて一刻も早くこの事件を解決する努力をお願いしたい。」

「わかっています。出来るのならもうしていますから。」

そういうと令華は部屋の外へ出ていった。そう、自分たちはアマゾンになつてしまふ

かもしれないことを覚悟の上で狩りを続いている。しかしこの事件が解決する目安は未だに立っていない。そればかりか寄生型アマゾンなどというまた新たなタイプも生まれている。

仲間を失いながらこのような馳<sup>マダラ</sup>っこを繰り返していいものなのだろうか。

「三崎さん：僕に最後：最後だけ意識を取り戻して言つたんです。」

悠が喋りはじめその場にいた皆が悠の方を向く。悠の手には三崎がいつも首にかけていた五円玉が握られている。

『俺を狩ってくれ：ありがとう』つて。アマゾンになつて僕が斬りかかった時に。自分が死ぬ時に：殺してくれてありがとうだなんて…。』

「…アソツはこれ以上人を殺める前に止めてくれたことを…言つたんだろう。』

溶原性細胞が体の中で潜んでいる福田と望はその気持ちが分かる。もし自分がアマゾンになつて仲間を喰らつてしまふとしたら…考えただけでもゾッとする。

2人は自分の目線で加藤の心臓を喰らう様子を思い浮かべ身震いした。

「溶原性細胞に感染して覚醒すればもうどうしようもないことを三崎さんは知ってるのに…あんなことを言えるなんてとても僕には考えられません。でも…もし寄生型アマゾンの宿主なら…意識があるのに自分の体が大切な人を殺めてしまう。それで自分も殺されてしまう。こんな悲劇ありますか!？」

「悠…。」

「僕はそんなこと認めない！宿主…と殺すなんて絶対にしない！今回の件で決めました。絶対に罪のない人間を殺すことなんてしない！」

「…。」

そういうと悠はその場を飛び出していった。美月はすぐに悠を追つて同じく外へ行く。

福田は近くにあつた椅子に腰をかけた。

「…俺は逆だ。」「え？」

「俺はアマゾンに覚醒したら自分を止めてほしい。どうしようもないのであれば俺は宿主」と驅除する。こういう仕事をしているからこんな決断が出来るのかもしれないがな。」

「ウチも…ウチもそう思う。加藤のような被害者を生むことはもうしたくない。」「福田さん…望さん…。」

若槻は加藤の死に涙を流しているだけだった。しかし決意をした2人を見て涙をぬぐう。その隣に座っていた煌はなぜこれほど早く決断が出来るのか不思議で仕方なかつた。いやむしろ仲間が死んだばかりでなぜそんなことを考えられるのか。

(緋彩なら…どうするんだろう。)

煌は椅子から立ち上がり障子を開けた。目の前には美しい日本庭園が広がっている。悲劇が起こった後の午後とは思えぬ快晴であつた。

外に飛び出した悠の肩を叩く美月。

「大丈夫?」

「うん……めん、なんか感情的になっちゃって。」

「久しぶりに見たよ。悠がああやつて言つてるとこ。離れてる間に……なんていうか……人が死んじやうことに慣れちゃつたのかと思つてた。」

「……慣れることなんてないよ。」

「そうだね。」

部屋に戻ろうとした時、2人を引き留めたのは二宮であつた。

「二宮……隊長?」

「水澤……とどつちも水澤か。美月くん、悠くん。君たちに会わせたい人がいるんだ。」

「会わせたい人?」

「誰ですか?」

「とりあえず……きてくれるかい?」

二宮についていくと黒塗りのクラウンが少し離れた道に停められていた。スーツを着用した運転手が白手袋をつけたまま本を読んでいる。

助手席に二宮が乗り、悠と美月は後部座席に座った。

「本社まで頼む。それと社長に連絡を。」

「もう既にしてあります。」

淡々と答える運転手からはどこか加納の雰囲気を漂わせている。

「本社つて?」

「賀閣製薬の本社だよ。そこの社長が君たちのような人を欲しがつていてる。」

「どういうことです?」

「寄生型アマゾンの宿主とアマゾンを引きはがすことが出来るのだよ。賀閣製薬ならね。」

社長室の椅子にはいかにも社長と言わんばかりの口ひげを生やした男が座っていた。その隣には二宮が立っている。

「私が賀閣製薬社長の目黒です。わざわざ来てもらつて悪いね。」

「いえ…。それよりどうして僕たちを?」

「アマゾン狩りを私たちも始めようと思いましてね。人を集めているんですよ。」

賀閣製薬　野座間製薬のライバル会社であり5年前に野座間製薬が事業縮小したことで業界No.1の座を手に入れた。

しかし溶原性細胞ワクチンの開発に成功した野座間製薬が再び飛躍したことで順位は2位をキープした状態となつている。そこでアマゾン狩りをすることで再び1位に返り咲こうとしているようだ。

「でも4Cも野座間もやつてアマゾン狩りをして意味ありますか?」

美月の指摘をよくぞ聞いてくれたという顔で目黒は資料を2人に見せた。

「これがわが社の開発した分離ロウ成分です。ロウ成分を改良したものとして…」「それは私から説明させてもらおうか。」

社長室に自動車いすに乗ってきた男が入ってきた。

「あなたは確か…。」

「水澤くんの実験体…久しぶりだね。ここで会うことになるとは。」

「どうして局長が？」

「ここにいる時点で局長ではないのは分かるだろう。」

「彼はわが社の研究室長をやつてもらっているんだよ。」

かつて4Cの局長を務めていた現賀閣製薬研究室長 橘が車いすを操作して悠たちに見せていた資料を手に取った。

「ロウ成分は覚えているかね？6年前ほど前に問題になつたアレだよ。」

勿論覚えている。最後の最後に戦う意味を見出したアマゾン 尾宿商をはじめとす

るコツパタイプから抽出されたものだ。

アマゾンは本来人間のたんぱく質を欲する本能がある。しかしロウ成分を摂取したアマゾンは本能に従うことなく同種であるアマゾンを喰いたいという“錯覚”を起こしてしまうのだ。

「それを細胞レベルに働きかけることで寄生型アマゾンに寄生された人間をアマゾンから引きはがすことが出来るのだ。」

細胞が錯覚させる…ということだろうか。とにかく人のたんぱく質に取りついているアマゾンが錯覚することで人から離れるということらしい。

ロウ成分を長くに渡つて研究していた橘の執着の結晶とでもいうべきだろうか。

「とにかくその分離ロウ成分を使えば寄生型アマゾンを宿主を殺すことなく駆除できる…と。」

「その通り。そこで私はあなた方のようにアマゾンを狩り続けてきた者を勧誘しているのです。ここにいる二宮も数年前に野座間から密かに賀閣こちら製薬へ。」

なるほど、ノザマペストンサービスに通報が入る度に賀閣製薬側もアマゾンの動きを察知できたのは二宮が裏切っていたからか。

「悠くん、美月くん。どうかな、賀閣製薬…いや我々に力を貸してはもらえないか？」

やはりそれを提案してきたか。二宮がにこやかな表情で2人に近づいてくる。美月は思わず後ろに下がりそれを守るように前に出る悠。

「まだ納得言つてないみたいだね。では研究室にきてもらえるかな、面白いものを見せてあげよう。」

橋は車いすを社長室の出口に向かわせた。それに続いて悠と美月も部屋を出ていった。残った目黒は社長室の真ん中に置かれたテーブルに資料を置いて二宮に指示を出す。

「二宮くん、緋彩に彼らが来たことを。」

「もう伝えてあります。それと緋彩から工場で覚醒した溶原性のアマゾンたちの体には

寄生型アマゾンが取りついていたとの報告です。」

「うむ、溶原性細胞が寄生型アマゾン同士の共鳴に刺激され覚醒した…という仮説はやはり正しそうだな。」

二宮はニヤリとして一礼すると社長室を後にした。

橘に続いて長い廊下を歩く悠たち。その先に煌と同じぐらいの少年が立っている。

「緋彩、なぜここに？」

「社長が言っていました。かつてある人と幾度となく戦ったアマゾンが来たと。」

「フツ、相変わらず何を考えているのか分からぬ男だ。まあいいだろう、紹介しよう。彼が人間の細胞を持つアマゾン 水澤悠くんだ。」

橘は車いすを広い廊下の端へ寄せた。美月も雰囲気を察してすり足で端へ寄る。緋彩はネオアマゾンズドライバーをアタッシュケースから取り出して装着した。

「それは……！」

「あなたも持つてあるんでしょ。力を見せてくださいよ。」

悠も斜めがけのバツクからネオアマゾンズドライバーを取り出して装着、そして2人とアマゾンズインジエクターを装填した。

| N<sup>ニユ</sup>  
| E<sup>ユ</sup> W<sup>・</sup> A<sup>ア</sup> L<sup>ル</sup>  
| E<sup>ユ</sup> W<sup>・</sup> O<sup>オ</sup> M<sup>メ</sup> H<sup>フア</sup>  
| E<sup>ガ</sup> G<sup>ガ</sup> A<sup>ア</sup> |

「…アマゾン！」  
「アマゾン…！」

2人から赤と緑のエネルギーが放出される。ニューアルフアとニューオメガ、2体のアマゾンが駆けていきパンチを繰り出す。

攻撃をかわしその隙をつこうとするもお互いに相手の動きを読もうとするあまり中々急所に命中しない。

「なら…！」

| N E E D · L E · L O A D I N G |

ニューアルファの右腕にアマゾンネオニードルが出現しそれをニューオメガに向けて放つた。弾丸がニューオメガの左肩を貫く。

「グツ……」

かつてのニューオメガならばこれほどの傷はすぐに治つたが、最近なかなか治りが遅い。

と言い訳をしている場合ではない。ニューオメガは動かしにくい左手でアマゾンズインジエクターを操作する。

| B L A D E · L O A D I N G |

ニューオメガはアマゾンネオブレイドを生成しニューアルファの攻撃を弾きながら接近戦へと持ち込む。

強化された胸部ではなくなるべく関節部分を狙つて斬撃を繰り出す。一方のニュー

アルファも左腕のアームカッターでアマゾンネオブレイドを抑えつつフットカッターで腹部ごと切り裂こうとした。

しかし軸足にしていた左足に急に力が入らなくなる。

「？」

崩れるニューアルファ。それと共に橘が2人の戦いを止めた。

「見事だ、悠くん。まさか緋彩を本当に倒してしまったとは。」「いや、僕は……」

「そんな君に見せたいものがある。来たまえ。」

ニューオメガとニューアルファは冷気を放ち元の姿へと戻る。悠と美月は橘の後を追うように奥へと向かつた。緋彩は自身の左足をさすりながら立ち上がり自室に戻る。

「あのアマゾン…緋彩って言いましたよね。何者なんですか？」

橘が扉の指紋認証をしている間に悠が尋ねる。

「まさかまたシグマタイプを…！」

「それは違うよ、水澤美月くん。確かに私は5年前、溶原性細胞によつて発生した新種アマゾン完全駆除を目的として新たなシグマプロジェクト シグマ隊の組織化を国に提言した。しかし私が在任中には結局それは実現されなくてね。」

「じゃあ一体…？理性は保つてるし。」

指紋の次は網膜のようだ。とても厳重な警備の施設を入つていくようで何が管理されているのかとても興味があるが、今は緋彩の正体の方が気になる。

「緋彩は…君たちもよく知る男にアマゾンにされたのだよ。」

「よく知る…男？」

「鷹山仁、彼だ。」

仁は左目にしていた眼帯を水で洗っている。眼帯とはいっても医療用の物ではなく手ぬぐいを千切つて作ったものだ。

「ふう…結構汚くなつてたな。」

仁の右目は千翼を手にかけてしばらくした頃に治り始めた。逆にアマゾンでありながらここまで再生しなかつたのは珍しいことだつたが、元が人だつたからだろうか。

または溶原性細胞のオリジナルに関することのかたを付けられたから自分を見守つてくれている七羽からの選別だろうか。

右目が正常に見えるようになつて数年前よりは見た目も清潔感がある。服も変えるようになつたし、自分で飯の調達も出来るようになり栄養のバランスも抜群であるため肌にも艶が戻つた。

何よりアマゾンとの戦闘が極端に少なくなつたことが仁にとって健康でいられる要因だろう。溶原性細胞のワクチンが世に出回つてから随分溶原性細胞の覚醒はなくなつた。

ワクチンを接種すれば覚醒することはほぼありえないというのだ、そのようなものを作れるならば初めから作つていてほしいものだ。

(まああのじいさんなら5年前は敢えて出さなかつたつてこともあるな。)

綺麗になつた眼帯を左目につけて強く固結びにした。ワクチンを接種していない溶原性細胞の感染者を再び見つけるために荷物をもつて歩いていこうとした時、近くから子供たちの悲鳴が聞こえた。

それは養護施設：なのだろうか。イースヘブン園と書かれた看板が掛けられている。なぜ中から悲鳴が上がつているのかは見るまでもない。中からアマゾンと人の血の臭いがブンブンする。

仁はアマゾンズドライバーを腰に巻いてアクセラーグリップを捻つた。

| A<sup>ア</sup> L<sup>ル</sup> P<sup>フ</sup> H<sup>ア</sup> |

「…アマゾン！」  
| B<sup>ブ</sup> L<sup>ラッ</sup> O<sup>ド</sup> O<sup>ド</sup> &  
W<sup>ワ</sup> I<sup>イル</sup> L<sup>ド</sup> !! W<sup>ワ</sup> • W<sup>ワ</sup> • W<sup>ワ</sup> I<sup>イル</sup> L<sup>ド</sup> !! |

右目が緑、左目が白のままのアルファに変身した仁は正門を飛び越えて溶原性細胞の感染者たちをアームカッターで斬つていく。

そもそも人の体が未成熟であつたことが『幸いして』それぞれの個体はそこまで強くはない。駆除班のランクで示すならEかDといったところだろう。

「やめろお！ 来るな！ くそ！ 千翼！ 千翼お！」

園内からした声にアルファは思わず振り向いた。

「千翼？」

意識することなく聞こえた声の方へ飛び込んでいくアルファ。子供たちを襲うアマゾンの心臓を一突きにすると気絶しかけている子供にもう1人の子供が声をかけているのが聞こえた。

「もう大丈夫！ もう大丈夫だ！」

まだ人間の子供がいたのか、だが気絶しかけている方はもう助からない。腕の皮膚が剥がされてしまつており、アドレナリンが出ているためそこまでの痛みを感じていないと。ようだがいずれにせよすぐ病院に運んだとしてもこんな田舎では到着する前に絶命するであろう。

アルファはその少年を諦め再び残つたアマゾンを狩るために外へ飛び出していこうとした。

「千翼！ 千翼！」

まだ、その倒れた少年をその名前で呼んでいる。

— V I O L E N T · S L A S H —  
バ イ オ レ ン ト · ス ラ ツ シ ュ

アクセラーグリップを捻ることで強化されたアームカッターで相手を切り裂くバイオレントスラッシュが起動する。

アルファはアマゾンたちの方向へ飛びかかりアームカッターで全員の首を切り裂いていった。

「千翼！・千翼！」

アルファはアマゾンズドライバーを外して仁の姿に戻ると倒れた少年の元へ駆け寄っていく。

「千翼…というのか？」

「違えよ、緋彩だよ。」

千翼…緋彩…。なんだ、聞き間違いか。それに自ら手をかけた息子の名前になぜ…ここまで…。

「…こいつはもう助からない。」

「ハア!? ふざけんな！ 目の前でコイツに死なれたら…胸糞わりいんだよ！ コイツは…俺の友達なんだ！ 同じ施設の友達なんだよ！」

今手の中に入る少年は死にかけている。緋彩、息子の名前の響きとよく似たこの少年

⋮。

仁はいつの間にか始の研究室へ緋彩を連れていた。星埜始、自分のせいでハゲタカアマゾンへと変貌し家族を失った男。彼の研究室の写真を見るとオリジナルを駆除したことは正しかつたと自身を正当化出来る。

研究室のソファに緋彩を寝かすと傍に置いてあつたナイフで自身の皮膚片を切り取つた。

そして注射器を取り出して自分の静脈から血液を抜き始めたとき、扉が開いて緋彩の傍にいた別の少年が入ってきた。

「なんでついてきた。来るなといつたろ。」

「ふざけんな、緋彩が殺されちまうかもしだら。俺がお前を見張つてんだよ。」「偉そだな⋮。お前、名前は？」

「⋮煌。」

「そうか。じやあ煌、お前に1つ頼みたいことがある。今から緋彩は人間として死ぬ。」「はあ!?」

「アマゾンになるんだ。こんなこと本当はしたくはないし、俺のポリシーに反するが⋮。この子を助けるためだ。」

「おい待てよ。そんなことせず病院に！」

「もう無駄だ。医学で助けられる状況じやない。臓器もめちゃくちゃになつてただろう。」

「そんな…。」

仁もこんなことをしたくない。また自らの手でアマゾンをつくつてしまふなど。しかし名前の聞き間違い、緋彩の意識を失う前の力強い意識、視力を取り戻したことで見えてきたもの…。

あらゆる事柄が仁に『ありえない行動』をさせた。

注射の針を変え、自身の血を緋彩の体の中へ入れていく。順応するまでにどんな拒絶反応が起きるかもわからない。しかし仁の生きてほしいと願うその心が緋彩にアマゾンとして生きる道を作りだした。

「じゃあ緋彩は仁さんの…。」

「ああ、鷹山仁のアマゾン細胞を取り込んだ人間。それが緋彩の正体だ。」

仁と同じく第2のアマゾン。それが緋彩。アマゾンを駆除するためならば人としての心を失つてもいいというスタンスだつた仁がするとは思えない行動だ。

千翼を手にかけたことは仁にとつて何かをもたらしたのだろうか。悠は仁が今どこで何をしているのか、そもそも彼は無事なのかを案じた。

「さて、見せたいもの…というのがこれだ。」

金庫の扉のようなハンドル付きの分厚いドアを開けると比較的広い廊下へと繋がっていた。その窓の外には研究室が広がっている。

研究室というよりは実験場…とでも言えるだろう。いくつかの人体が横たわり、中で働いている研究員たちは全員防護服のようなものを着用している。

「これは…。」

「アマゾンに関する研究施設だ。野座間の物を越しているだろうね。」

橘は自慢げに車いすを廊下の隅に寄せた。美月は遠くに見覚えのある体が横たわつ

ていることに気が付いた。

「悠！・あれ……」

美月の指さす方向には驚くべきものが横たわっていた。

悠らが賀闇製薬に行つてからしばらく経つたある日、令華から福田の元にメールが送  
られてきた。

「……これは……」

「なんかあつたんすか？」

望が福田のタブレットを覗きこんだ。

「これって……まじかよ。」

「え、何々？」

若槻と煌も駆け寄つてくる。そのメールには4C解散の内容がかかれていた。  
詳しく述べる。野座間製薬は寄生型アマゾンを宿主」と駆除することに賛成する  
ようになつたため、4Cと考えが一致。表向きは既に解散している4Cであるためこれ  
以上そこに裏の予算を投入するわけにはいかない。

そこで4Cを民営化し野座間製薬に売りつけてしまおうということになつたようだ。

「じゃあ…まさか…。」

メールの追伸にはこう書かれていた。

「本日午後、元4C局長 札森一郎氏とシグマ隊が駆除班と合流予定。」

減つたアマゾンの補充は駆除班の面々とはやたら因縁深いシグマタイプのアマゾン  
…ということになつてしまつた。

## Episode 3 「Parasite」

浜辺では人々が散歩をしている。観光地とするにはあまりに地味なビーチであるもののが地元の人々からは愛されている場所だ。

今時間は休み期間中の高校生たちが海水浴を楽しんでいる。

「おーい！そつち投げんぞ！」

男子高校生の1人がビーチボールを女子高生に投げる。そのボールを取ろうとするも女子高生は落としてしまい、浜辺の方へ拾いに行つた。

「ごめん！投げるね！」

彼がいた場所を振り向くもそこには誰もいない。

「あれ？」

そんな彼女の後ろには失神しながら左胸から蒸気を発する男子高校生が立っていた。

望は周りを見回して誰も見ていないことを確認し雑居ビルの中へ入った。エレベーターに乗つて3Fのボタンを押す。

3Fに到着すると寂れたビルには似合わぬしつかりとした作りのドアにつけられた指紋認証に指を置いた。

電子音が鳴つてから扉を開けるとコーヒーメーカーからカップにコーヒーを注ぐ福田の姿があつた。

「福田さん、おはようございます。」

「ああ、おはよう。今日は俺たち非番だろ。どうした?」

「いえ、別に。」

福田には望の意図は分かつていた。一人でいるのが怖いのだ。もしどこかで、駆除班

の誰もいないところで溶原性細胞が覚醒してしまえば駆除する者が周りにいないことになる。

溶原性ワクチンがあるとはいえ体内に溶原性細胞が入りこんでからしばらくしてから摂取したものだ。溶原性ワクチンの特徴として溶原性細胞が入り込んですぐに接種すればするほど効果がみられる。溶原性細胞が入り込む前に摂取しておけば予防にもなるらしい。

とにかく望や福田は一人でいることをとにかく避けていた。もはや生活の癖になつていてるのかもしれない。望はグローブを装着しスパーリングを始めた。

しばらくして奥の部屋からサイレンが鳴り響くのが聞こえる。すぐに扉が開いておくから札森が出てきた。

「あーまたいるんすか、暇ですねえ。ここ元々4Cが持つてたオフィスなんですからね、きれいにお願いしますよ。」

「それよりアマゾンか？俺たちも手伝う。」

「あーどうですかね。暇なら来てもいいですけど……シグマ隊だけで十分でしょうがね。」

札森の嫌味を耳に入れることなく福田と望は準備を整えた。ビルの地下に停められ

たバンに乗り込むシグマ隊の誰もが運転席に着こうとしない。

「？」

「暇なら運転お願ひします！」

福田は黙つて運転席についた。助手席には望が座る。

「いいんすか、アイツ今は別に上司でも何でもないんだろ。」

「だがアマゾンを狩る仲間だ。アイツの好きにさせてやれ。」

福田の器の大きさには頭が上がらない。そんな寛大さに札森は気がついていないようだが……。

賀閣製薬の社長室の電話が鳴り響く。目黒はそれを取ると定期連絡を受けるかのように淡々と返事をする。

「うん、うんわかつた。それでは悠くんと緋彩に言つてもらいましょ。」

電話を切ると社長室で立っている2人にアイコントラクトを出した。2人は会釈をすると部屋を出していく。

「今回はどうつちですかね。」

「溶原性の覚醒はもうほとんどないよ。たぶん今回も寄生型。」

「ですよね‥。美月さんに分離弾用意してもらいます。」

分離ロウ成分入りの弾丸、それが分離弾だ。撃たれた標的から分離ロウ成分によつて寄生型アマゾンが剥がれる。宿主となつた人間は骨折等の怪我はするものの分離弾によつて死ぬことはないらしい。

緋彩はスマートフォンで美月に電話を入れた後、悠と共に自身のジャングレイダーに乗つて現場へと向かつた。

先に海岸へ付いたのは野座間製薬の駆除班の輸送用バンだ。中からサングラスをかけた4人の男たち、その後には札森と黒崎が出てくる。

「さーてシグマ隊出動。」

札森の掛け声と共に4人は左腕の袖を捲り上げ、ネオアマゾンズドライバーのスイッチを押した。

「「「アマゾン」「」」

4人は体から溢れる熱を振り払いシグマアマゾンへと変化し、海岸を駆けていく。辺りにはアマゾンの姿はない。

シグマアマゾンたちは普通のアマゾンに比べて仲間を探知する能力が劣っている。イユ同様直接視覚で確認するかかなり対象まで接近しないとアマゾンかどうかを判断できない。

しかし今回は探すのにそこまで時間はからなかつた。海岸沿いに植えられた防砂

林の中にアマゾンらしき姿が視覚で確認できる。

「高い所にいるな。黒崎。」

札森の横に無表情の黒崎がネオアマゾンズドライバーを腰に巻きながら現れた。

「黒崎…。」

何とも言えぬ表情を浮かべる福田を見ることなくアマゾンズインジエクターをインジエクタースロットに装填する。

| N<sup>ニユ</sup>. E<sup>イ</sup>. W<sup>・</sup> S<sup>シ</sup>. I<sup>グ</sup>. G<sup>・</sup> M<sup>ア</sup>. A |

「アマゾン」

紫色のエネルギーを放出しながら黒崎の体がじわじわとニューシグマの姿へと変わった。体全体がアマゾンの姿へ変わると紫色のバイザーとニューラングアーマーを構築していくた。

「行け。」

「了解。」

札森の命令に従い木の下まで行くとアマゾンズインジエクターを操作し武器を生成する。

— C L A W • L O A D I N G —  
 クロウ・ロー・ディング

ニューシグマはアマゾンネオクロードの上にいるアマゾンを引きずりおろし、落下してきたところをアームカッターで切り裂いた。

「グゥウ!!」

落ちてきたアマゾンは体のあちこちに丸いものをつけたカビアマゾンであつた。

「ガルウウガルウ…！」

「ターゲット確認」

ニユーシグマの声に反応してシグマアマゾンたちがカビアマゾンに襲い掛かってきた。ネオアマゾンズレジスターによつてアマゾン細胞を覚醒されたアマゾンは今やアマゾンズドライバーで変身したアマゾンとほぼ同じ出力で戦闘を行うことが出来る。

一方のカビアマゾンはただの寄生型アマゾン。溶原性細胞による新種アマゾンとさほど変わらぬ戦闘力であるため戦いは駆除班側の有利な状況が続く。

シグマアマゾンたちによる噛みつき攻撃や切り裂き攻撃でカビアマゾンの体の一部が吹き飛ぶ。吹き飛んだ部分をニユーシグマは避けながら遠距離攻撃を繰り出していく。

「ギュアアアアア!!!」

奇声は発しながらも逃げるカビアマゾン。福田たちも援護射撃をすることなく見守る。

シグマアマゾンの中の1体がカビアマゾンに飛びかかるとしたその瞬間、シグマアマゾンの体が止まってしまう。

!?

「どうした！」

「体が動きません」

札森は眼鏡をあげ福田に指示を出す。

「タブレットとカメラ！早く！」

「もうやつてる！」

福田はカメラをニューシグマたちの方へ向け、タブレットで操作をしていた。タブレットにはカビアマゾンのいる場所一帯にアマゾン細胞の反応がある。

「すぐに全員マスクをしろ！このアマゾン、自分の細胞をまいている！」

カビアマゾンが傷つけば傷つくほど胞子のように細胞が辺りに放出される仕組みのようだ。この胞子を多く吸つてしまふと体に麻痺が生じ、やがて身体機能が停止してし

まうという分析結果である。

やがて他の3体のシグマアマゾンも身体機能が停止し動けなくなってしまった。

「うわマジかよ…。4Cじゃなくなつたからもうシグマタイプ裏で作れなくなつちまたのに！」

コイツは未だにそんなことを心配しているのか。

福田はそう思いながらガスマスクを装着した。

恐らく今までシグマタイプのアマゾンを消耗品のようにしてアマゾン狩りを行つていたのだろう。10年以上の戦いをしている福田に限らず望にもシグマアマゾンたちの動きを見てわかつた。

ただ一人だけ…。黒崎、ニューシグマだけはカビアマゾンの肉片を意識するようになめから避けていた。彼のアマゾンとしての感覚がそうさせているのだろう。

しかし驚くべきところはそこではない。自身の体を守ることを命令されていないにも関わらず肉片を避けているという事実。

それこそ他のシグマタイプにはない、いや5年前に自ら考え千翼について行き、シグマタイプとして“廃棄”されたイユと同じように意思を持つていてる証拠なのだ。

「アイツ…」

札森も気が付いたようだ。彼の右手が震え始めた。札森は震えはじめた手の人差し指を左手で抑える。

「く…）いつも…意思を！」

「札森！ どうした、しつかりしろ！」

「寄生型なんてどうでもいい！ 福田、高井イ！ すぐに黒崎を処分しろ！ すぐにだ！」

「何…言つてんだお前？」

この状況で何を言つているのか、福田も訳が分からなかつた。カビアマゾンに今対抗できるのはニューシグマである黒崎のみとなつてゐる。

意思を持つてゐることで自分たちに何か不利益が被られるのであれば札森の言わんとすることはわかるが全くそうではない。

「落ち着け、札森。今は俺たちを危険にさらす寄生型を倒すのが任務だ。黒崎は味方だ

ぞ！」

「嫌だ…俺は…嫌なんだ！」

札森は手の震えを抑えるのに必死で福田の声などまるで耳に入っていない。

ニューシグマはカビアマゾンの肉片や血液に触れてはいないものの徐々にカビを吸い込み動きが鈍くなつてきてている。

「望、お前は離れていろ。」

福田はスナイパーライフルに弾を装填し、カビアマゾンの頭部にスコープのライトを当てる。

「ここだ！」

福田が引き金を引いた瞬間、突如ジヤングレイダーがウイリーしつつ現れ、ボディでその弾を弾いた。

「何!?

「この人は殺させません。」

ジャングレイダーを止めヘルメットを取つたのは悠であつた。

「悠……お前今までどこに……。」

「福田さん、煌は?」

「非番だ!」

「ならここは僕に任せてください。緋彩!」

悠の呼びかけに応じるようにもう1台のジャングレイダーに乗つて現場に到着して  
いた緋彩は何もする事無く現場を去つていつた。悠の腰には既にネオアマゾンズドラ  
イバーが巻かれており、そこにアマゾンズインジエクターを装填する。

—NEW・OMEGA—

「アマゾン……」

爆風と共に体がニューオメガへと変わり変身を完了する。

「悠、あのアマゾンは自身の肉体からアマゾン細胞を放っている。その細胞を吸い過ぎると体が麻痺してしまうぞ。」

ニューオメガは行動を停止しているシグマアマゾンたちの方を見た。呼吸が止まり体に酸素を取り入れることが不可能になつたせいか変化が解けて人間の姿へと変わりその場に倒れ込む。

シグマタイプなりの死に方…といえるだろうか。

— N E E D · L O A D I N G —  
ニードル ロードィング

アマゾンズインジェクターを操作してアマゾンネオニードルを生成した。その先をカビアマゾンに飛ばし体を拘束する。

これならば遠距離からカビアマゾンの動きを拘束できるため、アマゾン細胞を体内に取り込む恐れはない。しかしそれと同時に攻撃を繰り出すこともしないニューオメガ。

「悠！その武器で弾を放て！その距離からでも攻撃できるはずだ！」

確かにアマゾンネオニードルは射撃機能も搭載している。しかしそんなことをすれば宿主まで殺してしまう恐れがある。それを説明しようとした時、ちょうど美月が現場に到着した。

「悠！撃つよ！」

「頼む！」

圧裂弾を撃つ際に使用するものによく似たランチャーを構えカビアマゾンに弾を放つ美月。

カビアマゾンに命中すると甲高い奇声を発しながらのたうち回り始めた。

「ギイイイイイイイイ!!!」

カビアマゾンが木にぶつかつたり岩にぶつかつたり、時には地面に頭を叩きつけることで徐々に宿主の姿が見えてきた。

「よし！」

ニユーオメガは一度アマゾンネオニードルの拘束を解き、すぐに宿主の体にその先を巻き付け直して引っ張つた。意識を失つてはいるもののカビアマゾンから引っ張り出された宿主は呼吸をしている。

一方のカビアマゾンをはじめとする寄生型アマゾンは宿主を失うと安定を求めて近くの新たな宿主になりえる者に寄生しようと飛びかる習性を持つ。

カビアマゾンは分離弾を命中させるためにギリギリまで接近していた美月に向かって飛びかかる。

「美月イ！」

ニユーオメガはすぐにアマゾンネオニードルをカビアマゾンに巻き付けようとするとが、右手に力が入らない。それもそのはず、右手の変身が解けて人間の腕へと戻つているのだ。当然アマゾンネオニードルもない。

（そんな……）

危機に瀕した美月を救つたのは接近戦で上半身がほぼ機能していないニユーシグマによるカビアマゾンへの体当たりだつた。

カビアマゾンは木に衝突しその場でピクピクと痙攣し始める。まもなくしてその体は液状化して死亡が確認された。

「ターゲット…沈黙。」

福田はマスクを付けた状態でトランシーバーで野座間製薬に連絡を取つた。札森はそのトランシーバーを奪い叫ぶ。

「システムYBR—19を起動！ ターゲットはBとUからX！ すぐに実行しろ！」

このコード…どこかで聞いたことがある。

「…！ シグマタイプの廃棄プログラム…！ お前一体何を！？」

「俺はもう…殺したくない！ 俺の手で…殺したくない！」

福田にはようやくわかつた。

札森は“アマゾンを殺すこと”が怖いのだ。5年前、初めてイユを自分の手で葬つた。

戦闘を避けていた彼に取つてそれは初めての殺戮。対象はアマゾン：しかし元は人間だった少女だ。

札森は自身でも気が付かぬ間にイユと共に任務をこなす事で心のどこかにイユを道具以外として見ていたのかもしれない。

それを彼女がアマゾンとして死んだあと、この5年間でジワジワと実感する。アマゾンが現れシグマアマゾンたちが対象を狩る姿を見るたびにイユはこのようにして死んでいったのかと。

意思を持つたシグマタイプのアマゾン。それをまた自分の手で殺さねならない。それはもう二度としたくない札森にとつてのトラウマであつた。

5年間で進化したネオアマゾンズレジスターにつけられた廃棄プログラムは何時問も必要としない。電気ショックを受けたかのように痙攣する5体のシグマタイプのアマゾンたちは全身から黒い血を噴き出しながら溶けていった。

札森の安心した笑顔は他人から見れば狂氣じみたものになつてゐる。彼が握りしめ

ていたトランシーバーを福田が取り返した。

「こちら福田。：札森を専門の病院へ頼む。彼はもうアマゾンとは戦えない。」

煌はショーウィンドーに飾られたストライプの服に目を奪われていた。非番となつた煌たちは東京観光に貴重な時間を割いている。路地へ入ると人通りが少なくなるだけあつてますますマニアックな服が揃つた店が立ち並んでいる。

「若槻さん、こっち結構いいぜ！」

煌が後ろを振り向くと黒服の男たちにガスを吸わされて倒れる若槻の姿があつた。

「なんだお前ら！」

「俺とお前で2人になるためだよ。」

煌が再び前を向くとそこにはジャングレイダーを止めた緋彩が立っていた。

「緋彩……！じやああいつらは……。」

「賀閣が雇つた奴らだ。悪いようにはしない。」

「緋彩、俺ずっとおまえを探してたんだ！お前と一緒に戦うために……。鷹山仁にお前と同じようにアマゾンにしてもらつたんだ！俺たちの仲間を殺したアマゾン：俺も憎いんだ！」

「……本当にそうなのか？」

「はあ？ 当たり前だろ。俺たちをあんな目にあわせやがつたんだ。アマゾンは憎い……。」

「そうじゃない。仁さんがお前をアマゾンにするわけがないって言いたいんだ。」

確かにそうだ。仁は緋彩がアマゾンなつてから彼にはずっと付きつきりではあつたものの、煌に対しては距離を置こうとしていた。煌が一度別の施設に預けられたのもそのためだ。

確かに鷹山は俺のこと嫌つてたけどよ。あの後またアマゾンに襲われた時、アイツは助けに来てくれたんだ。俺も怪我しちまつたけどアマゾン細胞入れてもらつて何とか生き延びて……。」

「本当か？」

「はあ？」

「良く思い出せ。本当にお前は“生き延びた”のか？」

「…え？」

「え？ ジャあ悠やお前は賀閣の情報を全部ウチらに横流ししてたつてわけか？」

望は輸送用バンの中で美月から事の経緯を聞いていた。悠と望は二宮に連れられて賀閣製薬へ“引き抜き”された…という話。

実は分離弾の存在を耳にしてから賀閣製薬の持っている情報をそつと野座間製薬に渡していたのだ。規模や予算を考えても賀閣製薬の技術を野座間製薬が活用する方がアマゾン駆除には効果的なのだ。

ただ賀閣製薬はその技術を野座間製薬に対抗するための武器にしている。そのため

そんな貴重な情報を野座間製薬に渡すことなどするわけがないのだ。

そこで悠と美月はいわゆる二重スパイのようなことをしていたというわけだ。今朝、令華の方から野座間製分離弾の生成に成功したとの報告が入り再び野座間製薬に戻つ

た…というわけらしい。

「まどろっこしいことしゃがつて！」

「すいません…。そうだ、賀閣の研究室の話…母から聞きました？」

「…いや聞いていないが？」

福田も運転席から美月の質問に答える。

「私と悠…とんでもないものを見ちゃったんです。悠はその処理に向かつたと思いま  
す。」

2人は美月から聞く話の内容に驚きを隠せなかつた。

「どういう…ことだよ。」

煌は緋彩を睨みつける。：睨みつけることで気分を紛らわせていたのかも知れない。

思い出してしまつた。自分がなぜアマゾンになつたのか。いや違う、アマゾンになつたのではない。

自分は“初めからアマゾンだつた”のだ。…と。

「嘘…だ…。俺は…施設にいて…それで…！」

「寄生型アマゾンは宿主の脳を完全に乗っ取ることが出来れば宿主の記憶も共有できることは今までの事例でも明らかになつてゐる。俺はお前と再会した時、お前はシグマタイプのアマゾンになつたと思つていたよ。だつて…お前はもう仁さんに殺されているんだから。」

悠は研究員たちを氣絶させながら力づくで賀闇製薬の研究室に辿りついた。

(いた…。)

数か月前に見た者はまだそこに横たわっていた。忘れもしない、何度も戦つた彼の顔

を。

ガラスの中に仮死状態か睡眠状態になつた鷹山仁の体は両目の光を失つていた頃に比べて皮肉にも若々しさを取り戻していた。

# Last Episode「？uin？uennum」

この施設に来てから随分と経ったが未だに煌は慣れていなかつた。緋彩や仁を探す毎日のせいで学校には行つていないし、当然友達も出来ていなかつた。

煌は今日も朝早く合羽を羽織つて施設の柵を乗り越える。また今日も緋彩がアマゾンになつたあの研究室へ行くためだ。

（今度こそ俺も鷹山にアマゾンにしてもらうんだ。）

そしてアマゾンになつてしまつた、アマゾンに喰われ死んでいつた前の施設の仲間たちの敵を取る。

大学は施錠されておらず簡単に入ることが出来た。研究棟に侵入し、南京錠で封じられた星埜始の研究室へはペンチを使つて忍び込む。

「だれだ？」

まさか本当に誰か中にはいるとは…。

「…！」

「…お前は。」

奥から出てきたのはずつと探していた男 鷹山仁。前の施設で助けられた時に比べて息が上がっている。

「いた…鷹山！」

「お前…なんでこんなところにいる。」

「俺をアマゾンにしてくれよ！」

「前も言つただろ。俺はもうアマゾンを増やしたくねえんだ。」

「じゃあなんで緋彩は…！」

そこまで言つて煌は思い出す。緋彩は死にかけていて、仁の細胞を移植してもらつたおかげでアマゾンとして生き続けることが出来ているのだ。

「分かつたら帰れ。な？」

「嫌だ：俺はアマゾンたちに復讐する！頼む、俺を連れていくてくれ！」

煌は仁の元へ駆けていき、服の袖を掴んだ。予想外の行動に思わず後ろへのけ反る仁。

「よせ！今の俺に…近づくな！……ウグウ…！」

仁の様子がおかしい。息が上がりながら膝をつくとやがてその場でのたうち回り始める。

「お…おい、鷹山！」

「に…げろ…！」

仁の体からアマゾンズドライバーを使うことなく蒸気が放出される。辺り一面が白い熱気に包まれ煌は周りを見回す。

「逃げるつて……どこに……！」

煌が目線を下にやると腹部を赤いアマゾンの腕が貫いていた。

悠は仁が眠っているカプセルの近くに置かれていたパソコンを調べる。そこには仁の5年間の身体情報や彼に何が起きたのかが事細かに記載されていた。どうやら数年前に賀閣製薬はイースヘブンの残党などから情報収集し、仁の居場所を特定したようであつた。仁本人からはほぼ情報は得られておらず、ほとんどの情報は緋彩から聞いたことのようであるが…。

仁は溶原性細胞のオリジナル 千翼を狩つてからしばらくした辺りで右目の視力が回復したらしい。賀閣製薬からの協力要請にも応じず緋彩を連れてただ1人でアマゾンを狩り続けていた。

戦いを続けていく中で仁の体に異常が見られ始めたという。徐々に理性を保てなくなつている感覚。仁はもはや手段は選べないと考え、緋彩を賀閣製薬に預けた。やがて彼の師である星埜始が教鞭を取っていた大学構内にて仁は覚醒。理性を保て

ないアマゾンとして賀闇製薬に取り押さえられた。

煌は自分の出生を思い出し膝をついて絶望している。それを見つめながら緋彩は話を続けていた。

「仁さんを抑えたのは俺だ。仁さんが持っていたネオアマゾンズドライバー。それを俺が橘の命令で持ち出していたから、それを使って止めたんだ。」

「ああ…あああ!!」

「人間とアマゾンの細胞の両方を持っているとアマゾンの細胞は変化していく。溶原性細胞もその1つだつて仁さんは言つてた。そして仁さんもそのアマゾンの1人。仁さんの細胞は寄生型アマゾンを生み出す細胞に変わっていたんだ。」

「それで…俺を殺した時…！」

「俺を殺した時じやない。『煌』を殺した時、『お前』が煌の死体に寄生したんだ！仁さんの体からな！」

そうだ…今まで自分の記憶だと思つていたのは煌という人間の体にあつたもの。自分は…アマゾン。

「嫌だ…俺は嫌だ！煌だよ、緋彩！俺は煌だ！」

| N E W · A L P H A |

緋彩はアマゾンズレジスターをネオアマゾンズドライバーに装填していた。すぐに煌もアマゾンズドライバーを腰に巻いてアクセラーグリップを捻る。

| O M E G A |

「…アマゾン！」  
「アマゾンッ!!」

悠は仁に関するレポートを隅から隅まで読んだ。仁が確保された時に手に付着していった血は少年のものという記載はあつたものの、煌を特定する資料にはなつていなかつた。

10年以上相手にしていればわかる。恐らく野座間製薬の会長 天条隆顕の命令で寄生型アマゾンに寄生された煌の死体は野座間製薬が回収していたためデータが残つていないのでだろう。あくまで人間の体を“貴重なサンプル”として手元に置きそなうな会長の考えによつて。

次のページには寄生型アマゾン細胞の情報が断片的に記載されている。人間に寄生型アマゾン細胞を入れれば寄生型アマゾンはやがて人間の体を乗つ取つてしまふ。溶原性細胞を体に持つた人間に寄生型アマゾン細胞を移植した際はアマゾンへの覚醒が早まつたというデータもある。

そして人間の死体に寄生型アマゾン細胞を移植した場合。それは人間の記憶等を引き継いだアマゾンの誕生の可能性。まさしく煌のケースそのものであつた。

すべてを読み終わつたうえで悠の考えは変わらない。仁の体は寄生型アマゾン細胞のオリジナルであつた。彼は今殺さなくてはならない。

「仁さん…あなたは十分罪滅ぼしをした。これ以上生きていたらさらに罪を重ねることになつてしまします。：許してください。」

悠がネオアマゾンズドライバーを腰に巻いたアマゾンズインジエクターを装填し液体を注入する。

「アマゾン…！」

しかし体に変化が起きない。

「あれ…どうして…。」

次の瞬間、カプセルに入った仁の目が開きとてつもない突風が熱気と共に吹き荒れる。

「ぐあ！」

悠は後ろに飛ばされ、研究室内の機器に体を強打した。カプセルがあつた方を見るとそこには全裸でアマゾンズドライバーを腰に巻く仁の姿があつた。

「旨そうな…匂いがするなあ…。」

「仁さん…僕です！ 悠です！ わかりますか!?」

「今から喰う奴の名前なんて知るか。じつとしてりやすぐ終わらせてやるよ。」

そういうと仁はアクセラーグリップを捻る。

—A L P H A—

「アアマアゾオオン!!」

—B L O O D & W I L D!! W · W · W · W I L D!!—

仁の肉体は前に見たアルファの姿よりもよりおぞましい姿に変わっていく。それはアルファというよりもアルファアマゾンというべき姿であつた。ネオのオリジナル態にも近いその姿を見た悠はもう人間としての仁は死んでいることを確信する。

「煌と同じようにもう人間としての仁さんは死んでるんですね。今のあなたはただのアマゾン。それなら…狩りもしやすい！」

もう一度アマゾンズインジェクターを操作し液体を注入する悠。今度はネオアマゾンズドライバーから音声が鳴る。

— N E W · O M E G A —  
ニユ  
オ  
メ  
ガ

「ウオオオ!! アマゾンッ!!」

自分の戦闘意欲に答えてなのだろうか。久しぶりに感情をむき出しにした変身で悠の体はようやく変化し始めた。ニューオメガはアルファアマゾンに飛びかかる。しかしアルファアマゾンの全身の棘に刺され右手から血が噴き出す。

「ぐ……！」

「ん? なんだお前アマゾンか? なんでそんな旨そうな匂いがお前から……ま、いいか。」

アルファアマゾンの体当たりはニューオメガを怯ませる。しかしそのタイミングでアマゾンズインジエクターを操作し武器を生成する。

— B L A D E · L O A D I N G —  
ブレード  
ロード  
イング

アマゾンネオブレイドで接近しているアルファアマゾンに斬撃を食らわせる。奇声を発しながら後ろへ下がるアルファアマゾンに続いてフットカツターで攻撃をするニユーオメガ。

かつて理性的な戦い方で悠を追い込んだ仁も理性が失われればただの獣。最近パワーが落ち始めたニユーオメガでもアルファアマゾンを仕留めることにそこまで苦労はしさそうだ。

「グアアアア！俺はア…人間を喰いてえんだアアア!!」

「ハアハア…仁さんの体で…そんなことを…言うな！」

「おい！これは何だね！」

崩壊する研究室に現れたのは目黒と二宮だ。アルファアマゾンがカプセルから出ていることに驚きを隠せない目黒。

「悠くん…君は！」  
「ラツキイイ！」

アルファアマゾンはすぐに2人の所に飛びつく。

「危ない！」

悠が警告した頃には時すでに遅し。二人は首筋からアルファアマゾンに噛みつかれ喰われていた。

「くそおおおお!!」  
— A M A Z O N • P U N I S H —

ニユーオメガのアマゾンパニッショウが繰り出されると、それを左手で抑えるアルファアマゾン。出力が弱くなつていていためか人間を喰らつたことでアルファアマゾンのパワーが強くなつたせいか。普通のアマゾンであれば一撃で死ぬ攻撃を押さえこむアルファアマゾン。

「ウオオオ!!!」  
— A M A Z O N • P U N I S H —

もう一度アマゾンズインジェクターを操作し、今度はアマゾンネオブレイドでアルファアマゾンに斬りかかる。2度の必殺技使用にネオアマゾンズドライバーから火花が散り始め、壊れた。だがそんなことに構うことなく両手の凶器をアルファアマゾンに押し続けるニューオメガ。

「ウアアア!! 仁さん!!」

その呼び声に一瞬アルファアマゾンの力が緩む。その隙をついてニューオメガの攻撃はアルファアマゾンを切り裂いた。

釣り目のような赤いコンドラー・コアのアマゾンズドライバーを投げ捨てるニューアルフア。煌の首を掴んで持ち上げている。

「緋彩……俺は……煌……だ。」

「煌は死んだ。お前は：アマゾンだ。」

「緋彩オ……！」

「安心しろ。全てが終わつたら：俺もそつちへ行く。それが仁さんのやり方だ。」

「仁さんはなんで俺を助けてくれたの？』

研究室でネオアマゾンズドライバーの調整をしている仁に緋彩は尋ねた。

「ん？…それは何というか人違い…だな。」

「人違い？」

「ハハ。ほんとはさ、生きて欲しかつた奴がいたんだ。そいつとお前の名前が似てた。  
そんだけよ。」

「そんだけつて…。じやあ仁さんの氣まぐれのせいで俺死んでたかもつてことじやない。」

「わりいわりい。でもさ、そいつを失つてから分かつたんだよ。そいつが生きる道もど

こがあつたんじやないかつて。その可能性を模索することなく俺は…。」

仁は言葉を詰まらせて窓の方を向いていた。たぶん泣いているんだろう。この人はアマゾンとの戦いでは強いがこういうことには…弱い。

「俺も戦うよ、仁さん。俺だつてもうアマゾンなんだろ。」

「そうだな…もし俺が戦えなくなつたら。その時はお前がすべてのアマゾンを狩ってくれ。俺の代わりに。」

ニューアルフアの手には黒い液体がべつたりとついている。手を払いその液体は地面に散つた。ネオアマゾンズドライバーを外し緋彩の姿に戻るとその目には涙があふれていた。

大病院の一番上は野座間製薬によつてフロアごと貸し切りになつてゐる。関係者以外は一切の立ち入りを禁止されており野座間製薬から用いられたセキュリティが敷かれている。そこの1室に令華はノックをしていた。

「入りたまえ。」

「失礼します。」

中にはあらゆるチューブに繋がれた天条がベッドに横たわつてゐた。無理やりででも存命しようという意思は最早狂気に近い。

「どうなつたかね。」

「はい。賀閣の元にあつた鷹山仁は悠によつて処分されましたが、こちら側のサンプルであつた煌も賀閣のアマゾンにやられました。それと会長はご興味がないかと思いますが、賀閣製薬の社長 目黒氏は死亡。今回のアマゾン研究を秘密に行つていたことが世間に公表されたため、賀閣製薬へのバッティングは免れないかと。」

「どうでもいいな。2人のサンプルが死んだ。それが重要だ。」

「お言葉ですが会長。以前アマゾンは人間の手に負えるものではなかつたと結論付けら

れたのではないですか？どうしてまた興味をお持ちに…。」

「水澤悠の存在だよ。」

「悠の…？」

令華はしばらく考え方点がいった顔をした。

「なるほど。悠の体が人間に近づいていることですね。」

「アマゾン細胞を取り込んだ人間 鷹山仁。その息子 千翼。それぞれが別のアマゾン細胞へと体が変化していった。そして人間の細胞にアマゾン細胞を加えてできた水澤悠。それも例外ではない。」

「しかし悠はいずれの2人とも違う変化を遂げています。アマゾン細胞が人間に近い細胞へと。」

「水澤悠こそ人間がアマゾンを越した存在へと昇華した証！私は今までアマゾンを至高の存在だと考えていたがそんなことはなかつた！まだ人間は…面白い！」

天条は呼吸器を自分で外し高笑いを上げる。ベッドの近くに置かれた椅子に座る令華も満足そうな顔をしていた。

検査室から出てきた悠を見つけた美月は手を振つて場所を示す。それを見た悠は美月の元へと駆けていった。

「ごめん、お待たせ。」

「どうだつた？」

「うん、今のところ寄生型アマゾン細胞は見られないって。」

「よかつた…。」

「そうは言つても僕はアマゾンだからあんまり関係ないけどね。」

「でも何かあつたら心配だから。」

「ありがとう。」

美月の頭を撫でた悠は感謝の言葉を告げる。しかし本心では嘘を言つてしまつたことを謝りたかった。

「寄生型アマゾン細胞が：残つてゐる？」

医師と研究者によると悠の体には寄生型アマゾン細胞が残つてゐることだつた。それが自分の体にどう影響するのかはわからない。何せ悠はあまりに特異体質すぎるためサンプルがないからだ。

だがこれからやることを変えるつもりはない。どこかへ旅立つていつた緋彩とも約束したのだ。全てのアマゾンを狩ると。

そして終わらせる、この悲劇を。

悠は赤いコンドラー・コアのアマゾンズドライバーを自分のリュックサックに入れて病院を出た。目の前には笑顔の美月が悠に手を差し伸べている。